視覚、１８０度の世界にて

解法辞典

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生、仁科正美はこの日までは生物学上の雄である。うたた寝から起きた時、彼の置かれた状況はまるで変っていた。縮んだ背丈、少し高くなった声、伸びた髪、そして丸っこい身体。この瞬間から彼は何となく気が付いていたのだ。世界が変わっている。今の世界における男とは、即ち雌であるのだろうと、気が付いていた。

目次

世界の変化と友人と ―――― 1
誰も優しくないクソッタレな日々 21
ストレス性二重記憶喪失 ―――― 46
周りの奴らは先んじる ―――― 68
空に輝く園　前編 ―――― 92
空に輝く園　後編 ―――― 118
環境に流されるのと適応は違う ―――― 147
死地と思うか好機とみるか ―――― 175
分かりあえない彼と、俺と ―――― 187
今更でも認めたくない ―――― 204
ポジションと距離感 ―――― 224

世界の変化と友人と

この世界では男が孕む。

目が覚めて感じた違和感の正体はこれで大方の説明が出来るようだ。性別で言えば男という呼称が雌で、女という呼称が雄。しかし、身ごもるのが男でも、乳をあげるのは女であるらしい。女も男も子育てに必要で、争いに不向きな体だ。今はまだ、人類の歴史に関して深く調べはしなかったが、携帯の画面からの情報が此処が俺の知る男と女の役割とは逆さまな世界で尚且つ全てが真逆ではないと教えてくれた。

俺は、仁科正美は、大学の長期休暇を利用し三つ離れた県に住む友人を訪ねるべく乗った走る高速バスの中で、夢と思いたい現実に直面していた。

椅子に座った俺の太股の上にはソフトボール程にズボンが膨らんでいる。俺の常識で言う所のおっぱいの大きさとは、この世界で言う金玉の大きさだ。孕むのが女の子宮ではないのであろう事が分かった時に、理解出来た。思うに、こいつが男の孕み袋なのだ。

エロ漫画でしか見た事がないような、冗談のような愚息の大きさも納得がいく。何せ

赤ん坊が通るのだ。女性の腰回りよりも細い事の方が、寧ろ奇跡だろう。

ガラガラの高速バス。でなければ、こんな恥ずかしがりもせずに性知識について、雌が調べるのもままならない。一方通行のバスの中で、家に帰る事としてもあと一時間の旅は我慢しなければならない惨状で、乗客が少ない事だけは嬉しかった。

履歴の消去と共にブラウザを閉じる。昨日の友人との連絡と、現在の状況を照らし合わせ無ければならない。正直な話、今日の俺は非常に危険な状況にある。簡単な話である。

俺が今日、女友達をぺろりと頂く予定だったからだ。

中学時代の同級生。メールは結構マメにするし、お互いに誕生日は祝い合う。近頃はどちらかの都合がつかず約三年は会っていないが、こうして会う約束を取り付けた。しかも泊まりでだ。昨日までの俺は、彼女は俺に気が有ると考え、口説き、こうして会う約定となっている。何せ、毎年誕生日を祝ってくれる上に、高校時代も毎年バレンタインはチョコをくれていた。今日の泊まりも彼女は許可している。

俺は、今日に告白して、勢いのままいけると確信していた。

今のいま、までは の話だ。

毎年に誕生日を祝い合い、バレンタインチョコを渡した仲であり、わざわざ高速バスに乗って会いに来る。そんな雌が今の俺なのだろう。

逆だ逆、ふざけやがって、俺が健気な女のようではないか。正直、滅茶苦茶焦っている。このままでは俺は美味しく食べられてしまう羊も同然なのだ。

しかもスケジュール帳によれば二泊三日だと、冗談じゃない。こちとら、この世界における化粧の仕方もろくに知らないのだ。そのままで過ごすとしたら、まるで無防備に安心しきった姿を晒してしまう。

じっと、景色を見るふりをして反射して映る自分の顔を見る。

こいつ、多分気合入れて来てやがる！

いや白状する。思い出せば俺自身が気合を入れていたのだ。前日に美容院に行き、全ての一張羅は下着も含めて新品だ。迂闊であった。浮かれすぎていたんだ。小分けにした荷物を見れば、俺が入れていた制汗スプレーやブレスケアなどは、加えて更に化粧セットも入っている。だというのにちゃっかり買って置いた避妊具は無くなっている。

この世界の俺は、多分色ボケしているか、まるで危機感のない奴である。

下らない事に思考を費やしている内に、目的地への到着は３０分を切っていた。このままでは、非常にまずい事になる。早急に、この世界の俺、雌の俺の意識調査をしなければならない。これで勝負下着を用意していたのなら最早疑いようもない。そうした場合は諦める事も視野に入れる。仮に俺が惚れていて、その末に行動を起こしているのなら、彼女が信用に足る人物かを見極めればいいのだ。

そうだ、何も拒絶することは無い。優良物件ならば、遠距離恋愛になる程度の話なのだ。俺の知る友人の人物像は、決して悪意を持って人と接する人物ではない。

そう、この大きなカバンの中身に勝負下着が有った場合は、作戦をシフトする。

なんか、子供向けアニメの円盤が大量に入っていらっしゃるっ!!

えっなんで、おかしいだろ。馬鹿じゃねえのコイツ。異性の家に泊まるんだぞ？数年会っていなかった旧友だぞ?なんでアニメの上映会をする気満々なんだよおかしいだろ。正気じゃないだろ、ていうか落ち着け、俺。

本当に友達としてしか見ていない感じか？確かに俺だって男友達とは徹夜でゲームしたりアニメ見たりカラオケに行ったりするけど、異性として認識してない感じの旅行ですか？

不味い、非常に不味い。異性として意識してないのは寧ろ致命傷だ。このままじゃぼんやりしている内に、後ろからバッサリだ。確実に喰われる。上映会による阻止で喰われなかったとしたら、それはそれでアイツが不憫すぎるだろ！

玉の上に置いていた携帯が震える。見るに、どうやらアイツは駅に着いたようだ。覚悟を決めるしかないだろう。兎に角、全ては、雌雄があべこべになった世界でのアイツがまともな奴なら問題はない。

その上で身体を許せないようだったら、アイツには悪いがアニメを三日間観れば済むだけの話だ。

「久しぶり、にっしー雰囲気変わった？」
「そういう葉山はがっつり変わったな、コンタクトにしたのか。」
「前みたいにノッポって呼んでいいよ。」
「人前で言ったら悪口みたいだろ、俺は大人になったんだ。」
「大人、ね。あだ名はさて置き、メールだとにっしーは丁寧語だからタメ口を聞いてるだけでちょっと安心するよ。」

パンツにポロシャツと手提げかばん。気合の入った格好ではないが、そこまで不快感の有る訳でもない。
性格がそこまで変わってない所も、俺にとっては安心できるポイントだ。

「取り合えず、私の家に荷物を置いてから何か適当に食べに行こうよ。」
「別に俺はこのまま行っても構わないが。」
「男の子に大荷物を持たせてそのままってのも肩身が狭いからさ。」
「そんなものか？」
「隣駅だからさっさと荷物を置きにいこうよ。」

着いていくままに、葉山希の家へと来た。
外観は思ったより質素。されど一人暮らしのマンション暮らし。俺が住んでいるところよりは少しばかり都会とは言い難いが、寧ろ安い家賃で広い部屋が借りられるのかもしれない。
荷物を置かせてもらって、向かい合うように床に座っても尚、随分と広い部屋である。
それに、ゲーム機もあるから円盤も再生には問題なさそうだ。

「昼飯を食べに行くのは、飲み物を飲んでからにしようか。にっしーは麦茶で大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ。ちょっと台所を見せてくれるか。」
「いいけどどうして？」
「備えによっては、晩飯は作った方が安上がりだろ。」
「にっしー料理出来るの！」

ずいっと俺に、近づいてきた葉山。どうやら異性の手料理への喰いつきは中々らしい。

　中学時代のあだ名がノッポであったように、彼女は普通の女性と比べても十分に背が高い。見た目もそれなりに整っていて、容姿もカッコイイ系。元の世界で言えば、背が高いイケメンと同じような扱いなのだろう。
　この世界になって、大分縮んでいるらしい俺の目線からすれば、見上げなければいけない程だ。元々、葉山の方が背が高いから、目線がどうのこうのでドキッとする事は無かった。
　それでも顔が近いのは事実だ。

「俺一人で作らせるつもりか？」
「いやあ、家庭科では専ら洗い物ばかりだったから。」
「一人暮らしして何年だよ……。」
「味ご飯って安上がりなもんでね、へへっ。」
「オーブン付きのそれなりに良いキッチンなんだから、もったいないぞ。帰りにスーパー寄って材料を買おうな。」
「分かったよ。お昼は食べたいものとかある？近くだと、ラーメン屋とか定食屋とかチェーン店ならハンバーガー、牛丼ってところだけど。」

指折り数えて、行きつけの店を探しているんだろう。近くの美味しい店を探しながら携帯を操作している。今現在の俺は食文化でさえ信用ならないのだ。何が出てこようと気にする事も出来ないだろう。台所に調味料があるのかを探しながら、葉山の言葉は聞き流している。

冷蔵庫の中は冷凍食品とお酒だらけだ。ある意味では大学生として健全なのだろうか。

「あっ……。にっしー、そう言えば私も行ったことないんだけど駅の近くに美味しいスパゲッティのカフェがあるんだ。ここにしようか。」

露骨に雌が食いつきそうな場所でポイントを稼ぎに来ている！

葉山、まさかワンチャン俺を喰おうとしているんだな。成程、油断させやがって。これはもうアニメ地獄決定だな。

しかし俺は、この体になる前からスパゲッティには目がない。牛丼とかハンバーガーよりは断然スパゲッティだ。出来ればたらこが良い。いや、麺類は好きなんだ。だからと言っていきなりラーメンにがっつくような事はしない。この体が雌だというのなら胃袋が小さかったり、脂っこいものが弱点かもしれない。

女性受けの良い体形は知らないが、もしこの世界の俺が体形維持に気を使っていた場合は申し訳が立たない。
最悪の場合はサラダに逃げられるレストランやカフェが無難だろう。

「その中ならスパゲッティがいいな。いや、一つ聞いて良いか？たらこソースのスパゲッティはあるのか。無いならカルボナーラでもいいのだが、いやペペロンチーノでも、いやちょっと待ってくれ。」
「カルボナーラかペペロンチーノを私が頼んで、少し分けようか。私はいっぱい食べるから両方頼んでも良いから。」
「そんな訳にはいかない。店に着くまでには考えを纏める。取り合えずカフェまでは行こうか。」

「いやはや、美味しかったな。帰る前にもう一度よりたいくらいだ。」
「本当だね。私も今度から外食の時は通うようにしようっと。」

ランチは概ね満足だった。スパゲッティは美味しかったし、葉山と近況の話もそれな

りにした。殆どが昔の思い出とか、友人の進学先の話だったが、まだまだ時間はあるのだからお互いの話はゆっくりと葉山の家ですればいいだろう。

「外食は良いが、普段は自炊した方が良いんだぞ。栄養のバラつきが出るんだから、気休めでも野菜ジュースとか飲め。」

「おっしゃる通りで。スーパーは近いところで良かった?使ってるポイントカードとかあるなら探そうか。」

「大丈夫だ。二人分なら安く済むから、割り勘でも普段より安いくらいだからな。」

「作ってもらうのに割り勘は申し訳ないよ。せめて三分の二は出させて欲しいかな。」

「割り勘で構わないが、その代わり帰ったら一つお願いを聞いてくれ。」

「料理は手伝えないよ?」

「大丈夫だ、そんな事は頼まない。」

スーパーで確保するのは、鶏肉だろう。野菜は、葉山に何が食べたいかを聞く必要がある。後は色々の副菜も考えないとだな。

「それでさ、にっしー。何を作るの?」

「あれだけ立派なオーブンがあるんだぞ。使わないのはもったいない。今日はグラタンを作る。というか明日の朝食も見据えて買い物をするか。」

「朝なんて食べなくて大丈夫だよ。」
「駄目だ、生活リズムを崩すな。良く寝て、ちゃんと食べろ。」
「はいはい。あっ、私グラタンにはブロッコリー欲しいな！」
「じゃあ俺は野菜コーナーに居るから、マカロニと鶏肉を持って来てくれ。」
「はいはーい。」

そんなこんなで、夕食はグラタンを作った。副菜はベーコンとほうれん草の軽い炒め物。もう外は真っ暗である。二人とも風呂に既に入っている。
葉山は、もうビールを二本開けていた。
「まさか、にっしーがアニメを観ようなんて言い出すと思わなかったよ～。」
「変な映画とかを見るくらいなら自前でだ。暇つぶしにと思ったのに、ゲーム機があるのにコントローラーが一個しかないじゃないか。」
「だって普段は友達なんて呼ばないもん。一人用だよ。」
「言えば、コントローラーくらい持って来たんだぞ？」
「にっしーって、ゲームもするんだ。意外だね。昔から頭いいから勉強ばっかりしてる

のかと思ってたよ。」
「葉山こそ、漫画の数は凄まじいが学術書とかも結構あるんだな。」
「まあね、運よく面白い研究テーマに巡り合えたから。」

話している間にも、葉山はぐびぐびと酒を飲み続ける。
そういえばいつの間に部屋着になっていて、だらしない格好だ。この世界の常識では咎められるようなものではないかもしれないが、俺には少々刺激が強い。

「大丈夫なのか？風呂に入った後で血流が良くなってるのにそんなにアルコールを入れて。」
「普段は飲んでないから大丈夫。」
「いや、そういう話ではなくてだな。」
「他の人って嫌なことがあった時に飲むんだって、楽しい時に飲んだ方がもっと心が晴れるのにもったいないよね。」

どんどんと、葉山の瞼が降りてくる。
俺は葉山の握っているビール缶を引き抜いて、倒さないように台所に置いた。

「毎年さ。皆に誕生日おめでとう、とか。明けましておめでとう、とか送ってたんだ。でも、ちゃんと返事してくれるのは数えられる程になっちゃった。」
「そうか。」
「だから、にっしーに会えて嬉しかったんだ。なんか、上手く言葉に出来ないけどね。」
「飲みすぎなんだよ。」
「にっしーは？私に感謝とかないの？」
「なんで俺が。」
「アニメ観るのを付き合ってあげてるでしょうが！何だよ、全５１話って！」
「じゃあ明日は観るの止めるか？」
「続きが気になるから駄目だよ！」

まあ、やはりと言うべきか。アニメは俺の知るものとはそれなりに内容の変わっていた。変わったと言っても、タイトルから多分同一の作品だろうと予測していただけだったが。
面白いものは面白かった。

葉山が隣にいたからかもしれないが。

「……。」

「寝ちまったのか。しょうがない奴だな。」

俺もバスの疲れがある。友人との泊まりである事を考えると随分早い就寝であるが、まあ明日はゆっくり過ごせばいい。

俺は、机を片づけて布団を敷けるだけのスペースを空けた。葉山が持ち上がらなければ、俺がベッドでいいだろう。

押入れを開けると、そこにはゲームソフトと本棚に入りきらなかったであろう漫画が積まれているだけだった。

異性とか問題じゃないだろ！友人を呼ぶんだったら、本当に最低限でもせめて毛布の一枚くらいは用意しておけよ！

このまま床に転がしてやろうか。だけどコイツこんな薄着だと絶対風邪ひくだろ。そしたら看病しないといけないのが面倒だし、アニメを中途半端のまま帰るのも後味悪

くなるだろう。

……本当に、仕方ない奴だ。

「やはり体格差が辛いなっ！」

脇に体をねじ込んで、無理矢理にベッドに乗せる。お姫様抱っこをしようにも、本当に筋力が足りない。葉山くらいに背が高い女に襲われたら、男の俺では勝てないのだろう。

ベッドに乗せ、布団をかける。俺もベッドに入るには、葉山を跨いでいかなければならない。床とベッドの段差で俺の股座の孕み袋が葉山の腕に当たる。筋力も、性差も、コイツをベッドに運ぶ過程で少しずつ学べた。良かったな葉山。お前の腕の感触は、性のシンボルの感触ではなく、補整下着の感触だ。貴様はおっぱいではなくブラジャーを触っているに過ぎないのだ。

しかし、ベッドは大きく感じる。俺が縦に縮んだのもそうだし、横に居るのがノッポの葉山だからというのもあるのだろう。

匂いは、女性特有のものだ――酒臭いのを除けば。起きる様子がないので、腕や足、頬

などを触ってみる。本当に、きっと元の世界より二割増しくらい整った顔をしているように見える。綺麗さではなくカッコよさの方向でだ。

腹パンでもしようかと考えて、葉山のお腹の感触に違和感を感じた。

この世界の女性は、興奮すると子宮と卵巣がポッコリと膨らんで目視で分かるし、腹の上から触っても感触が分かる。

つまりは、寝ていて、意識が無いのにも関わらず、葉山は硬くなっているのだ。

女が孕ませ、男が孕むメカニズムについて、俺は知らない。そこまでは調べていない。多少は信用を置こうかと、無理矢理に襲わなかった事だけで心が傾きかけた俺の浅はかさを呪おう。

コイツに隙を与えてはならない。俺が帰るまでは、アニメ漬けにして手を出す暇は絶対に与えないぞ！

「……起きろ。」
「……起きろよ。」
「さっさと起きろよ、葉山ァ！」

「はい！何！何事なの!?」

全く、俺も熟睡していたが、葉山はそれ以上に爆睡していた。朝飯を作れば、匂いで起きるかとも思ったが、こうして耳元で叫ばなければ起きなかった。
上体を起こして俺の方を向きながらも右手で毛布を掴んで鳩尾の辺りまで上げている。胸元は隠していない。隠しているのは、きっと朝勃ちだろう。

「朝飯、出来たんだけど。」
「えっと、朝飯？」
「葉山が起きるの待ってたら、アニメを全部見終わらないだろ。」
「そうだっけ、結構余裕があったと思うよ？」
「じゃあ、今日葉山は床で寝てもらうぞ。来客用の布団くらい用意しておけよな。安い

ので良いから買いに行くぞ。」
「それは本当にごめんね。あれ？でも、にっしーはどうやって……。」
「田舎は大学が遠いから車通学だろ。買った布団は直接車に積み込むからな。酒は抜けたか、事故なんて御免だからな。」
「事故は絶対にしないよ。今回は悪いと思ってるから、布団のお金は私が出すよ。ところでにっしーは昨日――。」
「葉山。」
「はい、ごめんね。許してくれないよね。」
「腕は痺れてたりしてないか。」
「へっ？全然大丈夫だけど。」
「そうか。一晩、枕代わりにしたけど、何んとも無いなら安心した。」
「えっーーーーーー！ちょっと、嘘ぉ！私とにっしーが、同じベッド、で。」

どうにも、顔を赤くしたまま硬直してベッドから降りようとしない葉山を、放っておいて自分の分のトーストを食べる。昨日の余りのベーコンとグラタンには多すぎたとろけるチーズを食パンのせて焼いただけの簡単なものだ。

割り勘だからと食パンをちょっと高いやつにしておいて良かった。家電も、キッチンも良い設備なのに葉山は料理をしなくてもったいない。

俺がトーストに舌鼓をしていると、葉山は何故かもっと顔を赤くしていた。

誰も優しくないクソッタレな日々

「企画した名取恭平っす。今日はよろしく。」
「恭平の従姉、路次桜子だよ。この中で唯一の社会人かな?よろしくね〜。」
「牛流清哉。陸上やってた。」
「なんか、牛流先輩につれてたんだけど何の集まりなの?紫垣淳奈よ。」
「仁科正美だ。酒は嫌いなんでそこだけ雰囲気が悪くしたら申し訳ない。」
「にっしーの友人の葉山希です。なんか、呼ばれました。」

夏、友人に無理やり誘われた合コン。その経緯から思い返さなければ、俺が心に決めた怒りや恐れが薄れてしまうかもしれない。

かの日、結果として何事も無く葉山の家から自宅に帰還した俺は、まず持って妊娠のリスクについて調べた。したいとかしたくないとかではない。知覚がこの世界になっ

てほんの数日で、俺はストレスの極みだったからだ。
くそデカい玉とそれに伴う袋の中の液体、そしていちもつ。如何に補整下着が有ろうと無かろうと、事実としてあり得ない程に重いのだ。とても重い。
自重の前方にこんな重りがあるのならば納得もできるだろう。雌の体付きになったというのにも関わらず元の世界より発達した背筋の説明がつく。心無し、姿勢だけは元よりもピンとしている。

調べるほどに良く分かる。
座るだけで、上に乗っかる邪魔なものがあり血流が妨害される。象徴がデカいだけで、その手の悩みを持つ人間はこの世に腐るほどいる。対策を怠れば、太股の疲れ、梨状筋のコリから坐骨神経痛まっしぐらだ。
赤ん坊の重さは出産時には平均で3キロというのはこの世界でも違わない。
今でも十分にきついのにそんな重量を股間にぶら下げる？無茶苦茶だ。

子作りとは。
興奮し入口の開いた子宮に、成り余るものを突っ込み、勃起した卵管を刺激。蓋のされた子宮内に放出された卵子は男の尿道を圧力でこじ開けて孕み袋まで到達させる。

個人差はあるが、初めては間違いなく痛いらしい。

結論、子作りにリスクしかないから結婚は当分無理！

言うまでも無く彼女も怖いからいらない。考えられない。

正直無理矢理に襲われたら勝てる気がしない。なんでこの世界の男は身体能力も低いうえに弱点をさらけ出しているのか。欠陥構造にもほどがある。

どっと疲れた時は、自室のベッドに寝転がりながら携帯を弄るに限る。

今回の小旅行で気づけた事は多すぎる。兎に角、世界において雌である事が面倒の極みだ。様々な美容的なケア、そして周囲の視線など。

帰る際に、葉山にＳＮＳアカウントを聞かれたので半年以上は更新していないサブアカウントを教えておいた。

まあそれでも教えておいて良かったと痛感している。

二か月前の投稿曰く、秋頃に同じ県に引っ越してくるらしい。

ストーカーか、アイツは？

俺も葉山も大学４年だ。わざわざ就職先をこっちに決めたのだろう。せめて今回の泊まりの時点で言えば、奇遇程度の話で済んだだろう。

手を出す勇気が無い奴と分かっているのに、住む場所がどんどん近づいて来るのは怖い。清いお付き合いをすっ飛ばしかねない恐怖がある。

でも、内々定をもらって就活終わりにしたのに、逃げる為に再開するの面倒くさいからこのままでいいかと思う夏休み前半。

そう考えていると、友人からの通話がかかってきた。

相手は名取恭平。高校時代からの友人で、良く遊ぶ５人の内の一人だ。一年の頃に席が近かったのもあり交友関係は深かったりする。

「もしもし。」

『マサ、今ちょっと時間大丈夫な感じ？』
「なんだよ、恭平。」
『いやぁちょっと折り入って頼みがあるんだけど、聞いてくれないか。』
「遊びに行くなら場所を決めろよ、お前の家に着いてから二時間の会議は二度としたくない。」
『去年の事を蒸し返すなって。二週間後の土曜、合コンの面子が足りないから女の子一人連れて一緒に来てくれないっすか。』
「え、嫌なんだが。」
『従姉がさ、彼氏欲しいらしいんすわ。マサが来なかったら清哉一人を置いて僕も帰るんでよろしくね。３ｏｎ３ならまだ逃げられるけど、従姉は身内じゃん？実質一騎打ちとか、無理っすわ。助けて。』
「来る前提って事か。清哉は、結構乗り気って事なんだな。」
『彼は年上趣味だからねぇ。』
『――ボッ』。
『スゥーーーー、フーーー。まあお願いしますよ。僕だって従姉に脅されて仕方ないんすよ。今度ご飯奢るからさ？』
「タバコ吸ってんじゃねえよヤニヒラ！せめて協力して乗り切るんだろうな。」

『当然さ、清哉が従姉とくっつくのは、波長が合えばサポート。マサはターゲットじゃないって事前に伝えておいてある。』
「……場所と時間は？」
『追って連絡するよ。当日は、協力して乗り切ろうぜ。』

面子を埋める為とはいえ、頼れる異性の知り合いは一人しかいない。快諾したアイツは、本日、電車に乗って合コンをする為に来た。俺は、どうにかしてこの合コンを乗り切らなければならない！
席は対面３ｏｎ３！男子と女子が互いに対面だ。
恭平の従姉、路次さんは金髪お団子ヘアーで前髪は真ん中で分けている。肩を出した赤の良く分からん英語が書かれたトップスに気崩した黒いパーカー。大きなチェーンネックレス。
ロックとかビジュアル系とかが好きな人なんだろう。

紫垣さんは白と青を基調としたワンピースだ。前髪パッツン、眼鏡、普通に長いストレートの髪。清哉の後輩の筈だが、奴はスポーツ系のサークルに入っていた筈だ。どういった繋がりの後輩なのかがさっぱり分からん。

葉山は、白Tシャツと良く分からんボタンがいっぱい付いた水色半袖の上着。くせ毛のショートカット。確かバスケをやってた筈で、日焼けはしていないが他の女子に比べると運動をするような体付きなのが分かる。

友人は、日焼け垂れ目スポーツ系言葉が足りない清哉と、オシャレ眼鏡笑い上戸で年中長袖の恭平の二人。因みに大きさは小、中の順だ。

「そうだ、席を決めるあみだくじを作って来たんすよ。」

これは恭平の仕込み。自然に清哉を路次さんの生贄に捧げて隣り合わせに。真ん中の路次さん、隣にもう一人の女子を配置。対面で俺と恭平が隣り合わせになる事で最低限のリスクを回避できる算段だ。これが理想。俺と路次さんには、あみだくじがどの席に対応しているか知らされている。

清哉がどこに書くのかは運だが、少なくとも俺と恭平が隣り合える上、恭平は路次さんへのサポートは最低限行った事になる。後は時間いっぱい逃げ切るだけだ。

通路側三席、清哉、路次さん、恭平。
窓側三席、葉山、俺、紫垣さん。

ヤニヒラァ！騙しやがったなあの屑！いつか絶対にぶち殺してやる！

葉山だろうと、紫垣さんだろうと、こっちはそもそも付き合おうって気持ちは微塵もないんだ。ヤニヒラはちゃっかりと、店員に注文したり料理受け取ったりするポジションを手に入れやがった。

「清哉くんって、今はスポーツやってるの？男子にしては締まった体してるよね～。」
「一応、山登り。」

「そなんだ〜。あたし社会人になってから全然運動できてなくってさ〜。何か軽く出来る運動とかあったりする？素人でも出来るなら、山登りを教えて欲しいかも〜。」
「どっちにしてもウォーキング。いきなりやると怪我する。」

あっちの二人は結構話せてる。
両脇の女子は、場になれてないのか話せてないし、恭平は実にゆっくりとサラダを小分けにしている。
こういうのって、普通は雄が必死こいて話しかけると思うが、葉山も紫垣さんも数合わせで来ただけだから、がっついて来る訳でも無いんだろう。黙ったまま飯食って帰るのも雰囲気悪いし、裏で話もしないような性格が悪い奴と噂されても面倒だ。話かけるか？でも合コンに乗り気だと思われるのも嫌だ。
切に、俺がサラダ係をやりたい。

「ねえ、にっしー。男子は三人とも友達なんだよね？」
「高校の時からの友人だ。」

「へえ、牛流先輩って高校の時はどんな事してたの？気になるわ。」

葉山、紫垣さんの連携。挟み撃ちは逃げ場がない。葉山はさて置き、さっきから紫垣さんはチラチラと視線が下がってる。調べて分かったが、恭平や清哉、果てにはそこらの男子と比べても俺の膨らみは大きい方なのだ。

紫垣さんは男子に耐性のない感じか？喋り方はそれなりに高圧的だが、調子に乗らせなければ過激なアタックもないだろう。だとして、少し見すぎな気もするんだが。

「高校の時か。」

昔話に思い馳せようとしていると、ハンドサインで清哉からストップの指示が出ている。性差が変わろうと俺らは所詮サブカルチャー的な話題が多い。特に、長く同じクラスだった清哉との話題は下らない思い出の方が印象深い。高校一年生、昼休みにシャカパチしながらカードの萌えキャラスリーブを眺めてる清哉に話しかけたのがきっかけだった。

これを言ったら、俺も気持ち悪い奴認定をされてしまう。俺たちの友人グループは他人に迷惑こそかけなかったが、青春の断片はオタク趣味でまみれている。勿論、個々人

はそんな訳ではない。部活に打ち込んだり、塾に行ったり、文化祭や修学旅行。

しかし、友人同士で居る時に、頭を使うような話はしない。わざわざ皆で泊まりに行って、持ち込みのゲーム機で遊んだりする集団なのだ。ここにはいないがもう二人の仲が良い友人の方がまだ真面目な方だ。（故に彼女持ち、呼べるわけがない。）

恭平からのストップコールは裏切りたいが、流石にリスクが大きすぎる。

「……清哉は、三年の時は文化祭のクラス劇で主役だったな。」

「まあ、先輩は見てくれの良さはあるかしら。私は好みじゃないけれど。」

さっきから股間をそれだけ見てれば好みなんて分かる。紫垣さんは大きい方が好きなのだろう。清哉は小さいからってだけなのだろう。コイツの好みなんて興味は無い。牽制しなくても分かるだろ。この場は殆ど清哉と路次さんの為に開かれた場だろ。今更、紫垣さんと清哉の関係を気にする奴はいないんだ。

「じゃあ、紫垣さんは僕とマサだったらどっちが好み？」

恭平は自分が選ばれる可能性があろうと早期に決着をつける気だ。これで紫垣さんが俺を選ぼうものなら、互いは積極的に話をしなければいけない雰囲気になる。そうすれば葉山と対角線上の恭平は安全圏だ。料理を貪るだけで済む。

仕掛けるタイミング、初手での罠、恭平にまんまとやられっぱなしだ。

「そんなものは、話してみなければ分からないでしょ？大切なのは性格が合うかどうかよ。」

貴様、さっきから俺の玉に視線を送っておきながらよくもそんな大嘘を平然と吐けるな！

紫垣さん、要注意人物にもほどがあるだろ。もしかして、清哉も裏切り者か？恭平の従姉を、路次さんの相手をしなければならないと分かり切っていたから尖兵を連れてきたのか？だとしたら甘かった。何故、俺は準ストーカーの葉山を応援として呼んでしまったんだ。

「折角だし簡単なゲームしようよ。第一印象ゲームって、一番お酒強そうとかを指差すやつなんだけど。」

俺のお助けキャラはからめ手は使えない様子だった。葉山、普通の合コンだったら間違いなく正解だが今日は殆ど接待なんだ。明らかに空気の読めてない提案。だけど断れば寧ろそっちの方が空気を読めてない印象を植え付けられる。考えなしだが、間を持たせる事においては効果的だ。

「あたしはオッケーだよ～。皆のことも知りたいし～。」

「私も構わないけれど、勝者を決めましょう。例えば、お願いを一つ聞いてもらうとかどうかしら。」

「取り合えず、僕から時計まわりで、一周ごとに勝者を決める感じでいいっすかね？出題者と同じ指差しが最多数ならポイントって感じで。」

「決着が着くまで回せばいいだろ。」

「じゃあ、一番頭が良さそうな人っすね！」

恭平は紫垣さんを指差し、葉山は俺、他は恭平だ。
「指差す奴を間違えた。恭平は勉強しかできない。」
「サービス問題を自分で外す輩だ、良さそうな振りをしてただけだったな。」
「二人とも友人相手に酷くないっすか？」

「次は、私ね。一番モテそうなのは誰かしら。」

俺は清哉を指差し、恭平は路次さんを、女性陣は俺を指差した。
「中学時代のにっしーはモテモテだったし。」
「無難に一ポイントゲットね。」

「そうだな。一番早起きをしてそうな人。」

俺は清哉を指差し。他は路次さんだった。
「社会人ってやっぱり朝は早いんだね。私雰囲気で指差したのに。」
「職種に拘るとね～。本当は近場に引っ越したいんだけど、仕事のせいで時間を取れな

い矛盾が辛いかな～。」

「そうだね……。一番足が速そうな人。」

葉山は清哉を指差し、他は葉山だ。

「自分に指差しもルール上はオッケーのなのに～。謙虚だね。」

「そうなんだけど自分を指差すのって勇気要るんだよね。」

「一番外に居そうな人。」

満場一致で清哉を指差す。

唯一日焼けしている人物だ。まあ、勝ちを拾おうとすれば当然な行動だが、合コンでの行動としては微妙だ。

こうやって、ある程度は他人の視線を気にしない振る舞いもした方が良いのだろうが俺には出来ない。

「じゃあね～。ファッションセンスが一番良さそうな人！」

俺と路次さんは清哉を、清哉は路次さんを、残りの女性は俺を指差した。

「恭平、こういうので自分を指差す？」

「酷いっすよ、清哉。面倒くさいからって服を買う時に同行させる癖に手柄を全部横取りなんて。」

「服装は口出ししないが、そのバッグは死ぬほどださいだろ。」

「差し色としては減点かな～。色がどぎつい。」

そんなこんなでゲームは三周りに及び、勝者は紫垣さんになった。自分で設けたお願いルールを行使するというのは、提案の時点で勝つ自信があったのだろう。

「お願いは、そうね……。膝枕をして――。」

――ガシャンッ！

「申し訳ないっす。ライターを落としてしまって。いやあ、言葉遮って聞こえなかったんすけど、何て言ったのかな？」

恭平は優しい。

一発アウトのセクハラに訂正のチャンスを与えた。男子の股座は性的な意味合いが強すぎる。膝枕なんてものは、元の世界で言うならば女性の胸部や股に顔を埋める事と大差ない。

ダメもとでも言ってみるだけ勇者だな。勿論、紫垣さんへの好感度は第一印象がピークだ。どんな世界でもスケベは嫌われる要因だろう。特に隠せない奴は特に。

「してみたいと、思ってたのよ。誰か私の膝に頭をのせてくれないかしら？」

「びっくりした。」

「そうだね。流石に男の子にさせるのとかありえないもんね～。」

「僕は動くのが面倒くさいから、マサがやれば良いっすよ。時間は5分とかで大丈夫っすよね。」

「拒否権は？」

「勝者の命令だから諦めて欲しいっすわ。」

溜息一つ。

三人掛けとしては広いスペースがあるから何とか横たわれる。それでも若干窮屈で、見られながらというのはすごく恥ずかしい。

俺は体勢を変えて、紫垣さんの膝に頭をのせた。

「ふぉおっ！髪の毛がサラサラしてるわ！」

紫垣さんから気持ち悪い声が聞こえた。本当に勘弁して欲しい。

女性的な柔らかさに加えて、雄的なしっかり感が伝わってくる感触。だがそれ以上に恐怖の感情が隠し切れない。脈を打てば些細ながらに振動がある。接触しているからそれが感じ取れてしまう。

動悸が激しすぎる。不整脈にも程があるだろ。徹夜明けでもここまで酷いテンポで心臓は動かないだろ。

恐ろしくなって、少しだけ太股と頭の接地面積を減らすように動く。

「っ!!!!!!」
「ほ!!!!!?」
尻が、葉山の手の上に乗っかった。

偶然触れ合ってびっくりした雰囲気を出してるんじゃねえよ！狙って手を置いてないとこんな偶然が起こる訳ないだろうが！
スケベ度合いがマシかと思って見直そうと思った数秒前の俺に謝ってくれ。

「マサ、フライドポテト来たけど食べる？いや、その格好だと手が届かないっすかね。」
「えっと、もし良かったら私が食べさせて良いかしら？ケチャップはつける？」
「ケチャップは要らない。」

キレそう。
一度こういう事をしてしまったから、次に紫垣さんと会ったら妙に馴れ馴れしくしてくるのだろうと思う。ストレスがえげつない。どうにかして元の世界に戻れないだろ

うか。

特に紫垣さんポテトを口元に持ってくるときに左腕なのが怒りポイントを高めている。わざわざ首元から腕を回して顎に親指の付け根辺りを擦らせているのがブチギレ案件だ。言い訳としては飲み物の容器から落ちる水滴が当たらないように遠く、右腕で持っているとでも言いやがるつもりなのだろう。というか膝枕をし出してからペースが速すぎる。約束の時間は5分だったよな。二杯は飲み干しているんだが、飲みすぎだろ。

紫垣さんは、15分もしないうちに酔い潰れた。

お開きになると、仕方なく清哉が送る事になり、路次さんは清哉の連絡先を聞いてそれなりに満足気な表情で帰っていった。

恭平は一人で帰る。合コンの場所は、奴の家から一駅も歩かない。全てにおいて恭平だけが楽をしている。寿司か何かを奢って貰わねば気が済まない。

「にっしー、折り入って相談があるんだけど。」
「どうしたんだ?」
「私の家って遠いでしょ?終電、なくなっちゃった。」

誰か、俺を助けて下さい。今すぐに元の世界へと戻してくれ。
言うまでも無くラブホは論外。自宅は、住所を晒すのか?ほぼ間違いなくストーカーされるぞ?コイツ一人でネカフェとかカラオケにぶち込むのが一番安全だろう。
でも、周辺のネカフェを探すのすら億劫だ。今日はさっさと帰ってあったかいお風呂に入りたいから自宅でいいか。もう考えるのも面倒で、考えて対処する事に疲れてしまった。

電車に揺られて、すっかり遅い時間。俺は葉山を連れて自宅へと到着した。玄関に鍵がかかっている事を確認してから鞄の中の鍵を探す。物音を立てたからかリビングに付いていた明かりが消えた。妹はこんな遅い時間までリビングのテレビを観ていたか、或いはゲームでもしていたのだろう。

「一軒家……、もしかしてにっしーってお金持ちだったりするの？」
「元々は死んだ祖父の持ち家なんだ。今は妹と住んでる。」
「妹さんって今は何歳？」
「高二だ。」

鍵を開けて、玄関の電気をつける。来客用の布団はある筈だが何処に寝かせるべきか。この家は客間が無いのが面倒なのだ。
「お邪魔します。」
「靴は適当でいい、取り合えずバスタオルとか探すから。」
「うっわ、女つれて帰って来たんだ。あんまりうるさくしないでよ。」
「ただいま。咲、こんな時間にアイス食べてると太るぞ。」
「あんたに言われなくても分かってるから。一々命令しないで。」

咲は二階の自室に戻っていく。
同じ女だから葉山の世話でもさせようかと思ったが、そう上手くは行かないようだ。

「反抗期？」
「そうなんだろうな。俺にはそんな時期は無かったから対処が分からん。」
「大変だね。」
「学校が近いから、俺も咲も実家よりは此処で暮らした方が楽なんだが、どこに居たって何かしらの問題は出てくるんだろうな。」

客人用のタオル、布団は問題なく見つかった。
俺の自室も二階にあるが、そこまで布団を運ぶのは正直面倒くさい。仮に頼まれたって同じ部屋で寝るつもりは微塵もない。葉山にはリビングで寝てもらう事にしよう。

「じゃあ、俺は先に風呂入る。布団は奥の部屋だ。リビングで寝てくれ着替えは大丈夫か？」
「まあスポーツやってれば、替えの下着とかシャツくらいは持ち歩くから問題ないよ。」
「葉山が風呂に入っている間に寝てしまうかもしれないから。勝手に寝ておいてくれ。」
「うん、ありがとうね。」

――ジャーーー！

「にっしーお風呂に入ったね……。さてと今の内に。」
「あれどうしたの、葉山先輩？何で、二階に上がろうとしてるのか説明してよ。」
「――誤解だよ。やる事が無くて落ち着かないから、階段に座ろうとしてただけ。」
「そう。リビングにも椅子はあるわ。それと、くれぐれもあいつに迷惑をかけるような事は止めてよね。」
「咲ちゃんは心配症だね。私が、正美くんに不都合をかけられないって知ってる癖に。」
「……葉山先輩。」
「何かな？」
――キュッ！
――シャカシャカシャカシャカ！

――ジャーーー！

「リビングで、大人しくしてなさい。そっちはリビングじゃない。ゆっくりと脱衣所か

ら離れて、それ以上近づいたら外に放りだすよ。」
「……。」
「あいつに、ある事ない事を吹き込んで、二度と会話が出来ない程嫌われたいなら止めないけど？勿論、警察も同席よ。」
「咲ちゃん、おやすみ。」
「諦めてなかったら、朝一で頭をたたき割ってやる。」

ストレス性二重記憶喪失

未だに信じたくない現実に戸惑うからこそ、夢は確実にはっきりと分かる。何かから逃げるように必死で勉強する人物。何処からか聞こえる笑い声。勉強に励んでいるのは子供だ。中学生くらいだろうか。遠ざかっていくのに、笑い声の感情はより明確になっていく。

これは嘲笑だ。

子供は誇る、もう狭い視野から離れられるだけの学力を誇る。血の滲むような努力で勝ち取った学力と雑音の無い環境は、子供を安心させる。笑い声が届かない遠い場所で、子供はいつも笑われない為に頑張っていた。

笑われて育った人は、自分の意見を言えなくなってしまう。

一体、誰から聞いた言葉だったか。きっと、その限りではないと俺は思う。だけど夢の中に居る子供は、自発的に何か好きな事を行う事は無かった。

好きだからやっている訳ではない勉強。雑音を立てないように注意するだけの人間

関係。

それ以上の幸福を諦めた子供だ。

――ピピピッ！

時計の目覚ましには慣れたもので、鳴り始めて直ぐに体が動いてしまう。雄である俺よりも雌である俺の方が耳が良いのだろう、時計がテンポを刻むより早く手が動く。きっと一小節すらも鳴らさない自信がある。

寝て、昨日の合コンに対する怒りは殆ど静まった。自分でも驚くほどに、恭平への怒りも紫垣さんへの怒りもない。環境の変化によるストレスと、適応しようとする精神が入り混じって、感情の整理が追い付かない。未だに俺は、自分の事で手一杯なのだ。どう動けばいいか分からないというのは事実で、今はちやほやされるだけで済んでいるが、悪意を持った誰かへの対応策は俺の手札にはない。

世間の恐ろしさがあるのか、それすらも実感がわかない。

自室は色気のない部屋だ。ぬいぐるみは一つくらい欲しかったかもしれない。不安に押しつぶされる時、前の俺の部屋には安物のサンドバッグが有った。まるでスッキリしないが、気持ちに折り合いをつける為のルーティン。この世界には何もない。

決して、身体だけじゃない。明確に元の世界とは違いがある。部屋一つをとっても違いは幾らか見つかっている。筆記用具、下着や洋服の量、化粧品など。完全に同一の存在だったなら、自分がこの世界に馴染めているかを気にせずに済んだのかもしれない。

それでも俺の様子がおかしいと面と向かって言われないのは、順応しているのか、残留した何かに精神を蝕まれているのか。答えは出ない。

二十歳を越えれば、人の精神とか性格とかは固定されてしまうと俺は思っていた。少なくとも核となり柱の部分は絶対そうだと思っていた。でも、どんな要因であっても俺の心はぐちゃぐちゃで、行動理念すら現時点で把握できない。もしも俺の考えが間違っているんだったら、精神的に成長できる最後のチャンスかもしれない。

今に勝るきっかけは一生訪れないだろう。

パジャマはさっさと着替える。

午前7時、まずはやるべき事をこなす。仏壇への線香をあげて、その後は廊下と階段の掃除だ。兄妹二人では、まだ広い一軒家。生前、祖父がしていたように掃除は毎日行わなければならない。

「おはよう、にっしー。」

「おはよう。随分と早起きだな葉山は。ちゃんと眠れたのか？」

「お陰様でね。無理言って泊まらせてもらってごめんね。何か手伝わせてよ。」

「じゃあ、玄関のやつに水やりを頼む。」

「あとで少し時間あるかな？帰る前ににっしーと話しておきたい事があるんだよね。」

「どうせ咲は昼頃にならないと起きて来ないから、それまでは暇だ。」

「ありがとう。水やりが終わったら他の掃除も手伝うからね！」

掃除を手伝ってもらうだけ、だけど葉山の声色は一切の打算や媚が感じられない。異性への大事な話と聞いて一番に思いつく内容ではなさそうだった。こんな世界でも、女

の子の家庭的な一面を見れば目の保養になると思っていたが、真剣さが伝わってくるのは苦手だ。

俺にはこの世界の人たちを真正面から受け止められるだけの歴史がない。世界が違う記憶に基づいた判断が正しいのか俺には分からない。

目の前でキビキビと動く葉山。単純な善意か、自分の心を落ち着ける為なのか。今日の葉山がする話が一つでも、心の平静の種になれば良いと思う。

リビングには、葉山の荷物は纏まっていた。直ぐにでも帰る準備はあった。言い逃げ、そんな言葉が脳裏に浮ぶ。

俺は、正面に立つ事をお願いされた。葉山の顔は本当に真剣で、そして震える唇からは緊張が伝わってくる。この時、葉山の表情は悲し気だった。

「ずっと前から謝りたかったんだ。小学校の時のこと。」

小学校？何かされただろうか。

「私が、にっしーの声で笑ったから周囲が笑っていいんだって免罪符が出来たんだと思う。私が最初だったんだ。その事を、にっしーは知らなかったから私と仲良くしてくれ

て。」

俺は男子の中でも声が低い。元の世界でもそれを弄られた事はあるが、謝られるような事は一切なかった。

やはり、人生単位で差異がある。

「中学であんなことになったのは、私のせいだから、本当にごめんなさい。」

深々と頭を下げる葉山。

あんなこと？中学で何があったか？俺には記憶の無い話だ。この世界の俺の話なんだろう。俺と葉山の気持ちはちぐはぐだ。俺は困惑している。だって、この世界の記憶なんて俺には――。

『マサは身体測定どうだった？僕はもう成長とまったっぽいっすね。』

『体重が増加だった。またデカくなってて学校の椅子は硬いし座るだけで疲れるんだよな。』

『当てつけか、キレそう。』

雌である俺の記憶、全然思い出せた。高校時代も大学の講義も、意志を持って頑張れば思い出せるものはある。だったら、何で中学の出来事が思い出せないんだ？何故、葉山との記憶を思い出そうとして出来なかったんだ？

断片的には思い出せるかもしれない。塾での出来事は、いや、これはなんだろうか？

気分が悪い。

「くっっ！はぁ、っ！ふっふっ、ヒューヒュー！」

「にっしー！」

なんだこれ、過呼吸か？苦しい。こんな事は今まで無かったのに、どうして。

「ヒューヒューヒュー！」

「落ち着いて！吐く息をゆっくりと、吸い込むよりも倍以上に、大丈夫。大丈夫だからね、にっしー。」

頭を胸元に抱き寄せられる。後頭部の腕の温もり、そして呼吸路を確保するように優しく抱き抱えられる事で、額に柔らかな感触がある。

苦しくも、少し冷静になれた気がした。

「ヒューヒュー。」

「ヒューーヒューー。」

「ヒューーヒューーー。」

時間にして、5分程度の症状。

漠然と、俺の身体と心にある程度の問題がある事は理解出来た。

「もう、大丈夫だ。葉山、済まない。」

「謝らないでよ。きっと私が原因だから。」

それだけは違うと、本能で分かる。葉山はきっと悪くない。だが、俺には気の利いた言葉が何も思い浮かばなかった。呼吸を整える事で精一杯？だが、それでは落ち着かせてくれた葉山に申し訳が立たない。

「勝手だけど飲み物を置いておくからゆっくり飲んで。咲ちゃん、呼んで来るね。」
「……。……。ふー。まだ、咲は寝てると思うぞ。」
「説明してもらわないと、私はともかく当人にはきちんと。」

パジャマのまま降りてきた咲は、あっさりとした表情で口を開いた

「記憶障害よ。中学の頃のトラウマが原因。そのストレスは、記憶だけじゃなくて過呼吸みたいな症状にもなる。塾でも何回か発作してたから葉山先輩はある程度知ってるでしょ？」
「私が聞きたいのは、どうして本人に教えてないのかってことだよ！今回は私の不注意で済むけど危険性は伝えるべきで――。」
「教えた、教えてた。それは絶対なのよ。」

「その記憶が無くなったとしか思えない。一緒に暮らしてても分からなかったのよ。高校生になってからはこんな事は無かったのに。」

葉山も咲も、俺へと視線を向けようとしない。俺の知らない俺の話。

原因はトラウマ。それは間違いない事実。だけど重要なのは、トラウマが原因のストレスが記憶障害を引き起こしていたという事だ。もしトラウマ以外のストレスが要因で、記憶障害が引き起こされるとしたら。原因は一つしかない。

雌雄逆転によるストレスだ。

二人が思っている事実は重く受け入れがたい。でも、それよりも、事実は俺に重くのしかかってくる。

元の世界の記憶が少しやられている気がする。消えてしまった記憶がある。それが何なのかは分からないし、大きく消えた訳じゃないから本当に消えたのかも正確ではない。だが、きっと感覚は正しい。

この体に癖づいた症状。

きっと雄としての記憶が消えれば消えるほど、現状のストレスは無くなっていく。こ

のあべこべの世界に混じり合えるだろう。世の中に魂が無いのであればきっと割合の問題だ。雄と雌の記憶の割合で俺の人格は変わる。

「私はいいのよ。でも、あんただって親の顔を忘れるような事はしたくないでしょ？もし、昔の思い出以外に症状の理由が分かってるんだったら止めて欲しい。」
「咲……。」
「お母さんには後で電話しておくよ。医者が一回、トラウマと同等のストレスが無い限りは大丈夫だって言ったんだもん。一緒に暮らしてて分からないなら、もう手立てが無いんだろうね。」

それでいいのだろうか。
ストレスから逃げて、トラウマから逃げて、雄としての記憶が消えればトラウマを思い出そうとしない限りは記憶は消えない。少なからず家族は安心するだろう。だが、そもそも中学の思い出を、三年間の記憶をごっそりと無くなった奴は、果たして仁科正美と言えるのだろうか。
現実から目を背けた結果、雄の記憶がほんの僅かでも混在したとして、それが問題の

解決になる筈がない。

「乗り越えればいい。」

家族はきっと、無茶をして記憶がどんどん失われるくらいなら、残った記憶だけを大事にするベターな選択肢を取るだろう。だから俺にトラウマを思い出そうとするなと言ったと思う。

それでも俺は受け入れないといけない。

「馬鹿な事を言わないで、言わなきゃ分からないの？あんたの記憶が無くなっていくのを見たくないの。私だけじゃない家族だけじゃない。友達だって、そこの葉山先輩だってその筈よ。」

「それは本当に家族の為か？俺はそう思わない。確かに、俺だけじゃなく家族が苦しい顔なんて見たくない。俺が両親や咲に見せたいのは記憶が無くなる事への怯えが内在する顔じゃない。」

雌雄逆転は、きっと俺の主観での話に過ぎない。だから絶対に打ち明けられない。俺が解決すべき問題だ。

せめて、トラウマに関してだけは、この世界のものとして解決したい。

「俺は今、家族にも、友人にも、手伝って欲しいと思っている。打ち明けていいと思ってる。トラウマを克服したい。」

咲は、目を合わせようとしてくれない。

思いは伝わっていると信じている。お互いに、今はこれが精一杯なのだ。

「勝手にしなさいよ。私は、手伝わないから。もうあんたの事なんかしらない。今に葉山先輩が襲ったとしても、もうしらないから。」

「咲ちゃん、本当にそんなことはおもってないでしょ?私はにっしーの手伝いをしたいよ。私自身に責任があるのも当然だし、にっしーは何も悪い事をしてないからね。」

咲は、ソファーに座り込んで目を合わせようとしない。葉山の言葉は聞いているが反

応は返してくれない。
せめて俺は素直に心を打ち明けないといけないだろう。
「手伝って欲しいなんて言うべきじゃないのは分かってる。でも、きっと俺一人では難しい事だと思うんだ。ストレスなんかは関係なく、咲が認めてくれて、その上で克服したいんだ。今までの迷惑とか苦労とかを抱えてくれたのはやっぱり家族だから。」
「……別に、迷惑だなんて思ってないわよ。」

小声でもしっかりと聞こえた。
単純と思われるかもしれないが、心の重さが少し無くなったのは事実だった。

「てゆーか、あんたらのせいで全然寝れてなくてイライラするんだけど!さっさと朝食作って欲しいんだけど!」
「ああ、ありがとう咲。ベーコンをおかずにご飯を食べるのと、ホットケーキを焼くのだったらどっちが良いんだ?」
「ホットケーキ。」

「葉山も食べて行けよ。別に帰るのは急ぎじゃないんだろ？」
「そうだね。じゃあ朝食だけは頂かせてもらうね。さっきの話も、もう少し詳しく聞きたいんだよね。」

完成までに然程の時間はかからない。しかし、テレビをつける事もせずに、葉山と咲が交えた言葉は異様に少ない。まるで内緒話のようで、俺には一切聞こえなかった。いがみ合っているのかと思えば、二人は嫌い合っている様な接し方はしない。反抗期の咲は寧ろ俺よりも葉山への態度の方が柔らかい気さえする。

「咲、冷蔵庫に入ってるやつだしといてくれ。」
「はぁ？もっと具体的に言ってよ。それだけじゃ分からないんだけど。」
「シロップとか生クリームとか、自分が使うものを出せって言ってんだ。」
「分かったわよ。葉山先輩はバター使う人？使うなら一緒に出すわ。」
「折角だから御厚意に預かろうかな。」
「ほら、咲。焼けた分から持っていけ。」
「はいはい、シロップとかテーブルに持ってくから。」
「あんまり使いすぎるなよ。」

「うっざ、言われなくても分かってるわよ。」

どんなに悪態をついたって、咲は俺の作った料理を食べてくれる。残さずに食べてくれるのは、親の育て方が良かったのか、美味しいから食べてくれているのか分からない。生活リズムも違う俺たち兄妹が唯一同じ時間を過ごせる食事を、大切にしてくれているのなら嬉しいんだがな。

しかし、朝は大分涼しいと言っても夏。掃除をして、ひと悶着あって、気温も上がってくる時間帯ではある。こうして火を使った調理をしているだけで、大分汗が出てくる。

「葉山、その辺にリモコンあるだろ。クーラーつけてくれ。」
「そうだよね。うん涼しくしないと。――それだけ汗を流してたら目のやり場が無いからね。」
「なあ咲、フォークが足りないんだけど知らないか？」
「あんたの分は、もう持ってきてるわよ。」
「そっかありがとう。」

「それで、にっしーは何か考えがあるんだよね。」
「そうだな。まず、前提として多分トラウマ自体は忘れてないと思うんだ。思い出せない事へのストレスで過呼吸が起きるとは思えない。」

思い出せないものにストレスは感じたりはしない筈だ。恐らくトラウマはこの身体において根深いものであり、消せない記憶なのだ。

「だから、正確には思い出そうとすると途轍もないストレスに見舞われるという事だ。兎に角ストレスをどうにかすれば多少はマシになっていくと思う。現状はそこからだろう。核心に近づく前にストレスでやられてるんだ。」
「具体的な方法を思いついたら教えてね。私も協力するから。良かったら電話しても良いよ。何でも打ち明けると心が楽になるっていうしね。」
「その時はお願いするさ。」
「でも葉山先輩って何処に住んでるんでしたっけ。そんな気軽に会えないんじゃ。」
「就職はこっちにしたから、今月中には引っ越しは終わる予定だよ？研修直前に来るのは遅いって担当の人に怒られたんだよね、へへっ。」

さり気なく、葉山の引っ越しが早まってた。ある意味では、下手に距離を取らずに秘密を打ち明けておいて正解だった。認識の差異で溜まっているストレスへの対処は、近しい友人や家族で慣らしていった方が賢明だろう。

紫垣さんには悪いが、ボディタッチの有り無しは関係なく葉山や咲と居た方が平静を保っていられる。

「いつまでも居たって仕方ないし、私はそろそろ帰るね。ご馳走になっちゃってごめんね。引っ越しが終わったら二人に何か奢らせてよ。」

「気にしなくていいぞ。気を遣われると、ストレスになるかもしれないからな。」

「なら、お言葉に甘えさせて貰うよ。」

見送りは玄関までで良いと言われた。

今までパジャマのままだった咲は、流石に外から見られるのは恥ずかしいのかリビングに居座ったままだ。

「あとさ。その……。」

「どうした葉山？言いたい事があるならはっきりとしろ。」
「今日、謝ったでしょ？昔のこと、私が発端だって。」
「気にしてなんかいない。トラウマだって克服しようとしてるんだ。昔の話は水に流すさ。」
「違くてさ。その、私もはっきりと伝えたいんだけど難しいね。」

葉山は、俺の手を掴んで引き寄せた。

「私は、にっしーの声が好きだから！他にも、もっと、いっぱい好きなところあるけど。」
「とにかく！トラウマなんかに負けないくらい、良いとこがいっぱいあるから。私も、絶対に乗り越えられると思う！それじゃ！」

言い逃げのように、葉山はそのまま帰っていった。
ドアが閉まっても暫くは立ち尽くしたままで、何か言い返せば良かったのだろうか。

そんな暇は無かったが、何より思考が纏まらない。

アイツ、あんな事を言う奴だったか。

「気合入れすぎだろ。まったく。」

引き寄せられた時の手首の間隔、力強い雄の力だった。やはり、随分と上から真っ直ぐに見つめられるのには慣れていない。

でも、乱暴だったが、葉山なりの優しさなのは理解出来た。

だが、しかし、葉山は単なるむっつりなだけじゃなくて、真っ直ぐに俺を見てくれてる部分もあるって事が分かった。

取り合えず、トラウマを治したいって事を信じられる友人たちにメッセージとして送っておこう。そうは言っても、良くつるむ奴らのグループに長文をぶん投げるだけだ。

扉にある程度は遮られても咲が電話をしているのは分かった。本当は俺が両親に言わなければならない事なのに、咲が電話してくれている。
心配してくれている。今更言葉にされなくたって、どんなに記憶が消えていても無くならない程に、この世界でも咲や両親が俺を想ってくれているのが分かる。
心の中で分かっているからこそ、反抗期って寂しいものだと感じてしまう。

――トゥルルルル。

「もしもし？」
『おはよう、マサ。文章を見たっすよ、今は大丈夫なん？』
「お陰様で落ち着いてるよ。でも、恭平はどうだろうな。合コンで手ひどい仕打ちを受けたから、頼れるか微妙と思っている。」
『あんな事してて、こう言うのって良くないけど、茶化さないで聞いてもらえるっすか。』
「どうした？」

『マサに協力する代わりに、僕の事も手伝って欲しいんだよ。タイミング的に一石二鳥かなと思って。』
「別に構わないが、何を手伝えばいいんだ？」
『いや、文脈でわかるでしょ。トラウマの克服だよ。』

周りの奴らは先んじる

水着の調達。それが今回の任務。

曰く、恭平が言うには彼のトラウマの克服には水着を着る必要があるらしい（確実にその限りではない）。折角だからという理由で、清哉と俺はその買い物に付き合わされる事になっている。言うまでも無く、俺は乗り気ではないのだが、清哉に伝えたところ買い物自体には結構乗り気であるようで、俺も強制的に参加となった。

どの世界でも雌に位置されると買い物が好きになるのだろうか。

そして今日の買い物において、俺が面倒に感じる原因はキャピキャピとした買い物だとか、水着を買うこと自体ではない。

女子の意見が欲しいと言われ、俺が骨を折って連れてきた不機嫌な妹の存在である。

話は、少し前に遡る。

某日、恭平の家にて互いにトラウマの詳細を話すべく集まった時の事だ。友人の中では一番ふざけた奴という印象の恭平だったが、話を打ち明け合って、最近はそれなりに

真面目な様子だった。トラウマを打ち明けた時点で、どの友人も親身になって声をかけたりしてくれたが、その中でも恭平が一番心配してくれた。一番初めに恭平自身のトラウマの克服も治したいと言っていたが、そんなのは殆ど彼にとって口実のようなものだったのだ。

同じくトラウマの経験を持つ人間だと知って、恭平は心から心配してくれていた。勿論だからといってこれまでにやって来た悪戯だとかを謝ることは無く、関係の変わらない友人として長く話を聞いてくれたのだ。

だから、俺も恭平に心の内を打ち明けて欲しいと思い、彼の家を訪ねたのだった。マンション住まいの恭平、その部屋は元の世界と変わらない不健康さが見て分かる。綺麗に並んでいても捨てられる気配のないエナジードリンク。ベッドの傍に放り投げてあるタバコの箱。切れた電灯は厚紙に包んで捨てられる準備はしてあるが、もう一年は放置してある事を俺は知っている。

「いやあ、やっぱり客人が来るとなると早起きしないとだから体がバキバキっすよ。」

「早起きって、もう昼過ぎだぞ。もう飯は食べたのか？」

「マサが買ってきてくれるって話だろ。」

「朝飯の話をしてんだよ。」
「娯楽にかける金が減るようだったら、考える。」

恭平はタバコを指差しながら、笑っていた。他人の好みに口を出すつもりはないが、コイツの場合は随分と前からやめるやめると言い続けて今に至るので、もう口出しをする意味も無いんだろう。

「で、どうするんだ？文章で送ったやつを見たと思うが、俺はトラウマの詳細を思い出せる訳じゃない。だから、俺は走りだけでも教えて貰うだけで十分だ。恭平が全てを打ち明ける必要はないと思うんだが。」
「僕だって言わない方が良いのかと思ってたけど、マサが僕たちに打ち明けてくれただろ？それを見てて、僕も誰かに打ち明けた方が心が楽になるのかと思ってさ。実は、親にも打ち明けた事が無いんすよ。」
「家族に言ってないのか？」
「つーか、家族には殊更に言えないんだ。」

――ボッ。

恭平は、キッチンの換気扇を回して、タバコに火をつけた。
「若気の至りっていうか、中学の時に彼女が居たんだ。その時に色々と、背中の傷が気持ち悪くて生理的に無理って言われて分かれたんだ。裸を見せるまでの仲になって、なのに拒絶されたのが本当にショックだったんすよ。」
「傷って、結構深いやつか。」
「手術痕っすよ。そっちは勿論、親だって知ってる。だけど中学生で性交渉をしようとしてたなんて親に言えないだろ。僕だってどうにも、今まで誰にも打ち明けられなかったし、丁度いいタイミングなんてなかった。」

口にくわえる事も無く、恭平はタバコを手に持ったままだ。

「どうせ自分の身体を見せる段階までいったら拒絶されると思うと、怖いんだ。誰もがという訳じゃないのは分かるんだけど、一歩踏み込んで女の子と話そうとするのが難しい。マサだってちょっとくらいは分かるだろ?」

スマホの画面を俺に見せながら、恭平はうんざりといった雰囲気だ。

「『男性　過呼吸　エロい』、過呼吸までの入力時点で随分なサジェストだな。」
「僕もそう思うっすよ。世の男性はこういうのを見て汚らわしいとか思うのかもしれないけど、僕からしてみたら本当にどんな人でも考えなしにどんな人であろうと興奮してくれた方が嬉しいかもしれないって気持ちもある。まあ、過呼吸を起こす人間の前でいう話題じゃないかもだけど、僕も昔は結構患ってたから許して欲しい。」
「倫理的には間違った話ではあるけど、気持ちは分からなくはないな。」
「承認欲求、とは少し違うのかもしれないけど、男としての部分を受け入れて貰えなかったのが僕のトラウマって事だ。」

「で、ここからが本題。ぶっちゃけマサを呼んだ理由はここからなんだ。何らかの形で、僕自身に男性的な魅力があるって認識したい。」
「まあ、自分を前向きにとらえるのはトラウマ克服に効果がありそうだよな。」
「だから、水着の試着とかでチヤホヤされたい。マサってさ、褒め上手な女の子の知り合いっていない？同行させて褒めてもらいたいんだけど、正直この前の合コンを考えると紫垣さんを呼べばいいだろって考えもあるんすけど、人として信用ないから。」
「女子の知り合いって葉山か妹くらいしかいないぞ？」

「じゃあ妹さんと一緒に買い物行こうぜ。正直、お前と体を見比べられる事んじゃないかって考えたらな。公平な立場の奴が来たら心が折られそうだ。」
「誘うだけ誘ってみる。予定自体は空いてるだろうから、断られたらまた相談するか。」

それらの話を咲に伝えたところ――勿論、恭平のトラウマに関しては伏せて買い物に行く話だけだ。結果として咲は俺と買い物に行くという理由で大分渋ったが最後には了承した。だから俺らは集合場所で立っているのだ。
しかしこうやって携帯を弄っている姿は、どうにも不機嫌そうに見える。年頃の健全な反応として着いてきたのかと思っていたが、実はそんな理由では無いのか。或いは最近の素っ気ない態度から察するに話すのも嫌なほどに俺の事が嫌いなのか。
服装も、それなりに安い呉服店一式なところを見るに、異性とお出かけという気合が入っている訳でもないみたいだ。

「いやぁ、待たせたっすね。西口のエレベーターが故障してて遠回りになった。」
「そも開店時刻にすべき。見通しが甘い。」

清哉はキャップ、半袖のワイシャツとぴったりしたデニム。

そしてある程度の宣言通りというか恭平は、ノースリーブの白黒ボーダーシャツと、ゆったりした七分丈のガウチョ。

この世界では股座にデカいものが付いているからゆったりしたパンツが多い。恭平が穿いてきた来たようなのが一応スタンダードで、俺みたいなやつはこれよりゆったりしたような物しか穿けないだろう。

元の世界で女性が胸の大きさでトップスが選べないという話を聞いた事があったが、この世界では逆に男は玉が大きすぎるとボトムズが選べないのだ。この世界基準で言えばぴっちりとしたパンツの清哉を見れば、如何に小さい部類だと言っても十分に下半身の盛り上がりは分かるし、オシャレな上に寧ろ扇情的な格好になる。男性的な魅力が引き立つ上、結局妊娠すれば同じくらい膨らむ訳であるから、大小の好みというのはこの世界では半々である。（男性誌による調べを信じるのであれば。）

女性に対する自信を持つという事で、恭平がノースリーブで来たのは正直意外だった。

「仁科咲です。今日はよろしくお願いします。」
「敬語なんて要らないっすから。僕は名取恭平、来てくれてありがと。」
「牛流清哉。よろしく。」
「もう昼過ぎだけど、飯行くか？混んでると思うから買い物が先の方を提案する。」
「食べてから試着は正気じゃない。」
「僕も同意だな。ちょっと昼食まで時間かかるけど咲ちゃんは大丈夫？」
「別にいいですよ。」

水着売り場に向かう途中、恭平は幾らか咲に話しかけたが、どうにも話し方から敬語が抜けないようで態度からは分からないが緊張はしているようだった。果たして、異性に囲まれての買い物だからなのか。それとも年上との買い物、または水着の買い物が理由か。

なんにしても、恭平を意識してるというのは、彼にとっては丁度いい傾向だと思う。一定以上の興味がある上で拒絶されなければ成功と言えるだろう。それに心持ちや自己肯定がトラウマの払拭に繋がると知れるのであれば、俺としても嬉しい。

そしてやってきました伏魔殿。水着売り場。

自宅にあった下着やらなんやらで大体の想定はしていたが、他人に見せる事を主目的とした水着はどうしようもなく性差の主張が激しい。

予めに説明をすると、この世界において男性水着のトップスというのは着けても着けなくても構わない。

雌の象徴が柔らかいものである以上は、尻や太股と同様に胸部はフェチズムの一つだ。寧ろ、胸部はその二つと比べるよりは、鎖骨の窪みや、うなじ、へそなどに分類されるようなフェチの一つなのだろう。股座が性の中心地である以上は、副産物的な意味合いが生まれる方が興味の対象になりがちというのは柔らかさだけでないのは皆が承知である。

つまりは、二次性徴において変わる部分こそが性的な趣向になりやすいという話だ。

故に、恭平は悩んだのだろう。

二次性徴に伴い大きくなる玉や竿と表裏一体で、支える為に発達する背筋というのは男性的な魅力の一つであると考えられるからだ。顔は言うまでも無いが、背中のスキンケアというのがこの世界の男子にとっては一般的である。

背中の手術痕というのは、決して軽い事として考えてはならない。

彼は今日、勇気を出せずにトップスを買うのか。トップスは無しで試着するのか。それは彼の思いに委ねられているのだ。

というかサイズを考えると本当に選べる水着が少ないんだな。加えて、身長も低いからスリットの入った長いヒラヒラのついた水着も無理だな。折角だから一回、思いっきり可愛い系の水着を着たいが探す事が難しそうだ。

上から被さるようなフリフリ、これだけあればと思うが、明らかに脚を隠す部分が少ない。とはいえ体の構造上、ブーメランなんぞは穿けないから今手にしているのがビキニに該当するレベルの水着なのだろうか。短さでいえばホットパンツとハーフパンツの中間だろうか。

もう一つ、丈が長いものも試着するか。性の受け入れ、出来るなら早い内がいいとは思う。

「マサ、選ぶの早い。」

「そういう清哉は選ばなくていいのか？」

「いつもは恭平がアドバイスくれる。忙しそうだから、マサに頼む。」

見れば、恭平は咲に聞きながら水着を選んでるようだった。チラと、咲が俺に助けを求めているようだったが、友人との契約の履行をしなければならない。
仕方なく、そう仕方なく俺は清哉の水着選びを手伝い始めた。

時間つぶしに苦心する事ほんの三十分弱、恭平が水着を選んだのはようやくといった具合だった。既に試着室の一つを占領している俺と清哉は歩み寄ってくる二人を迎えた。

「見て、マサが選んでくれた。」

試着室の中でクルクルと回りながら、清哉は水着を見せつけている。水着姿だと半袖状に日焼けが分かり、普段からケアをしても尚焼けてしまう清哉のアウトドア加減が良く分かる。
下の水着はホットパンツ程度の短さ。清哉は勇気があるのか男はこれくらいは普通に着れるのか。ある意味では、スタイルの良くなければ穿けない水着で、この中では清

哉以外には買えない代物だ。時間があるから選んだトップスは、ボタンが一つのへそが見えるタイプ。色は上下セットにしておいた。

「マサにしてはそれなりってとこだな。清哉はどうせ泳ぐんだから、上を買うならもっと動きやすいやつのがいいと思うんすけれどもね。」

「でも、これ可愛い。」

見せびらかす様に、清哉は俺らを見ながら揺れている。俺は散々一緒に悩んでいたから、どちらかと言えば咲の――女性の意見を待っているようだった。

水着姿に戸惑っているのかと、咲をチラリと見れば、顔と耳がほんのりと赤くなっているが疲れているのも良く分かる。恭平からの逆セクハラが有ったのだろう。アイツのからかいを受けるのは疲れる、俺は良く知っている。

他の友人に擦り付ける分には楽しいが、家族がその立ち位置に居ると少ししか喜ぶ事が出来ないと分かった。

「私も上着はある方が良いと思います。その、似合ってるので。」

「駄目だって咲ちゃん、上着じゃなくてトップスって言わないと。オシャレじゃないと

モテないっすから。」
「別に、恋愛なんて興味ないし……。止めてもらえます?」
「俺はこれを買う。次、マサの番。」

カーテンを閉めたかと思えば、早着替えで試着室から出てきた清哉は俺の手を掴んで中へと無理矢理押し込めた。
しかし、奴もおとなしそうな顔をして咲をからかう為にギリギリのインナーを着てきたというのは驚いた。待っている間に聞かされたが、からかいが二割で、残りの理由は全体図が邪魔されるのが嫌だからはみ出ない下着にしてきたとの事である。
まあ、試着の際に下着がはみ出てしまった方がだらしないし、そっちを見られる方が恥ずかしいだろう。

流石に、直に穿く人はいないとは思うが誰が触ったとも分からないものだ。どうせ買う時はバックヤードにある商品と取り換えてもらうのだが、気を付けておいた方が良い。

しかし、水着に限らずボトムズを穿くのは面倒だ。諸々を中に押し込めつつ、着るとなると入口が大きい必要がある。二次性徴に迎えた男子は基本的にベルトが必須。なり余る部分を押し込めた後に、紐を縛るだけで脱げないようにとするのは中々に度胸が居る。特に、ウエストとトップの差が有れば有るほどに、お腹周りがガバガバだから、しっかりと結ぶ。

トップスは別に買うつもりはないから下だけ着替えればいいか。

補整下着の上から穿いたからか、大分きつく感じる。だというのに雌の身体は非力で、紐をがっしりと結べない。これで泳いだら脱げかねないから、仮に泳ぎに行くときは二枚くらい穿いておくようにするか？補整下着の上から穿けるなら二枚でも穿けるだろう。

――シャッ！

「こんな感じになった。どうよ？」

「いや、折角なんだから上に着てたら意味ないだろ。」

「デカいだけ、死ね。」

まともにレビューをしてくれない。
まあ、清哉は私怨半分、冗談半分だろう。心の底から誰かを嫌ったりするような奴ではない。だが、嘘でもいいから褒めるくらいはするべきだと思う。お前の水着選んで、そんなに気に入るくらいなら俺の美的センスは損なわれていないのだから、水着じゃなくて身体を評するのは止めて欲しい。
恭平を勇気づけるという目的はあっても、別に俺が上半身裸になるまでも無い。上を脱げと言ったのはそういう意味も込めての事だと思う。
応援はするが、ある程度は自分から行動して欲しい。

「咲はなんか意見とか無いのか？こいつらは役に立たないんだが。」
「別に。何とも変とも思わないから。勝手にすればいいでしょ。」

すごい。誰も優しくしてくれない。あー辛い。過呼吸になる～。
本当は冗談でもこんな考え方するのは良くないんだろう。でも正直なところ急に態度を変えられても困るが、恭平はお互いに協力しようと相談していたのに基本的に協調性が皆無だ。

誰も褒めてくれない。承認欲求は薄い方だと思っていたが、最近ちょっと心が寂しい。

一人静かにカーテンを閉めて、黙々と着替えた。

「はい、次。自信あるやつ入れ。」

「もう僕しかいないんだが？」

「流石、タバコ嗜むやつは自己肯定が強い。」

「ヤニヒラさん……。」

「え、その呼び方って仁科家で浸透してる？やめてくれ、照れるっすから。」

相変わらずフワフワとした中身の無い返ししかしない。

恭平は俺らの中でも、それなりに背が高い方だからファッションに関しては気を遣ってるし、時間と労力をかけてるだけあってセンスと努力は見た目に表れている。アイツの趣味はオシャレと言っても過言ではないだろう。まあ、日常的にタバコと酒に金を使っていて服を買っていたらそれ以外に金を使う余裕なんて生まれようがないとは思う。

「着れたっすよ。」

全体は黒、差し色が緑のパレオと表現すれば一番わかりやすいだろうか。大分のスケスケ具合に、どぎついスリット。にも拘らず、程よい大きさの股座と長い脚、運動もしてないくせに凹んでいる腹部。スタイルが無駄に良いのが腹立つ。

最低限の体形維持しかしてなかったが、俺も少しは体を絞った方が良いのだろうか。

「僕は、自分で言ったんで、折角だからトップス無しなんすけど、如何すかね？」

そして、宣言通り。彼がパレオをなびかせながら回ると、その背中には背骨に平行な縦一文字に刻まれた手術痕があった。別に、痛々しいとも思わない。だが、事情を知っている俺が何かを言ったところで慰めにもならないだろう。

第三者であり、異性である咲の率直な意見以上に心に響くものはないだろう。

俺も適当におだてるのは当然だ。恭平はしなかったがな。

「こうしてみると黒い水着が似合うのって、羨ましいな。」
「筋肉がついてないのに痩せてるから、すらっとしてる。」
「頑張って節制するだろ？タンパク質をあんまり取らないで筋肉付けずに痩せるようにしてるんすよね。」

横目で咲を見ると恥ずかしそうに目線を泳がせていた。流石に半裸ともなると、見るだけでも照れてしまうらしい。

「咲ちゃんはどうすか？選んでくれたやつ、実際に着てる印象は違う？」
「いや綺麗だと思いますけど。」
「それって水着？それとも僕が？」
「その、どっちも、だと思います……。」
「じゃあこれ買うって決めた。着替えるからちょっと待ってるっすよ。」

試着室から出てきた恭平は一目で分かる程にご機嫌だ。皆には見えないように、俺の背中を数回叩いた事を考えると、中々に精神的な余裕が生まれたのが伝わってくる。問題があるとすれば、咲が恭平を見る時に少し熱っぽい感情が混じっている事だ。

これが色恋なのか、ムラっときているという事なのかは知らないが、二人ともに火傷をするような事はくれぐれも控えて貰いたいと願う。

各自買い物の荷物を持ちながら、少し遅めの昼食に向かう。
この付近に長く住んでいれば、知っている店。特に買い物が出来るほどの店舗が立ち並んだ駅の近く且つ、混雑するショッピングモールのフードコーナーとは少し離れた場所。そんな蕎麦屋が、俺たちの行きつけである。

「コスパ考えたらこの店しかないよな。」
「基本的な、コスパは最高だからな。マサはトッピングするから大分持ってかれるんすけども
。」
「蕎麦を食うなら普通は天ぷらも頼むんだ。」
「通は蕎麦屋で蕎麦を頼まない。マサはにわか。」

全く、まるで相容れない。恭平は天丼、清哉はうな重を頼む。確かに、この店の丼は、価格の割には相当美味い。だが、美味しいかどうかが基準ならば、この店の料理は大体において美味しいのだから、何を食べるかは何が好きかに基づくべきだ。

誰に何を言われようと、俺は蕎麦を注文するし、その目的はスーパーとは比べ物にならないサクサクとした衣の天ぷらをトッピングする為なのだ。

いか天、えび天、椎茸、舞茸、茄子、此処では頼めないがふきのとうも美味しい。

気分によってそのままで食べたいし、あったかい蕎麦、冷たい蕎麦のつゆに付けて食べるのも絶品だ。

今日は冷たいざるそばと天ぷらにしよう。トッピングは何にしようかな。

「咲ちゃんって来年受験生だっけ？大学はどこを目指してんの？」

「まだ良くわかんなくて。恭平さんって何処に通ってるんですか？」

「こいつは咲が思ってるより頭いいぞ。」

「通える範囲で一番頭いい大学。友人間では一番頭いい。」

「それでも浪人だったり学部替えでごたついてたから皆とは二周遅れ。お陰で就活のノウハウを教えて貰えるから助かるっすわ。」

「……じゃあ頑張れば一年は一緒に。」

咲が悩んでぶつぶつ言っていると店員さんが料理を運んできてくれた。
四人席、テーブルを挟んだ二人には聞こえてないが俺にはがっつりと聞こえている。正直、咲の成績で今から頑張ってどうにかなるんだろうか。部屋に入って直接に勉強姿を見たわけではないが常に努力できるのが真に天才なのだとは、二十歳を越えた程度の人生経験でも何となくわかる。休日は二度寝に勤しむ妹は大丈夫なのだろうか。

「だとして、浪人時代に本当の天才に会ってプライドなんてないんすけどね。」
「その話は聞いたことないな。」
「初耳、なんで隠してた?」
「それなりに自信とかあったから、汚点なんて隠してればと思ってたけど。僕が思ってたよりも皆は受け入れてくれるし隠しても意味ないと思ったんだ。」

付け合わせの漬物をかじりながら、恭平は事もなげに言った。一時間にも満たない時間で、恭平は過去のトラウマを吹っ切り、前を向いて歩きだしたのが分かる。

「同じ塾にいた見るからにヤンキーの女子だったんだけど、現役の癖に僕より抜群に頭

が良かったんだ。」
「でも成績は一番だって言ってなかったか？」
「見た目から感づいてたけど、元々あまり勉強してなかったんだと思う。それでも、普通は受験の応用問題なんて殆どの場合は解き方を暗記して練習あるのみなのに、基礎知識を覚えてからの塾内順位の上がり方がえげつなかったんす。応用を初見で解ける程に知能指数が高い。暗記は時間と比例するから、たった一年で追いつかれることは無かった。でも僕と同じ大学に受かってた筈だから、今頃はすごい頭が良いんだろうなとは思うな。」

「名前知らない？」
「淀野とかだったと思うんすけど、大学探しても居ないし覚え間違えかもだな。」
「入学と同時に名字が変わったのかもな。」
「それなりに探して見つからないすれ違わないとしたら、大学デビューでヤンキールックスは卒業したんだろう。今頃は黒く染め直してたりするんすかね。」
「眼鏡とワンピースで学校に通ったりしてそうだな。」
「……。」

視界の端に映るのは、咲がテーブルの下で隠れながら頭が良くなる方法を調べている光景だ。雑談が盛り上がっている内に、清哉は食べ終わってしまった。

「悪いな、清哉。喋るにしても食べてからだよな。」
「気にしなくていい。面白い話が聞けた。」
「僕より天才がいるって話が面白かったんすか？」
「勝手にハードルを上げられた元ヤンが可哀想って話。」

その後、咲が通っている塾と恭平が通っていた塾が同じだったと分かったり、何となしに咲が二人と連絡先を交換していたが、俺にはそれほど関係の無い話が殆どだった。というのも、今日は買い物に同行したが、反抗期の咲が俺に関係の有る話題で盛り上がれない事が大きな要因なのだろう。

思ったより話し上手で聞き上手という妹の新たな一面を発見しながら、中々に会話に参加できない話題ばかりで手持ち無沙汰な俺は、意味も無く葉山へ「水着を買いまし

た。」というメールを送るのだった。別に俺の会話が下手なのではなく、食事をしながら喋るのが苦手というだけだ。咀嚼している時は口を開きたくないだけなんだ。

因みに、約三時間後にきた葉山の返信は「水中での運動は全身に負荷がかかって良いらしいよ」との事だった。やっぱり、もう少し痩せた方が良いのだろうか。

空に輝く園　前編

夏祭り、何と甘美な響きだろうか。

恭平に頼んで、清哉くんに告白するお膳立ては済んでいる。今日この日、あたしは勝負に出なければならない。

それにしても、特に脅すような事も無く、だというのに頼みを聞いてくれる従弟は本当に心根が優しいのだろうと思う。

恭平は優しい、だからこそ親しくなる程に彼は人を遠ざけようとする。それが今の彼。親戚の集まりでしか会わない関係だったが数年前に突然、砕けた口調になっていた事に直面した時に面食らってしまった。

人当たりが良く、親しみやすい、そんな印象を恭平にはそれまで感じる事は無かった。あれがあの子なりの保身で、その猫かぶりから嫌悪感があらわれるのは親しい人――あたしが見た中では両親に嫌われるような振る舞いをするのは知っていた。猫かぶりも、親しい人への嫌われるような振る舞いも、ある日突然に人が変わったようだと聞いた。

叔父さんには、それとなく面倒を見るように頼まれている。だから、様子を見るついでに合コンの話題を振ったりしていたのだが、恭平の照れ隠しには程遠い悪態ですら許している友達が居ると分かり、あたしは安心した。

怪しまれない為の、冗談で言った彼氏探しだったが、話をするだけで清哉くんに惹かれていくのが、あたし自身で良く分かった。だから、女として誠実に対応しなければならない。

彼がする気の抜けた会話。だけど心に染み入る魅力がある。

会話の糸口としての質問には基本的に一言でしか返さない。でも、清哉くんが好きな話題になった時に、ワンテンポ遅れて、彼の目に映る景色を教えてくれる。

『清哉くんって、好きな飲み物ってあるの～？』

『水。』

会話をすると、くりくりの目を必ず向けてくれるところも可愛い。

『でも、疲れてたら、モノによって染み入る上手さが違う。詳しくないから出来ないけ

ど、山に登った後にコーヒーを淹れられたら格別だろうなと、登ってると偶に思ったりする。』

喋り方は起伏がなくても、込められた感情が伝わってくる。あたしがある程度の感性を商売道具にしているのもあるが、混じりけのない気持ちに触れる事がなにより人の美しさと思える。

そんな純粋な、人の綺麗な部分を見て、心に蓋をしない事に決めた。

あたしは清哉くんに告白するのだ。

集合時刻より少し前、休日だというのに着信した嫌な上司からの謎の人探しメールに、断りの意味を含んだ空返事をした。このちょっとしたイラつきに目を瞑れば、殆ど準備は万端だった。

指定の集合場所には、いつぞやの合コンで会った青年と二人で他の人たちの待っている。

「この辺で一番大きな祭りとはいえ、すっごい人混みだよね～。」

「本当に、皆が心配になるよ。だって送りに咲ちゃんが来るけど男の子三人だから変な人に絡まれてないかなって。」
「仁科くんの妹ちゃんだっけ？」
「そうだよ。少なくとも実の兄を守ることは保証出来るんだけどね。」
「それって妨害されてるって意味でしょ～。」

就職してから、初めて出来た同性の友人だと思う。希は特に嫌われるような性格では無いし、見ていればバレバレの態度とかは寧ろ好感が持てる。
恋のライバルじゃない所もあたしにとってはポイントも高い。
数年ばかり年上なだけではあるが、心が擦り減ったあたしにとっては現在まで続く彼女の初恋を応援したい気持ちはそれなりに持っている。加えて、今日の集まりの中では自分が最年長。節度ある大人としての責任がある。恋心よりも優先しなければならない事は山ほどあるのだ。なんらかの問題が起きたらあたしの責任になる。
それら諸々に余裕を持って対応し、落ち着いた大人の魅力で清哉くんにアピールしてから告白するのだ。

「あっ、みんな来たみたいだ。」
「三人とも浴衣だ〜！」

はい、ギャンかわ！
マジで清哉くん可愛すぎなんですけど！えっ、浴衣が似合いすぎで直視してるだけで目と脳が融けそう。浴衣だからいつも冠っているオシャレ帽子じゃなくふわっとした髪の毛があらわになっている。見てるだけでも柔らかそうな髪、きっと膝の上に乗せて、ブラシをさせてもらうだけでも至福の時を過ごせるだろう。

そう、平均よりは少し小さい背丈とスポーツ系のスッキリした身体。持ち上げるだけでも軽いだろうし、抱き抱えてみたらどんなに幸せになるだろう。
男性のシンボルが慎ましやかなのも、個人的には激マブだ
浴衣の帯に近い部分にあるだけに、大きければ大きい程に腰から下が不格好になる。着崩れる可能性も考慮して歩き辛くなるとも聞く。
だと言うのに、他の二人と違って清哉くんが軽やかに近づいてくる様は何だろうと。あたしの気分は、まるで水浴びに来ていた女神に目を奪われて歩み寄っていく旅人のようである。

横着してちょっと場に似合わないポーチに荷物を纏めてきているのも個人的には寧ろポイントが高くていい。

改めて見ると、おててが小っちゃくて……、おててが小っちゃいな!?

新たな魅力を発見伝だ。今までに見つけた可愛さに加えて、チャーミングさであたしの許容限界をあふれ出しそうだ。

暑さや、性的な意味なんかなくても、のぼせ上ってしまいそう。溢れ出る赤い情熱が、今にも鼻の奥から噴出しそうだ。

は～清哉くんきゃわゆ～!ガチにＬＯＯＯＯＯＯＶＥだわ。

「似合ってる?」

「すっごい似合ってるよ～。キュン死にするかと思っちゃった。」

「良かった。」

ん゛っ!!

上目遣いで微笑まれただけで心臓が収縮したような感覚になる。でもここで心のままに行動してしまうくらいなら、今までのデートで気持ちを伝えてしまった方が早くに恋仲になれた筈だ。

今日の花火大会で、花火が撃ちあがっている最中に告白するからこそ意味があると、あたしのプランだ。

「今日、楽しみ。」

「あたしもだよ！清哉くんがくるまでも心臓がバクバクだったけど、こうして目の前にいるとはちきれそう。」

「……分かりやすい。」

見惚れて――清哉くんと談笑していると、他の人らはもう出店で何を買うかの相談をしているようだった。

「清哉、屋台マップを配ってたっすよ。どこか回りたいところ有ったら探すけど。」

「人数分だけ貰ってくればいいだろ。面倒くさがるなって。」

「マサは馬鹿だな。浴衣着て、荷物持ってるんだからこんなの持ちながら歩いてたら転んだ時に手をつけないだろ。僕はそんな危険なことはしたくないな。」
「じゃあ、にっしーの分は私が持つね。」
「大丈夫だ俺が持つ。おい、上に掲げるな。届かないだろ。」

会話の流れで、女子が男子の為にマップを持つ事になった。

マップをのぞき込む清哉くんと肩が触れ合う。
香りとか感触だとか夏の魔力も合わさって、もうあたしは正気を保つのが出来なくなってきている。声を拾う事すら難しい。
あたしの身体に触れている。お淑やかでありながらも油断して接触してしまうような、まさか心を許してくれているのか?それとも天然?小悪魔だろうとそうじゃなかろうと、こんな振る舞いをされて耐える事も、気づかない振りをする事も限界に近い。

女がすたるとかの問題ではなく、手をつなぎたいという欲求を抑えることが出来ない。そんな段階すらフッ飛ばしてその横顔をぷにっと突きたい欲求すら湧いてくる。一瞬一秒でも早く二人きりになって、恋仲になりたいという胸の内を告げたいと思って

いる。

「水ヨーヨー。みんなで二つ以上山分けしよう。」

「そんなに獲っても抱えきれないだろ。そんな簡単に獲れるものでもないし。」

「マサには無理。俺は余裕。」

無言のままに、服を引っ張られる。荷物持ちという意味らしくて、水ヨーヨーを持ち帰る役割はあたしであるらしい。頼られるだけで、心が満たされる。

しかし、マップはあたしが持っているのに清哉くんは出店の場所を分かってるのだろうか？

「歩くの疲れる。ちょっと休みたい。」

指をさされたのは、休憩用のベンチ。祭りが始まったばかりという事もあり誰一人として座っても居ない。鳥のフンも雨露も無いが、清哉くんが座る所にハンカチを広げる。

眉をハの字にして、ハンカチの心配をしているが汗拭き用のタオルも見せると多少は納得してくれたようで、ふわりと座った。

「はい、どうぞ。」
「急にどうしたの？どうぞって言われても～。」
「散々アプローチかけて、言うことないなら帰るけど。」

そっか。気持ちバレバレだったんだ。
だったらここで逃げる訳にはいかない。

「好きです！付き合って下さい！」
「いいけど。」
「本当に!?」
「結婚って訳じゃないし、付き合うまでなら。」

恋愛観への意識が違う。それとも危機感とでも言うのだろうか。信頼してくれてるの？だとすれば嬉しいけど、ちょっと無防備すぎて良心が痛む。

守ってあげないと。

「じゃあヨーヨー取りに行こう。」

差し出された右手。少し恥ずかしがったように、あたしを見つめてくれる。
きっとこの幸せを享受する為に、これまでの人生を歩む必要があったのだろう。こんな天使を養う為だったら、どんな苦痛だって耐えられると思うな。

手をつなぐ。
握り返されただけで舞い上がってしまう。

「安心して、花火までには確保する。」
「すっごい自信だね～。もしかして縁日名人？」
「スーパボールも得意。どんな道でも究めると意味がある。最初から意味を求めるなら名人になれないし、名乗るようなら求道者じゃない。」
「じゃあ、清哉くんは求道者じゃないんだ。」
「程々に、懸命に、だから名乗ろうと、言葉にしたからダメって訳じゃなくて……。

それなりに、その。桜子さんのこと、嫌いではないと思って大丈夫だから。」
「もっと好きになって貰えるようにマジ頑張るから。」
「うんっ。」

今日の花火は私たちの道を照らす祝砲になると信じている。にしてもいい匂いするな。

「いやー肩の荷が下りたっすわ。」
遠目で、カップル成立の瞬間を見ながら恭平さんは溜息を吐いた。祭りの喧騒に消えていく路次さんと清哉さんをこそこそと追いかける男の人を一人にする訳には行かない。
わざわざ誰かさんに黙って葉山先輩を呼び出したのが功を奏したわ。トラウマだなんだと口にする割に、誰も彼もが危機感が足りない。男一人で独断行動？何も学んでな

いにも程があるわよ。

目の届かない範囲。どんな事が起こるかなんて、私が知りうる出来事ですらまだ最悪ではないのかもしれない。だから、親しくなかろうと目が届かないと悪い方向に考えてしまい、私は動きが固まるか、勝手に動いてしまうのかもしれない。自己嫌悪というのはない。でも、何かを考えてしまった時に深呼吸をしない日があるかと問われれば、問題ないわ、と答えられる筈もない。

誰かに言われるまでも無い程、臆病な私。取り巻く色々な面倒の原因となった事件を解決しようと一歩踏み出した兄さんと面と向かって喋ろうともしない。壁一枚程度の部屋から聞こえる会話から恭平さんの事情もある程度知っていた。でも、恭平さんの背中の傷を見て経緯もある程度知っているのに、正直な話をすれば感情が湧かなかった。目を逸らし、違う部分をねめまわすのが精いっぱい。

私にとっては目に毒。それだけを感じた一日で、兄さんは少し勘違いしてるように思える。

誰も彼もを心配と思う気持ちはあっても、自分自身でさえに目標すらないのが現状。

ただ少し、恭平さんみたいな美人と近づけたらと努力すれば、そんな気持ちがどれだけ続くのかも分からない。学校帰りに塾に寄って、帰った後に何をする訳でも、したい事も無い。兄さんは勝手にゲームやらアニメやらを楽しんでいるが、私が仮にテレビをつけてトラウマの引き金になるかもと思えば、ただ寝転ぶ事が趣味になるのだろうか。

一過性の熱に浮かされやすい。兄さんの意気込みを勝手にしろと言った事さえ言わなきゃよかったわ。

身内があんなになって、あの時の兄さんと同じように本気で何かを打ち込むという逃げ場を無くす行為に、やる気が起きない。考えがコロコロと変わる。あっちに行ったりこっちに行ったり。私の心の所在は私が一番分からない。

「何を難しい顔をしてるんだ?」
「そんなでした?。」
「質問口調で僕に言われても、何か考えてたんじゃないんすか。」
「まさか男の人が隣に居て、考えることなんてないですよ。」
「じゃあ、僕のこと考えてたんだ?」
「隣にいるなら直接に言います。」
「もっと自分の発言に責任持てよ。でも、浴衣褒めてくれるだろ?清哉たちは無事に見

届けたし、僕らは今から夏祭りを楽しむってことで。」

　着付け時点で私が迎えに行った際も、集合場所に来てからも催促されて既に浴衣姿を何度も褒めている。そう何度も可愛いって言葉を口にすると言葉の重みや価値が薄まってしまうと思うからいい加減にして欲しい。

「二度も三度も同じように褒められませんよ。」
「じゃあ、他の褒め方して。」
「浴衣自体は出尽くしたからもう容姿について褒めればいいですか？」
「興味なさげに言われると僕だって傷つくんだけどな。咲ちゃんって照れるんだけども表情が変わらないし、からかってもなんとなく罪悪感が湧いちゃうんだよね。」

　良く言う。買い物の時は笑いながら水着を片手に私をからかい続けた癖に。

「良かったじゃないですか、極めて正常で健全な心が残ってますよ。」
「僕のが感情の残り具合で言ったら段違いだと思うっすけど？花火を見て綺麗と思うくらいには。」

花火を見ればいくら何でも私だって表情くらいは変わる。どれだけ鉄面皮だと思われてるのよ。

「恭平さんは、ポーカーフェイスじゃない割には心が無いってことですか？それとも私の表情を崩せない負け惜しみですか？」

「そこまで言うなら、相手の表情を崩した方に1ポイントで5ポイント先取した方の勝ちで良いだろ。」

「受けて立ちます。恭平さんは不意打ちでもなんでもしていいですよ。私は負けませんから。」

「じゃあ、対等な勝負だ。僕への敬語も止めてもらおうか。」

「……わかったわ。花火が打ちあがるまでには決着に。」

「まさか、もっと早くに終わると思うぞ。」

そんな強気の言葉だったが、何はともあれ、出店に向かう。第一に祭りを楽しみながら、勝負も行う。

だけど買い物で愛嬌を振りまくだけで、恭平さんは既に三回の負け。私は未だにゼロポイント。流石に楽勝だ。曰く、ハンデとか言っているが今食べてる物を消化し終わって三軒は回るうちには私の勝ちになるだろう。

「見るからに兄妹というか、まあ女の子だからな。マサよりも滅茶苦茶食べるじゃんか。」

「焼き鳥なんて一人で1パック食べるのはおかしくないでしょ。恭平さんは、わたあめを食べたってお腹に溜まらないのに好きなの？」

「食べ物の基準が腹持ちの良さの時点でおかしいだろ。僕は急に脂っこいの食べるとお腹を壊しちゃうから。縁日の屋台だとお菓子類とかになっちゃうかな。」

「ポテトとか焼きそばとかは分かるけど、焼き鳥ならそこまでじゃないわ。試しに一本食べる？」

「くれるんだったら有難く。」

串を渡そうと手に持ってみるけど、恭平さんの右手には荷物鞄、もう片方はわたあめで埋まっている。人の流れから少し避けた場所に移動した恭平さんは口を開けている。良く分からないが、取り敢えず男性にいつまでも荷物を持たせ続けてるのも常識が無

かったのかもしれない。
串じゃなくて鞄へ向けて手を差し出すべきだったわ。失念してた。

「咲ちゃん、いい加減に恥ずかしいからさっさと食べさせて欲しいんだが。」
「いやそれより、荷物持つよ?」
「だとして今更か?というかこの前の買い物でそれなりに動揺してたのに、食べ物を食べさせることにトキメキを感じたりしないんすか?」
「私の信条として、食欲に他の雑念は持ち込まないので。」
「これはポイントゲットは大変だな。まあ気にしないならさっさと、あーん。」
「はいはい。」

歩きながら催促されたら横向きに焼き鳥を差し出す。わたあめと焼き鳥を交互に食べているが、恭平さんは甘しょっぱいのが好みなのだろうか。まあ単品での美味しさというのは大事だけど、それ以上により良いものの追求とかは大切だとは感じている。
ホットケーキにバターを乗せるのも先人の知恵と言えるのかもしれない。私も今後は夏祭りに特製のタレとかを持ってくるのもありかもしれないわね。

「はい、１ポイントゲット。」
「え？」
「食べ物を考えるだけで表情筋が緩みまくりだな。僕から食べ物の話をするだけで勝っちゃうのは詰まらないかもっすね。」
「いや負けませんから、二度目はないと思って――。」
「おすすめのカキ氷の味は？」
「味と言われると難しいわね。だってシロップって一般には全部同じ味って言われるから、分類的には宇治金時や練乳系が他の味って区分になるんでしょうけどでもいちご練乳はちゃんといちご味だからやっぱりシロップというのも一つ一つが違う味という前提の話で良い？」
「それだけ語って感情の変化がないって言い張るんなら僕の負けでいいけど。」
「……食べ物の話は禁止を提案したい。」
「じゃあ他なら断らないんだ。」
「女に二言は無いって、信じてくれるならいいわ。」

人の弱みから攻撃してくるとは大人げない。しかし、私だって人当たりの良い恭平さんの買い物は負けそうになるまではこれ以上のカウントをするつもりはない。お互い

に弱みは見せた状態、言うなればまだまだ五分の状態だ。
負けが決まったわけじゃない。

「咲ちゃんがマサへ邪険に振る舞ってる理由を聞いていいか？」

綺麗な顔をして、人の喉元に刺さるような言葉を突き付けてくる。今ほどに、心の殆どが死んでいる事に利点を感じたことは無い。

「なんかムカつく。って理由になる？別に、あいつだけじゃなくて親も同じ。でも同じ家で暮らすなら二人よりは一人のがマシだと思うのっておかしい？。」
「本当に？マサのトラウマが原因じゃないの？例えば。」

「マサに忘れられるのが、怖いとか。忘れられたこと自体が、咲ちゃんのトラウマになってるとか。」
「……。」
「ねえねえ、当たってるかどうかだけ僕に教えない？」

「――まさか、あいつの主治医って結構な名医なのよ？私も様子がおかしかったらあの先生は気づくわ。トラウマなんてもってのほか。」
「そっか～、ポイントでも稼げると思ったんだけど見当違いだったっすね。」

当然。私にトラウマなんてないわ。きっと恭平さんは、当時の兄さんの様子を見てないからこういう考え方が出来るんだろうと思う。正直、私の考えでは出てこない方法で態度の理由を割り出してくるとは考えなかった。
目ざとい。このまま交友関係を続けていれば、その内この人にはバレてしまうだろう。その前に決着をつけなければいけないわ。

「あいつが、私との思い出を忘れたことがあるのは本当。でもそんな程度でトラウマにはならないでしょ。」
「当事者じゃないからってことか。嫌なことを思い出させてごめんね？」
「気にしなくていいよ。」

それに、思い出す事は何もない。
『ごめん、咲。ごめんな。』

私は、兄さんのあの言葉と表情を絶対に忘れない。
兄さんにあんな事をした奴らを絶対に許さない！忘れはしない！身内の人生を滅茶苦茶にした奴らを当事者が許そうと、私は絶対に報復すると決めたんだ。だからその為なら私一人の人生を捧げたって良いとさえ思ってる。
最後まで終わって、まだ私が許されてるなら、恭平さんのトラウマの原因になった人間の人生をズタズタにしても良いかもしれない。ふふふっ。きっとこの怨嗟が私にとっての生きる楽しみなのかもしれない。

「ふふっ。」
「はい、1ポイント。どうして笑ったのか知らないけど、思い出し笑い？」
「ううん。少し先の未来を想像して。楽しみなことがあると嬉しくなれるってそれなりに普通だと思うよ。」
「まあね。でも目の前にも結構面白いものって転がってるんだけどなぁ。」
「目の前？」
「そう、あれ。」

「あ〝あ〝〜〜〜！なんでよぉ〜！なにも祭りの最中にフラなくたって。もう！もう！！！！
私の何が駄目なのかしらぁ〜！ぁあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝〜！」
男性にフラれて、ビール缶を片手に泣き叫ぶ女性が一人。

「ぷっ。あれは反則でしょ。」
「だよね、人選がずるいな。」
「「あの紫垣さん。」」

ん？
「えっ、恭平さん知り合いなの？」
「咲ちゃんこそ、あれと知り合いなんだ。」
「通ってる塾にバイトでいるのよ。まあ、嘘みたいな武勇伝ばっかりだけどあんな姿を見たら嘘とも思えないわ。」
「武勇伝って？」
「曰くナンパの達人とかの恋愛武勇伝。でも確かに何度も何度も破局してたら小出しのネタなんていっぱいあって当然ね。」

「教育の立場に居たら駄目だろ。僕だったらクビにするかな。」

確かに、休憩時間には適当な女子を捕まえて常に猥談をしているイメージだし、普段はそれなりに綺麗な言葉遣いだが、話がヒートアップすると結構荒い言葉になる。

でも、教師陣に厳格な注意を受けているところは見た事がない。信頼がおかれてるんだろうけど、その点に関しては一切が謎に包まれている。

「前に、塾へ恩義があるって言ってたけど信用ならないから半信半疑よ。恭平さんは何か知らない？通ってたのって同じ塾にでしょ？」

「あんなの居たら嫌でも覚えてると思うぞ。多分、同じ系列塾で違う場所だと思うっすよ。」

「まあ、あれは忘れられないのは分かるよ。」

「今月で８人っておかしいわよ！夏祭りに向けてガードが緩まってるのってその通りだけど、その通りだ～け～ど～！ゴホッゴホッ！うぇ、気管に入った……。デート一回で女の価値が全部分かる訳ないって分かって欲しいんだよ、ざけやがってよ！」

回収すべきか悩むが、横目に恭平さんを見るが紫垣さんに見つかったら面倒だなという感情を隠しきれていない。

「恭平さん、花火始まったし場所変えましょう。」
「そうだな。もっと見やすいところに移動しようか。飲み物でも途中で買おうか。」
「あの一角は避けてもう一回お店を周ってみるのは賛成よ。晩御飯には全然足りないし。」
「……。焼き鳥、４パック買ってなかった？」
「ちょっと炭水化物が足りないわ。祭りが終わる前にカキ氷も食べないと。」
「さいですか。僕は見てるだけでお腹いっぱいだ。」
「恭平さんはちょっと痩せすぎよ。そうだ、私のご飯を半分あげようか。」
「五分の一で結構だ。」

やっぱり恭平さんは謙虚だ。人をからかったりする癖に、それでも十分に遠慮してあんな感じなのだろう。付き合いの長い兄さんたちは、分かっているから本気で怒らないんだろうと今日で確信できた。

話に聞く恭平さんは大分人として最低な部類だったから、もしかしたらと思ってい

た。だけど恭平さんの心には十分に優しさが残っている。復讐、言えばきっと止められる。でも私は絶対に加害者の誰かがのうのうと生きているなんて許す訳にはいかない。せめて、花火くらい綺麗に散りたいと――――――。

――目深にかぶった帽子、だけどアレは間違いなかった。

「っ！今のは！」
「どうしたんだ？咲ちゃん怖い顔して。」
「いや見間違えですね。」

見間違えるものか！でもこんな人込みで追いかけるなんて出来ないし、恭平さん伝いで兄さんにこの怒りを気付かれる方が余程不都合だ。兄さんのトラウマの原因がすぐ近くに居るというのに、また私はこうして黙っている事しか出来ない。

こんな時ぐらい誰かにバレる程の怒りを顔に出した方が、この心に正直なのだろう。私の心は、兄さんと同じで、あの時から固まったまま。今すぐに行動を起こしたい気持ちは山々だが、私は感情的に誰かを傷つけたりしない。

計画的に、追い詰めてやるんだ。

空に輝く園　後編

こんな年になっても、大きな音と色んな形の花火にはワクワクしてしまう。我ながら子供っぽいかもしれないが、意中の男の子と二人きりで花火大会に居るんだから、ちょっとは浮かれてしまうものだと、きっと誰もがそうじゃないかな。

肝心のにっしーは花より団子とでも言いたげに、時たま花火を見る程度で、殆どは色んな種類の食べ物に夢中なんだけどね。

適当な、出入りの無い石段に腰を下ろした私たちは、花火が見辛い場所ではあるが日陰で人も少ないと言うべきか私たち以外居ないというべきか、割と過ごしやすい場所で休んでいる。時たま人が来るとすれば、人気のない場所を探したカップルが、気まずそうに横を通って上にあるくらい神社に行ったきりだ。

出店を回る時、私が思っているよりもずっと、にっしーは歩くのが大変そうだった。あれだけ、アレが大きいと単に歩くだけでも浴衣がはだけてしまいそうで、私だって目のやりどころに困るくらいだし、男性はあんまり外でそんな姿を見せたいとも思わないだろう。

はだけた着物のにっしー、か。

当事者は食べ物を口に運びながらも、既にズレ始めているからか着物を抑えながら座っている。ぐっと抑えているからか、寧ろ体のラインが強調されていて直視も出来ずに私はまた花火に目線を映してしまう。自分自身、大学生で居られるのも半年あるかないかで、もう社会人にもなるし多少は度胸がついたかと思っていたが、全然たりないみたいだね。

「美味しいのはあった？」
「よっぽどじゃなければ題材が良ければ不味くならないだろ。焼き鳥、オム焼きそば、いかめし、焼きとうもろこし、今川焼。食べたいものは多すぎるが食べきれるものは多くないのが悩ましい。」
「今川焼ってこの辺だと今川焼？」
「そりゃ、まあ屋台に書いてあったし今川焼だと思うが。結局大事なのは中身だと思うぞ、俺は。」
「ああ、にっしーはそうだろうね。」
「餡子の入った菓子は値段が高ければ高い程に美味しいが、クリームは店の良し悪しに左右されづらいからな。」
「クリーム美味しい？」

「美味しい。」

　黙々と食べる様子を見ているだけで幸せになれる。にっしーが食事の時に感じている幸福の加減が、ちょっとした表情に出るだけで自然と私も笑顔になってしまう。食べ物を運びながら、少し口元が緩むだけ。意地っ張りなのにふと見せる男の子らしさ、ずっと昔から笑顔だけでイチコロになってしまう。

　でも、昔ほどに屈託のない笑顔とは言えないかもね。だから、にっしーの気持ちとか事情とかを考えると、心臓の鼓動が早くなる本能に少し自己嫌悪を覚える。　その上、何もせずとも一緒に居るだけで子供の頃は胸が苦しくなる上に頭も回らなかったと覚えてるけど、普通に隣に座れるようになり、脈が一番反応するのは性的な要因になった。義理だって分かってたけど、小学校の時に、バレンタインのチョコを渡しに来るってだけでドギマギしたし、アポ取りの電話をかけてくれただけで、どうしたらいいか分からなくて照れて父親に受話器を押し付けたような思い出もある。

　だとして、にっしーは微妙な危機感のなさと何とも言えない色気のなさが混在しているから付き合いが長ければ長い程に一般的な可愛さやエロスを感じる事は少ないと思う。でも、そう感じられるのって、大人になった？それとも慣れ？昔は一挙手一投足で耳が熱くなったんだけどね。

「適当に買って、絶対に食べきれない癖に。」
「買う時は行けそうな気がしてるんだけどな。男の中では食べる方だけど、一定以上食べると箸が進まなくなるんだ。まさか呪いか？」
「積載量が上限なんでしょ。デザートでお腹いっぱいまで食べるくらいなら普通に焼きそばとかを買った方が良かったと思うけどね。今川焼だけで2パックは買いすぎだよ。」
「その気になれば作れそうなものは後回しだ。これだってクリームじゃなけりゃ買わなかったぞ。」
「まあ、チョコバナナとかリンゴ飴なんてお祭りじゃないと見かけないよね。」
「美味しいかどうかは別物だけどな。」

そうリンゴ飴。

私は堂々とにっしーの食事風景を見る。言い訳をするつもりはないけれど、多分健全な女だったら目が追ってしまう。

通称、イブズアップル。『雄の膨れたもの』というヘブライ語の誤訳が語源らしい言葉で、つまるところが子宮の事である。世の女性は、子宮っぽい形の物を男性が食べてる

だけで、割かし興奮する。中学生以上の女だったら、共通の認識と思って良いかもね。
リンゴ飴は、リンゴという直球にも程がある上に、カットフルーツと違い丸ごとの形を保った天才的な食べ物だ。

にっしーが小さい舌でチロチロと舐めている！

「ヴッ！」
「おい、葉山大丈夫か!?」

危ない、お腹を抱えて隠さなければ社会的に即死するところだった。信用を失わない為にも腹部に集まった血を体全体に分散する方法を考えないと。
――ポスッ。
顔に、タオルを押し付けられた。

「大丈夫か？急に声をあげるし、見たら鼻血が垂れてるし。治まるまでソレ使っていいからな。暑くてのぼせちまったのか。ちょっと待ってろ、冷たい飲み物を買ってきてやるからな。」

返事をする前に、にっしーは出店の方に小走りしていく。この前の一件で力になると言ったというのに、私はどうにも俗物的で、迷惑をかける。だけど今回ばかりは、タオルの匂いに気を取られたりはしない。ポリバケツに水と氷と缶ジュースをぶち込んだだけの飲み物屋は、私の位置から見えるけれど、にっしーが変な奴に絡まれたら私は直ぐに走っていかなければならない。

トラウマ克服、男の子を夜の人込みで一人にしない事、頑張らなければいけない事なんて幾らでもあるのに普通に二人きりになれると舞い上がってしまう。

「もっとしっかりしないとだよね。」

「どうでもいいんじゃないか?だから、正美くんにちょっかいかけて、これ以上影響してくれるのって俺様としては超こまるんだ。」

誰も居ないと思ってた矢先、茂みから人が現れた。

その声で、私は血の気が引く。顔をあげると奴がいた。なんでこいつが此処の居るのか。サングラスをかけ、目深にかぶったベレー帽があっても見間違える筈がない。

鈴のなるような高く綺麗な声で、スラッとして高い身長のモデル体型。

栂園太陽。この男のせいで、にっしーは。

歌を、奪われたんだ。

全ての始まりは中学入学と殆ど同じだった。

「正美くんだっけ！自己紹介で歌が好きって言ってたじゃん？俺様も歌うまいんだよ今度聞かせろって。」

「音楽の授業とかか？三日後のが歌う内容ならみんなが聞くことになるだろ。」

「そうだな！俺様の歌を楽しみにしておけよ！」

幾つかの小学校から生徒が集まる中学で、二人の出会いはそんな感じだったと記憶している。私は小学生の時から、にっしーは歌が上手だと知っていたし、歌っている時に

楽しそうな表情が私は好きだった。だから当時は、歌が好きそうな友達が出来てにっしーが喜んでいて、その笑顔が眩しかった。

入学と同時に、栂園はその容姿で有名になっていた。万人受けする王道の男という意味では、私が知りうる人間の中でも一番だとは思う。

「正美くんってなんか独特な魅力あるよな！声の質感は十人十色だし、でも俺様の方が歌は上手いし、技術があるんだけどさ！」

「……負けてねえけど。」

「ふーん。いいだろう。じゃあ負けを認めるまでは勝負しようぜ！」

その頃から、栂園は超人として学校中で噂され始めた。運動、勉強、歌に始まりダンスや武道、料理、果ては美術などにおいても学校で男の中で一番に君臨していった。あいつに負けるなら仕方ない、そんな雰囲気が広がり、一目でわかる出る杭だったが杭を打つだけの逸材は居なかった。

ただ、小数ではあるが負けを認めない人間は居たのも事実だった。

「にっしー、大丈夫なの？会うたびに栂園に絡まれてるけど。」

「面倒だけど、仕方ないだろ。俺だって負けを認める訳にはいかないんだからな。」

「わ、私はにっしーの歌の方が好きだけどね。へへへっ。なんか柔らかい感じがするし、落ち着いた声だし。」
「ノッポは歌のことなんてわかんないだろ。それに技術で負けてるのは、認めないとだがな。あいつとは噛み合わない。」
「なんで？」
「あいつは、歌が好きじゃないんだ。話をしても意図とか気持ちとか、全くわかり合えやしない。どんな歌が好きとか、どんな歌手が好きとか、あいつには一切ない。」

もう、栂園はにっしーにとって、歌が好きな友達では無くなっていた。にっしーが対抗すればするほど、栂園は嬉しそうにしていた。でも、にっしーが特別だったんじゃなくて負けを認める人が増えていたのが本当の理由だと思う。栂園に勝てないと悟った人たちは大体が友達なろう、という形で保身に走る。完全無欠の人間である栂園を敵に回す事だけはしたくなかったからだ。

敵、というのは言葉としては正しくない。栂園にとっては全ての人間は等しく同様の扱いで、パラメーターの高さに応じて扱いが良いだけ。実際、長く対抗していたり、頭が良い人と一緒に居るのが多かった。

中学時代の未熟な子供だった私たちには、あいつの徹底した実力と向上心だけで人を判断する思考回路は理解できなかった。

だから、栂園に迎合しないにっしーが友人を自称する集団に敵視されるのは時間の問題だった。精神の摩耗なんてお構いなしで日に何回も勝負を持ちかける栂園。その栂園は勝負の時は付き合いが悪い為に、さっさと決着をつけようと勝負の度に徹底して心を折るべく試行錯誤する自称栂園の友人集団。そして対岸の火事を見る女生徒たち。

学校内だと気恥ずかしく、一年の時はクラスも違って、基本的に塾でしかにっしーと喋らなかった私が学年の異常に気付けたのは、全校集会の校歌斉唱でクスクスと笑い声が聞こえた時だった。

曰く、お前の低い声が混ざると太陽の綺麗な声が聞こえない。

曰く、大きい声が出せるだけの下手糞で耳に障る。

曰く、小学校の頃から女子に媚びてるみたいで気持ち悪かった。

二人が勝負の題目にしている歌に関する内容だけではなく、にっしーの人格否定をする男子すら現れ始めた。隠れてする訳でもなく、栂園も知っていたのに行為を止める素振りすらなく、寧ろどれだけの圧力に耐えられるかを観察して楽しんでる様子さえあった。

人は楽しいと笑う。自他ともに認める容姿の良さと才能を持つ栂園は常に笑顔で、精神が擦り減るにっしーはどんどんと表情は曇っていった。

いつしか、女生徒の中に栂園のやる事だから仕方ないと思う人も出てくるようになり、丁度この時からにっしーから弱音を聞くようになる。

二週間も経たないうちに、歌う時に笑わなくなった。

勝ち負けなんてどっちでも良いと、栂園に反応する必要なんてないと、言うまいか悩んだ私は、自分が出したとばれないように朝一でコンピュータ室で印刷した紙をにっしーの机に入れた。

――私は、小学校の頃から笑って歌う楽しそうな仁科くんが好きです。だから栂園なんかに張り合わないで、自由に歌って下さい。

私は現場に居なかったが、その日から一週間ほどたった放課後、栂園と言い争いをしたにっしーは過呼吸で病院へ運ばれた。そして二度と歌わないようになった。

「にっしー、この前の模試で塾内トップだったんでしょ。すごいね！」

「凄くないさ。遠くの学校に逃げたいって必死なだけだ。もう、あいつに関わりたくないんだ。」

歌わなくなってから、にっしーは辛そうにしていた。何で、直ぐにでも転校しなかったのかは分からない。何で、卒業するまで中学に通い続けたのかは分からない。栂園と廊下ですれ違うだけで過呼吸になるくらいの重症で、同性の友達が居なくなった学校でどうして頑張っていたのか私には分からなかった。前髪は目元まで伸びて、目線を合わせる事もしなくなった。

私は、全然真面目じゃなかったから塾にゲーム機を持ち込んで休憩時間に触っていたくらい。同じ学校で通っているのが私とにっしーだけだったけれど、私はゲームをしてるだけで時間を潰せたから塾での友達作りなんてどうでも良かった。にっしーが話しかけてくれてたのは小学校の頃からの知り合いだからだ。ちょっとした会話と、私がやるゲームを後ろから除く程度の関係。にっしーが歌えなくなる前から、中学卒業までずっとその関係は変わらなかった。

興味を無くした栂園が離れてくれたから、辛い思いをしているにっしーにも日常は微かにあったんだ。まだ、決定的にトラウマでは無かった。私にとってはあの時の記憶も薄れかかり、卒業し、にっしーは引っ越しが終わった頃の春休み。にっしーから『もう、無理だ』とメールが送られてきた事を覚えている。

テレビを観れば、その言葉の意味は明白だった。

『栂園太陽！今年の春から高校生で、この度アイドルとしても活動させていただくことになりました。』

『まだまだ未熟ですが、大好きな歌のお仕事なので頑張りたいです！』

歌番組でＭＣと話す栂園。彼の言う好きって言葉は私からすれば全てが嘘だった。だって、彼の話す好きの理由は、昔からにっしーが言っていた言葉が殆どだったからだ。好きな歌、好きな歌手。栂園は、歌だけでなく歌う動機も、思いも、にっしーから奪いニコニコと笑っていた。なんで誰も嘘だって気づかないのか。友人に聞いてもネットの反応を見ても、栂園が好きな事を語っていると信じて疑わなかった。

恐ろしいが、彼が好きな事を語っているのは事実だと認めざるを得ない。でもその好意の矛先は、歌ではない。仁科正美という人物、或いはその才能を喰いつくした栂園太陽、そのどちらかを嬉しそうに語っていたのだと私は理解してしまった。

それから、長期休暇に会うにっしーはどこか変わってしまった。後に私は咲ちゃんからその一連の全てが彼のトラウマになっていると聞かされた。

「なんで、今更になって。」
「今だからこそだ。未だに飛ぶ鳥を落とす勢いのスーパーアイドルの俺様だからこそ、色々と考えがある。」
「帰れ、にっしーをお前に合わす訳にはいかない。」
「寧ろこうして話しているから、彼は直ぐにでも戻ってくるぞ。互いに視界が通ってる。」

今すぐに、にっしーと合流する為に立ち上がろうとするが、栂園は道を塞いでくる。

「大衆の前で正美くんが発作を起こすのと、人の居ない此処だとどっちが良いと思う？別に俺様はお忍びでもなく、ファンに挨拶しても良いんだぞ。俺様は街で歩いてるだけで動画も写真も撮られ放題で蓋なんて出来ない。過呼吸を起こす男性の動画が世間に出回っても、葉山ちゃんはいいのかな～？」

「っお前！」
「大人しくしてろって。」

どうする事も出来ず、思考する暇も無くにっしーは戻って来た。

「久しぶり、正美くん。会いたかったんだ。」
「誰だ？」
「覚えてないってことはないだろ。なあ、いっぱい一緒に歌ったもんな。」

栂園が、サングラスを外して振り返る。
——ガンッ。
にっしーが両手に持っていた缶ジュースの片方を落とす。本能的に逃げようとするにっしーの腕を栂園は掴んで、逃がそうとしない。

「やめろ！放せ！」
「そんなに嫌がることはないだろ。俺様は、正美くんを一番の友達だって思ってるし、なんならこの世の誰よりも好きだぜ。」

「栂園、やめてよ！嫌がってるでしょ！」
「だから、動くんじゃねえって。葉山ちゃんは、少し前の話も忘れちまうのか。大声だって、あんまり出さない方が良いんじゃねーの？」

歯を食いしばるしかない。今すぐに、こいつをぶん殴れば、何もかもを終わらせる事が出来るのかもしれない。もういっそのこと――。

「聞いてくれよ正美くん。俺様も結構アイドル業界長くいるし、音楽関連の仕事するだろ？でも、一番の感動をくれたのは正美くんなんだ。歌で感動できるし、なにより心意気ってやつ？熱のこもった歌がそうだし、聞き易さじゃなくって人間味のある声質が好きでさ。そりゃ、中学の頃は俺様じゃ絶対に出せない低音を出してるし、完璧な筈の俺様より起伏が激しいっていうの？性的な見た目してるじゃんか？背の高さって一概に強みにならないし。一点においてだけでも負けてるのが気に入らなかったのに複数点あって。勿論その頃から魅力的だと思ってたって話だぜ？でも当時は正直転校してくれればいいなって、最悪屋上から飛べばいいのにと思ってたけどそういう訳にもいかないだろ。ほら俺様って優しいからさ。だから、優しく、学校の才能あるって勘違いしてる男子の皆にお前らじゃ一生勝てませんよ身の程弁えろよカスって勝負してただろ。

その癖、正美くんは負けず嫌いで譲らないところが有ったから、いや今にして思えばそういう所を尊敬してたりするんだけどな？昔は徹底的に潰してやろうと、技術でボロ負かして、あと何だっけ壊れかけてたのに一回立て直したじゃん。あの時に、心の支えにしてた良く分からん安い紙を細切れにしたらなんか泣きながらゴミ屑を必死に集めて繋ぎ合わせようとしてて、面白かったからシュレッターにかけてあげたら倒れちゃったから、ビビったなぁ。いやしかしあんなに簡単に過呼吸で倒れるのって死ぬほど笑わせてもらったんだけど。多分、俺様と正美くんで漫才すれば天下獲れるんじゃねえの？でもまあなんにせよ、無事に壊せて一件落着だと思ってたんだ。まあ、しかしながらね、壊したいのって昔の俺様にとって愛情の裏返しみたいなところ有るじゃん？よく考えたら俺様って正美くんの歌が大好きなんだよね。一緒にアイドルしようぜ。いいだろ？」

もう、見てられない。どうあっても私がにっしーを守らなければならない！

栂園の手を引きはがして、にっしーを抱きとめる。アイツが小細工を使って私が晒し物にされようと、にっしーの顔は映らない。それだけで十分だ。今からの後悔なんて大したことは無い。服越しに伝わる過呼吸ってだけで、私が守れなかった事を数万倍悔いるべきだよ！

「いきなり何するんだ。痛いだろ。なあ、正美くんだって抱き着かれて、苦しいだろ？きもいだろ？セクハラを通り越して暴行罪だぞ。」
「何を言ってるんだよ！にっしー心の傷を抉って、こんなに苦しんでるのになんでそんなに涼しい顔をしていられるの！」
「馬鹿だな葉山ちゃんは、俺様そのものが心の傷だろ。君らからすれば抉って欲しいんじゃないのか？警察沙汰を覚悟で殴ってみれば？スッキリするぜ？でも自分の為に葉山ちゃんに暴力振るわせた正美くんの顔もしっかり見せろよ。見た事ない表情見せてくれるんだろうなぁ。」
「ふざけないで！」
「心の傷だろうと、そうじゃなかろうと、俺様は正美くんの心に根強く存在し続けるんだ。それって素敵なことだろ。長い付き合いになる。だから仲良くしようって言ってるんだ。自分で言うのもなんだが、俺様のアイドル事務所は大企業だぜ？本当はソロ活動したいけど俺様同レベルの天才がいるからしょうがないよな。そんな人材豊富な弊社なら心のケアなんて問題なく出来るし、いざとなったらあり余った金を使って催眠なり洗脳なりでどうにかなるだろ。俺様は、正美くんの歌声と心から歌が好きな心が欲しいんだよ。」

話が通じない。どうやって、ここから離れればいい？こいつを振り切りながら祭りの中を走り抜けるなんて不可能だ。あと何時間、栂園と意味の無い会話をしなければならないのか。どうすれば、にっしーが苦しまないで済むのか。

「石段の上にあるやつって、食べていい？俺様って有名で、店に寄ったら面倒だから碌に食べ物も買えなくってさ。」

置きっぱなしだった食べ物を見ながら、栂園は話している。だと言うのに、何故かこちらに向かってにじり寄ってくる。にっしーをもっと、私の方に引き寄せる。

「駄目じゃんか。一種類ずつ綺麗に平らげたりしたら、食べかけとまでは言わないけどシェアしたりして食べた方が友達っぽさ出るだろ？」

一瞬で石段まで走った栂園は残っていたチョコバナナを手に持ちながらも、元の位置まで戻ってくる。私の洋服の襟を掴んで顔を近づけてきた。

「目論見が外れちゃったよ。食べかけが食べたかったのに。なあ、葉山ちゃんって正美

くんのお手付きだったりする？俺様としては食べかけなんだったらそっちの方が嬉しいかもな。だって、間接的に俺様も正美くんのお手付きになるだろ？恋愛って粘液の接触って言うだろ？もし、正美くんをつれて一緒に来るんだったら歓迎するぜ。今度温泉旅行にでも行こうか。三人きりで。貸切るぜ。」

「誰が、お前なんかと！」

熱に浮かされたような口調で、見つめてくる。だけど、確かに見た目は良くたって心が動くことは無い。こいつは、見た目さえ良くて能力があれば女も男も靡き付き従うと信じて疑わない。そんな考え方が何よりも受け入れられない。

――♪

掠れた、僅かな音。だけどそれはリズムに乗ったものだ。それが聞こえた瞬間に私と栂園の時間が止まった。もう、栂園を見てる場合ではない。私自身、どんな気持ちで向き合えばいいのかすら分からない。

何が切っ掛けか。考えるべき事が何なのかすらも分からないが、視界が滲む。

――塗りつぶされて苦しくても手を伸ばさなくても、君から見えて君を見ている脈動

は一斉射で感じているぞ。
――同情はしない羨みも出来ないただ同一存在者として、生きてくれ、負けないでくれ、幾らでも頼ってくれ。

綺麗な声、そしてリズム。私にとってはこの世で一番好きな声。立ち直ったとか過去を乗り越えたとか、にっしーの頑張りを讃えるよりも先に心が熱くなってしまう。また、私は君の歌を、この声を聴けるんだよね？
涙ぐんでしまって、どうすべきか分からないよ。

「いや、冗談キツイって。何だよ、何を勝手に歌ってんだよ。歌えなかったのって俺様の影響だろ？俺様が正美くんの心に刻み込まれてたって証明だったじゃんかよ！なんだよその歌、聞いたこと無いぞ。オリジナル？心の底から湧き上がって来たってやつ？すっげーアガるじゃんか！でもムカつきもあるんだ。やっぱり正美くんは俺様に知らない感情を教えてくれるんだ！」
「……。あのさ。」
「何だよ。今、怒ってるの分かるだろ？でもって感動もある。心ぐちゃぐちゃだよ。馬鹿にされた気分だ。圧倒的に勝っていたのに、なんで俺様が持ってないものを持ってる

んだ。正美くんは常識がないのか？常識知らずで天井知らずか？だから俺様をこんなに震わせる。でも常識って大切だよな。友達が怒ってたら開口一番で謝れよ！さっさとしろよ！」

「そっか、じゃあ友達優先でいいな。」

私の腕の間から顔を出して、微笑んでくるにっしー。夏の初めに会った時よりも表情はずっと柔らかい。私を見上げようとして、汗で張り付いた前髪がうっとおしそうに首を小刻みに振っている。その仕草が可愛くて、ちょっと口元が緩んでしまう。

「葉山、この頃迷惑ばっかりかけてごめんな。あと、なんか色々ありがとう。俺の為に怒ったりしてくれて。」

「気にしなくても良いよ。その為に付き添ってるんだから。」

前髪をそっと分けてあげたら、脛を蹴られた。雰囲気が良いしいけるかと思ったがおでこを見られるのは恥ずかしいみたいだ。ちょっと反省しないと。

「そういう、あーそう俺様は友達じゃないってこと。そういや他の連中と違って心折れ

た後に友達宣言すらしてくれなかったっけ。そっかそっかふーん。別に傷ついてないけどな、いや本当に、悲しくなんて、これぽっちも無いぜ。まあいいや、毒気抜かれたし今日は帰る。俺様だって暇じゃないし、正美くんの歌が好きだってのは嘘じゃないから。すげー感動したし。今更になって手折るのも違うからな。歌ってくれたのは嬉しかったぜ。録音できれば家宝にしたいくらいだった。理由目的は俺様を追っ払う為だとしても、つまりは俺様の為に歌ってくれたんだろ？嬉しくって舞い上がりそうだぜ。まあ、これからは手段は選ぶ、んでもっていつか俺様と同じステージで、横一列で歌ってもらうから覚悟でもしておくんだな。ああ、忘れるところだった。今度ある俺様のステージのチケット。なんと三枚あるから渡しておくぜ。ちゃんと来いよ。来なかったらライブの度に一枚ずつ増やしてポストに投函していくからな。ちゃんと全部使えよ。……絶対来いよ。あと、葉山ちゃんは調子に乗るんじゃねーぞ。正美くんの歌は俺様の物にするんだからな覚えてろよ。正美くんのガードが緩いからって勘違いするんじゃねーぞ。お前がフォローしてるのサブ垢だぞ。それとお前の住所も特定してある。正美くんに手を出してみろ社会的に殺してやるぜ。それとチョコバナナの代金は石段のところに置いたから、くれぐれも正美くんへの代金だからな。ライブ、絶対来い。まあ、正美くんが望むならお前も面倒見てやってもいいぜ。じゃあな。」

色々、言い逃げされて栂園は帰っていった。嵐のような奴で、悪い夢だったと思いたいが、鞄に無理矢理入れられたチケットが現実であったんだと教えている。いつまでも密着している訳にはいかないし、いったん離れる。勢いとかで、随分な事を口走っていた気がするが、離れて一旦冷静になれた。そういえばにっしーが買いに行っていた目的の缶ジュースが、今までずっと腹部のあたりに当たっていたから少しお腹が冷えたかもしれない。いつの間に鼻血が止まっている事に気が付いたり、冷静に戻る為に遠くの花火を見てみたり。落ちたもう一本のジュースを拾ったり。

本当は、にっしーにかけるべき言葉が何なのか熟考しているのだが、思いつかなかったりするだけなんだけどね。

「いつの間に止まってるけど、顔に血がついたままだ。ぬるくなったけどジュース飲んでまだ座っとけよ。タオル濡らしてくる。」

思ったよりもケロッとしてる風に見えて、でもきっと強がりの筈だった。私の勝手な思い込みならそれでもいいけれど、栂園の姿に怯えて過ごした中学時代からにっしーは弱音を吐く事は少なかった。同時に口数も減って、一人きりになりたがっていた。

知っているなら、なおさら負担を受け持たないと。

「別に、鼻から顎まで真っ赤なラインがあることなんて誰に見られたって構わないよ。そんなことより、にっしーを一人にする方が心配だから。」
「そうか。じゃあ一旦荷物は持っていくか。帰りに皆と合流する予定も無かったし、混雑しないうちに帰ろうな。」
「食べ物はもういいの？」
「流石に、ちょっと食欲は失せた。」

そんな話をしていたが、水場に着き顔を洗い借りていたタオルを最低限の水洗いをして祭りから出る頃には、入口のゴミ箱にまだ食べていなかった鈴カステラや途中で買ったアメリカンドッグのゴミを捨てているところを見ると食欲がなくなった話は全くの大嘘であると分かった。
寧ろ安心したからお腹が空いたんだろうなとは思う。私が洗ってる時にコソコソとアメリカンドッグを買っているのは愛らしかった。

「それで、具合はどうなの？下手に私から聞いて症状が出たら大変だから、話せる範囲で良いんだけどね。」

「取り合えず、何が有ったのかっていうのは思い出した。でも、トラウマのままではあるし、考えるだけで頭痛とかはする。それに記憶障害が治ったわけじゃないからな。思い出せないことが一つ思い出せた程度だ。それでも一歩踏み出せただけでも十分なんだろうけど。」

「にっしーは頑張ったよ。今日だけですごい進んだんだから、無理せずちょっとずつ治していけばいいと思うよ。」

「治るといいな。歌が好きだって気持ちを思い出して、同時に歌うことが辛いことになってたんだ。変な感覚で、矛盾してるだろ?……でも、一人の人生で起こりうることなんだなって。」

「だから、許せないんだよね。単に歌ったってだけで栂園がダメージ受けて帰ったのがおかしいでしょ。辛い気持ちとか伝わってきて、感情が混じり合ってて、そんな歌声だったから。あいつが、中学時代のにっしーの歌が好きだって言うんだったら透き通る思いとは別物。今日のは、力強さとか決意とか、楽しさ以外の感情が前面に出てた歌だったから。」

にっしーはなにやらポカンとした顔で、私を見ている。歌の感想が、気に障ってしまったんだろうか。

「ごめんね。思ったことを整理しないで言っちゃって、昔の方が良かったとかじゃなくて籠った気持ちが違うって話だから。私はにっしーの歌が好きだし、歌えなかった間も友達だったでしょ？」
「そうじゃなくて、歌を聞いただけでいろんなことが分かるんだなって感心したんだ。葉山はすごいんだな。」
「にっしーの変化は分かる、って言いたいんだけどね。歌だと分かって、他だと気づかいが足りなくてデリカシーないことしちゃってごめんね。昔からにっしー歌のファンだったから、変化だって分かるよ。」
「じゃあ、今日のはどんな感じがしたんだ？肯定的な意見を言ってくれると、また歌う自信になるかもしれない。」

感想か。
聞いた事が無い曲の数フレーズで、オリジナルなのかな？だとすれば、歌詞にも思いが籠ってるんだろう。

「視点が独創的で、自分への激励のようで自分自身でもなく第三者でもない立場からの

応援とかの思いが強かった。それと同時に乗り越えよう、負けないぞっていう気持ちもあって、一人で歌ってるのにまるで同時に複数の感情を表現出来てたね。真似できないと思う。ドライだけど引っ張ろうとするリードと、引っ張られるお陰でようやく声を出せた嬉しさ、それらが混在してるのが心に響いたよ。まるで、いや世界が二つかな？二つあるみたいだったね。」

「世界が二つって、そんなやつはいないだろ。」

「あの歌を聞けば絶対、にっしーの中には二つあると思うよ。まあ、多重人格でもないし人生観が二つある筈ないんだけどね。」

ちょっと褒めすぎたかな？にっしーが顔をそむけてしまった。

二つ。歌が好きって気持ちと辛いって気持ちかな？でも、二つの感情じゃなくて本当に、世界が二つあるような感覚だったんだよね。

「結局、花火は全然見なかったね。」

「そうだな。色んな出来事がありすぎて整理もつかないし疲れた。浴衣で歩くの大変だし。」

「似合ってて可愛いけど、大変そうだから見ててハラハラしちゃったよ。行きは歩き

だったんでしょ？タクシーでも呼ぼうか？」
「最寄り駅より近いんだから、それくらい大丈夫だ。それに、家に着くまでは花火を見ておきたいだろ？」
「それもそうだね。」
「なんか打ちあがってるの変わった。すっごい大きいし、綺麗だな！」
　まだまだこれから頑張らないといけない事があって、寧ろ栂園のせいで今より大変かもしれないけど、にっしーは立ち向かっている。私よりずっと、そして栂園よりもずっと、大人だ。あいつと同じ呼び方が気に入らなくって本人の前ではあだ名を使い続けている私よりずっと、過去を割り切れているんだろうね。
　なのに、今日一番の大きな花火が上がった時の横顔が、昔と同じように心からの子供っぽい笑顔。反則級に可愛くって。やっぱり私にとって、君が一番輝いてるよ。

環境に流されるのと適応は違う

思いだした記憶。歯車が狂った、トラウマの最初の記憶。

『今日も来てくれて嬉しいぜ。本当に。さあ、俺様と歌について語りあかそう。歌えばわかり合える。言葉なんかよりも歌で正美くんと通じ合えて俺様は毎日がたのしいんだ。出来れば一週間前みたいに休み時間の度、可能な限り歌い合いたい！』

『栂園、悪いんだけど俺の負けで良いよ。』

『はぁ？何言ってんだ、認められるわけないだろうが。正美くんがどう思ってても、やり続けるほどに、全然勝ったと思えなくなる。毎日放課後ってのが負担なら一週間に一回でも良いよ。譲歩は幾らでもする俺様に正美くんの歌を聞かせてくれ！参考にさせてくれ！学ばせてくれ！』

『分かってるだろ。もう心からの歌を歌える状態じゃないんだ。一番近くで聴いてるお前が一番分かってるだろ……。』

『そうだよな。正美くんの歌がおかしくなった原因くらい俺様にだってわかるんだ。』

『だったら分かってくれるだろ。』

――ビリッ。

『この手紙なのは分かってるんだ。さっき正美くんの机から抜き取ってきた。こんなのに縋るから、正美くんの歌が弱くなったんだ！こんなのを持ってるから、己に自身が持てなくなる！こんなものなんて、細切れに、無くしてしまえば！ほら、ちょっとは歌う気になったんじゃないか！』

『這いつくばって拾ってる姿なんて見たくなかったな～。繋ぎ合わせるとか、出来っこないのに。完全に元に戻ったりなんかしないんだって。あっそうだ。』

『全部拾うの遅すぎるぜ。じゃじゃーん、細切れの1ピース！これ一つでもシュレッダーにかければ一切の元通りなんてありえないんだぜ？なに？返すわけないじゃん！ほーら、正美くんの男の子らしい身長じゃ届かないぜ。もう細切れだ。持ってるゴミも貸してみな？あはははは！』

次に覚えてる記憶は病院で家族に見守られているところだったか。思い返しても尚、思い出せないような辛い記憶だ。

戻った記憶は少なくないが、人格は未だにこの世界へ迷い込んだ俺である。もう最早、この段階でこのままならば人格が元に戻る事は俺にとって一つの死を意味するのかも知れない。俺か、元の人格の俺は同時に存在できない。

仮に、元の人格が死んでしまったのならば、俺が記憶で触れた俺は栂園という記憶に真綿で首を絞められていたんだろうなと推察される。

首が締まる思い。そんなような記憶を思い出しながら、たどたどしく俺は朝から医者に相談――というよりは説明だろうか。今の今までかかりつけの医者と話していた。

午後１３時をまわり、俺は病院から出るが、朝と変わらずに外は雨模様だった。昨日にトラウマを思い出して一歩前進しようと、心の状態が良かろうと、天気は崩れるものだ。俺は随分と楽になった気がするが、精神状態は十人十色。神様がいたところで俺一人を参考にそれっぽい天気に変える訳がない。曇り空を見上げる俺の心はそれなりに軽い。勿論、そんな気分でいるが医者には念を押して心配されるほどに疲弊しているように見えるらしいがな。歩く速度も遅いかもしれない。

だから心を表現できるとしたら天気雨だろう。気持ちは、記憶に由来する。人生の主柱となる記憶を取り戻した時、俺という存在は元にあった人格に戻るのかと思えばそうでもなく、しかし一つの物事への考え方や捉え方はバラバラで納得が出来ない話も出てくる。だがまあしかし結局性格の違いはあまりなく、だけれども性への違和感は無くな

らない。
主に思い出したのは中学時代にいじめを受けていた記憶で、受けていなかった人生の記憶はそのまま。
今の俺にとって栂園太陽は、嫌いの一言で説明しきれない人物であり、同時に接点の少なかった人物である。何をしても一番だった同級生というのは変わらない認識で、雌雄の違いがあれば人の歴史も違うのだろう。その歴史というか記憶があるからこの世界のアイツはあんなだし、色んな記憶があったり思い出したり消えたりしてるから俺はこんなだ。大事なのは事実であり、自分が何者かと考えるくらいなら他にやる事なんて幾らでもある。自分を見つめ直すよりも、現実に向き合うべきだ。
トラウマの対処は言うまでも無くやるべきだし、記憶を完全に戻すためにあらゆるストレスとの向き合い方も考えないといけないし、精神的な面だけでもやる事は多い。そして、身近な事も。
――珍しい、というか大丈夫かい？今まで咲さんが付き添いに来なかった事なんて無かったのに。
お世話になっている、らしい、病院の先生の言葉。誤魔化すように笑うしかなかった

が、見た目以上、思っている以上に、咲の気持ちだって整理がつかない筈なのは気づくべきだった。

昨日帰って来た咲に、トラウマの記憶を思い出した事と栂園に会った事など全てを伝えたがリアクションは小さかった。俺が風呂に入っている間に、両親へ電話はしていたようで――とは言え遅い時間だったので親が出る事も無かったようだが。今朝、メールで『落ち着いているようだったら、たまには電話でいいので声を聞かせて欲しい』と両親から来ていた。話す事なんて思いつかないが、心配をかけさせない為にも咲の様子がおかしい事は伏せた方が良いのだろう。親への連絡も必要だが、まず塾から帰ってきたら咲と話し合わなくてはならない。

そんな事を考えながら、傘に当たる雨音を聞きながら家へと帰る。

身の振り方を考えながらの帰り道。

帰ったら俺の部屋は無くなっていた。

「は？なんで？」

すっからかんの伽藍洞。家具はベッドを残して全てが無くなって、跡地にあるのは乾燥剤が等間隔に置かれているばかりだった。

急いでリビングに下りるも、誰も居ない。咲に電話をしても出ないし、パニックになった俺は本来すべきと考えていた話題、過程、手順などすっ飛ばして親へと電話をかけていた。

「父さん？俺の部屋なくなったんだけど知らない!?」

『久しぶりと思ったらいきなりなんだ。元気してるか？』

「いや、うん。メールしたけど幾らか正常になりつつあると思うけども。」

『そりゃあ、本当に良かった。お母さんにも電話してあげろよ。心配してたんだからなぁ。』

「うん、するよ。で、部屋のこと知らない？」

『咲がな、必要だからって言ってたから許可した。まあ、正美より咲の方が危なっかしいしちゃんと見ててあげろよ。あと、もう成人してるんだから色々と考えて暮らしなさい。そういう関係に口出しをする気はないから。じゃあ父さん仕事に戻るから、何かあったら電話は夜にな。』

「ちょっと、父さん！質問の答えになってないだろ！」

切られた。

もう一度、咲に電話をかけるが反応は無く、メールをしても返事は無い。

打つ手を無くした俺は、リビングで座り麦茶に満たされたコップ一杯を手に黄昏る他なかった。

しばらく放心しているとインターホンを鳴らす気配も無くドアが開く音がした。足音の癖から、咲が帰って来たのだと分かる。しかし、ここまで派手にやられて怒るような気力も湧いてこない。まず何に対して意見するべきかもよく分からなくなった。

「あんた、何くつろいでるの？大変なんだけど。」

「大変ってのは、帰ってきたら部屋が無くなっていた俺の心境を言うんだ。せめて何かしら一言あるだろ。」

「ちゃんと説明するから取り合えず表に出て。葉山先輩を待たせてるから。」

「まあ、もういいよ。煮るなり焼くなり、好きにすればいい。」

鼻をフンスッと鳴らしながら、咲は俺の手を引っ張る。若いからこそのバイタリティというか、こんな行動力こそ俺に必要なのかもなと思いながら息つく暇さえまともにと

れないまま雨の降る外へと戻る事となった。

　そして、車の中。後部座席へと放り込まれた俺は、他の二人が口を開くまで窓を流れる雨粒を眺めるている。自分から口を開くのも馬鹿馬鹿しいし、説明すべきをしないのなら適当な場所で降りてしまってもいいだろう。

　そう俺は拗ねているのである。もう社会人まで秒読みなのに恥ずかしい限りだと思うが、どうにもつんけんとした感情が湧いてしまう。

　そう子供じみた反応をしていると暫くして咲が口を開いた。

「ちょっと、精神衛生上よろしくないものが家のポストに入れられてたのよ。あんたが病院に行くときにはもう入ってたのかもね。」

　中は見ない方が良いわ、と前置きしながら咲が後部座席に投げたのは尋常じゃない量の便箋の入ったビニール袋だった。一通、手に取ってみると差出人には『栂園太陽』と手書きで書いてある。

「うわっ。」

「切手が無いから本人が投函したんでしょうね。住所特定くらいならまだしも昨日の今日でこんな行動する輩に住居が知られたまま暮らすのなんて怖すぎるでしょ？」

「まあ一理あるが。」

「だからちょっとの間でもいいから安全な場所に移って貰おうと思って。部屋が余ってるし、にっしーの荷物を私の家に運んでおいたんだよ。同性の他の友達の家に住まわせてもらえるならそっちの方が良いだろうけど、取り敢えず仮の宿としてね。」
「これからどうなるにせよ。あのままあの家に暮らすのは危なすぎるから荷物だけ運んだの。」

手にして分かる手紙の詰まったビニール袋の重みが確かに栂園の異常さを分からせる。思い返せば昨日だけに、俺の場所を突き止めるほどの執念が感じられた。住所を突き止める方が先に出来ていたとしてもおかしくは無い。
「問題は、奴をどうすればあんたが平和に暮らせるのかってことが分からない事よね。今更、接触してくる理由も分からない。」
「仮に私の家が特定されたとして、ずっと逃げ続ける訳にもいかないもんね。」
今日の今日まで俺も知らない葉山の新居をすぐさま割り出せるような事があったらもう逃げるより向き合った方が良いとは思う。良いというよりか解決が早いというべきか。寧ろ今すぐにでもすべきだと考える。考えても、そんな度胸はないのだが。
しかし、気遣うような、恐れるような二人の表情を見ると俺から言い出す事は出来ない。手に取る以上の事は出来ずに中は開かないまま座席に置いた手紙の山を見るだけ

で小刻みに俺の膝は震えている。心では、なにするものぞ、とさえ思えてもまるで克服なんて出来ていない。

俺よりも、周りの皆の方が物事を正しく理解しているんだろうと分かればこそ今日の出来事に怒る事なんて出来なかった。情けない事に、奮起すら出来ない。

「なあ、俺を考えてのことなのは嬉しいけど二人は大丈夫なのか？葉山だって押しかけられたら迷惑だろ？一日二日泊めるのとは訳が違う。」

「文句を言うなら、にっしーには言わないよ。それに、今回も見過ごして何かあったらきっと私は二度と上を向いて歩けなくなっちゃうから。」

「あんたが居なくても生活に支障なく過ごすくらいは大丈夫よ。心配なら、掃除と洗濯のやり方をメールで教えてくれればいいわ。あと、偶に、暇な時に、電話とかで世間話とか。」

「……普段はトイレ掃除もやらないくせに。」

「お母さんに言わないでよね。小遣い下げられちゃうから。――なんて、本当はトラウマのこと以外でも手伝ったりすべきなのに、普段から迷惑かけてごめんなさい。」

「子供が変に気を回すんじゃない。」

「もし、栂園が家に来たら。警察に謝って済む程度の行動で抑えられるか分からないから、あんたには感謝できるうちにしておくの。」

物騒極まりないが、それだけの怒りを持つほど憎いのだろう。俺は記憶を失っていた分、二人よりも危機感がない。怒りもきっと薄れてしまっている。俺にしてみれば、何年も後にちょっとした笑えない笑い話にしたいものだが、栂園が接触をしてきてる以上は寧ろ危機感が足りないのだろう。身に染みている恐ろしさを頭が実感できていない。

危機感。それにしては葉山は感情に出さないし、逆に咲の様子はちょっと危ういものを感じる。二人の間の温度差は何に起因するかは定かではない。だけど咲がここまでの怒りを抱く理由はなんとなく考えられる。

トラウマを思い出したと言っても細部までくっきりとはいかない。それに、忘れた記憶が戻るとは分かっても未だに忘れてしまった記憶は多い――んだと思う。思い出せないから感覚が大半だが、それでも思い出した記憶がある。家族との思い出を忘れてしまい悲しそうに「気にしなくていい」と笑う咲との会話は二度と忘れたくない記憶だ。その忘れてしまった記憶は未だに靄がかかっている。俺は、咲や葉山、家族や友人との記憶を忘れてしまった事に対する申し訳なさと悲しさの実感をこれから嫌というほど感じていくんだろう。

いや、中学時代の友人は葉山しかいなかったか。

「もう2、3キロで着くよ。咲ちゃんは朝から荷物の運び出しで疲れてるだろうし少し

休んでいきなよ。のど乾いたでしょ?」
「そう言ってくれるのは嬉しいけど早く行かないと。折角、あの野郎と確実に会わない時間に行動してたんだから。」
「お昼の生放送にでてたんだっけね。仕事がそれで終わりってことは無いと思うけど。」
「でも、気を緩ませて台無しにしたくないから。それに葉山先輩に要らない迷惑かけたくもない。だから、この辺でいいから下ろして。さっさと。今日はありがとう。」

つんとした態度の咲はそのまま自分の申し出のままに車から降りた。頑固さが筋金入りというよりも、今の咲は助言を聞いてくれないだろう。最近は少しばかり素直になったと思っていたが、いや素直さとは別の心の不健康と余裕の無さだろうか。
この一件は、俺なんかよりも周りの人の為に真っ先に解決すべき問題だと感じさせられる。

「というか、昨日に栂園が葉山の住所を特定したとか言ってたけどだいじょうぶなのか?」
「新居は誰にも場所は教えてないし、仮に分かってたとしてもセキュリティが凄いマンションなんだ。私の家で駄目ならもう防ぎようがないかな。」

「社宅？」
「厳密には社宅じゃないんだけど、会社近いから資金補助あるんだよね。そういう補助金とかで会社選んだりしたんだよ。」
「新卒で、一人かくまえる余裕ある奴なんてそうそう居ないだろ……。てか補助金は四月からだろ？」
「まあ、貯金はボチボチとね。大学はバイトをそれなりに頑張ってたし。」
「そうかい。なんと言われても世話になってるうちは家賃の半分は受け持つからな。友人といっても金まわりはきっちりしないとだろ？」
「じゃあバイトやってるならシフトの日は送っていくよ。ちょっと遠くなっちゃったでしょ？」
「いや、教授の研究手伝ってるだけだから家でも出来るんだ。」
「へぇどんな研究？」
「内容は知らないんだ。やってるのはサーバーの維持と保守だからな。」
「サーバーね、うん。はいはい。」

趣味の一つがゲームのくせして、サーバーと聞いても生返事の葉山。話題を広げる為にちょっとつついてやろうかとも思ったが、雨の降る中の運転をしている事に気づき、

口を開くのを止めた。
精神的にも肉体的にも、疲れているのは俺だけではないんだ。あまり邪魔するのも悪いだろうしな。

黙っていたのも束の間で、暗めな駐車場からエレベーターに乗るまで、こいつ良い物件に住んでいるな、と思っていた。着いたマンションは住人でさえ面倒そうなセキュリティで、少なくとも許可した来客以外は簡単にエレベーターにすらたどり着けないだろう。
「さっきすれ違ったけど管理人さんが常駐してるんだな。」
「同じく常にいるフロントの人は雇われだけどね。住人か管理人に確認が取れないと変な人は入って来られないよ。逆に、暫くはにっしーも自由に行き来ができないかもしれないのはごめんね。」
「土地勘を掴むまでは一人ではうろつかないだろうから気にしてない。」
「それはそうかもね。あっ、ここが私の部屋なんだ。すぐに開けるから待っててね。」
エレベーター、廊下、どこも手入れが行き届いていて綺麗なマンションという印象だ。

きっと、急いで運び込んだ荷物がそのままな玄関だろうから葉山の評判の為にもさっさと入るか。

「靴は取り敢えず適当でいいからあがってあがって。」

「……お邪魔します。」

積み上げられた段ボールはやはりという感じで、だが数は思ったよりも多くなかった。少ないと感じるほどだ。

「にっしーの荷物は右側の手前の部屋に全部あるからね。」

「全部？じゃあこの段ボールは？」

「私の荷物なんだよね。使わなくていいものが多いし開けて無かったんだけど、空き部屋が無くなっちゃったから廊下に出したままなんだよ。」

「片づけるくらいなら手伝おうか？世話になってるし。」

「――絶対に開けないでね！」

念を押しに押されて部屋に案内されたが、思うに半日もしないで運び込める量じゃない。本棚とか、葉山と咲だけで運べないような物まで運んである。

「業者でも呼んだのか？」

「どっちかって言えば業界人かな？昨日の時点で引っ越しは選択肢の一つだったんだけど、路次さんが手伝うって言ってくれていてね。」
「路次さんが？」
「あの人の職業って劇団なんだけど保有するトラックの名義がなぜか路次さんらしくて、いつでも乗り回せるから荷物を積んでくれたんだよ。」
「へぇ、じゃあ大道具とか作る人だったりするのか？」
「脚本らしいよ。自称、次期座長らしいけど。」

ケータイで撮ったらしき写真を見せてくれるが、想像よりは随分と派手な装飾なトラックだ。これを私用に乗り回せる路次さんのメンタルに感動すら覚えてしまう。
無地じゃないトラックを見ると――とはいえ写真のトラックは中型だが、女性向け高収入バイトの広告車を思い出してしまう。この世界では男性向けなのだろうか。
後で、清哉に連絡先を聞いてお礼を言っておかないとだな。

「片づけなんかは後でいいだろ。ちょっと疲れたし座らせてくれ。」
「リビングはクッションくらいしかないよ。一人暮らしで椅子とかは高くて買う気にならなくてね。」

「床に直座りでも気にしないけどな。」

見覚えのあるちゃぶ台もどきの近くに腰を下ろす。飲み物は出かけた際に買ったペットボトルが半分以上は残っていた。以前は、こんなペットボトルなんてガバガバ飲んでいたが、口が小さくなったのか胃が小さくなったのか、飲むペースさえ変わってしまった。

その内に慣れるだろうという気持ちはだんだんと変化に敏感な考えに変化している。成長とは違う心境の変化は怖い。きっと栂園に対抗する唯一の手段は、この世界の性別に染まらない事であると勝手に思い込んでいる。

「でなけりゃ不思議体験じゃなく不思議ちゃん……、いや君、なのか？」

「どったの？独り言？」

「溜息みたいなものだ。就職までに片がつかないと役所と会社に提出する書類が増えるのが面倒だなって。」

「行動してみたのは良いけど、実際どうすれば決着がつくのか分からないよ。今更に会っても私は情報なんて知らないし。」

言いながら、葉山の視線の方向には多すぎる手紙の山。おぞましいあれらは、玄関に

置いたままだ。
「読むとしても、今日は面倒だな。頭を使うのはせめて晴れの日にしたい。」
「二人の手分けでどれだけ時間かかるんだろうね。あのビニール袋、洋服屋とかホームセンターとかにしかないようなでっかいのでしょ？」
「郵便ポストじゃなくて宅配ポストにでも入ってたんだろ。」
　死んだ祖父は随分前から耳が遠かったから宅配ボックスがあるんだよな。だとして、郵便受けに入りきらない量の手紙を一度に持ってくるなよとは思う訳なんだが。
「しかし、あの一件の後は中学在学中は接触すらしなかったのに、今更になってどうして現れたんだろうね。」
「傍目から見てどう思われてたかは知らないが、突っかかられなくなっただけであの後も学年では腫れもの扱いだったし、無視されてたし、苛めみたいなものだったけどな。」

　修学旅行とか楽しい思い出は一つも無かったし、家から出て、学校に通うまで日向に居るだけで足取りが重い日々だった。
　それでも、塾では変わらない日々が続いて、葉山との関係が良い意味でも悪い意味でも変わる事は無かった。変わらずに接してくれるような人たちに二度と巡り合えないような気がしていたから、一度逃げてしまったらもう踏み出せないと思っていた。特

に、事情を知っていたのに友人のままでいてくれた葉山には感謝している。
あの差出人不明の手紙。誰が書いたのかを探す名目で学校に足を運んでいたのが気持ちとして少しあった。でも心の支えになってたのは実際に会える家族や友人だけで、手紙の一件が心に根深いのはきっと無意識の違う理由があるのかもしれない。
「葉山が友達でいてくれたお陰で、歪まずに……。まあ、子供の頃よりは変になったかもしれないけど。」
言い始めたが、言葉にすると恥ずかしいんだが。今、言うべきなのだろう。
「友達でありがとうな。昨日だけじゃなく、いつも、だな。」
いやいや、めちゃんこ恥ずかしい。正味、成人に至るまでの人生二倍は生きている記憶を持つ俺だが面と向かって礼を言うのは耳が熱くなってしまう。
家族への感謝なんて、目と鼻の先で告げた事は無いし、言ってしまえば平静で言えた事は無い。もっと、普通の人生の延長で親に育てた事を感謝する機会が来るんだろうか。
顔が赤くなってないか?このままじゃ正面から葉山が見れないっての。

「――茶化すつもりじゃなくてね。初めはにっしーが私を助けてくれたから、恩を返したくてしてたことなんだ。」

こほん、と咳ばらいをして葉山は話を続けてくれた。

「小学校の頃に合唱で私が伴奏やってたのって覚えてる？」

「全く。」

「家に電子ピアノがあって、人並み以上に弾けてたからやってたんだよね。女子の中でも背が高い方だったから似合わなくってさ。」

言われても一ミリたりとも思い出せない。消えた記憶の一つにしておくか？いや、これは単に覚えてないだけだな。

「そんなだから機会がある度にからかわれて、音楽の時間、クラス別の合唱、学年行事の校歌斉唱とか。でもにっしーがその度に『女子、歌う時間が短くなるからさっさと弾けよ。』とかって言ってくれてさ。」

覚えてないし、絶対に助けてないし、割と嫌われるような言動してるな？我が我がの言動は、同じ学年にいたら気持ちのいいことは無いだろう。事情があったから男子のヘイトを稼いでたんじゃなくて、葉山に事情があったから俺へのヘイトが溜まらなかった

だけなんじゃないだろうか。
「歌の時以外にそんなに意見するタイプじゃないし、真剣で綺麗な歌だったから、単に歌を邪魔されたくないだけなのは分かってたんだけど、すごく感謝してるんだよね。それから、でかい図体して趣味とかに口出しされて縮こまるくらいだったらシャンと胸を張ろうって思うようにしたよ。」
「その話が本当なら、俺も成長したもんだ。……もし、今まで中学の俺を主観で話していて、栂園だけじゃなく俺にも愚かしい部分があったら末代までの恥だな。」
「理由があったとして一線を越えた方に問題があるよ。どんな下らない言い訳があっても、やっちゃいけないことはあるんだからね。……なんて暗い話は止めようか。今は立派に一人前だもん。にっしーは新しい友達だって出来ているし、私も、えーと、そうだね、猫背じゃなくなった！」
「ふふっ、シャンとするって意味が違うだろ。」

茶化すでもなく、しかし気恥ずかしさが無くなるように話してくれる。俺が思っていたよりも、葉山にとって俺の声を笑った事への後悔が深く、それは他人への深い思いやりの裏返しなのだろう。
俺も、トラウマに負けないようにシャンと背筋を伸ばして生きていこう。そう思わせ

てくれる。

荷解きをして、晩飯を食べて、荷解きの続きをして、風呂に入って、終わった頃にはもうすっかりと夜になっていた。夕飯は残り物の麻婆豆腐だったが、普通に美味しかった。家で作る麻婆豆腐は大抵が同じ味になるものだから不味い訳も無いのだが、葉山が料理が出来た事に少し感心した。

そして、レンジが俺の家のよりも良いやつな事に少し腹が立った。こいつは金回りが良いのか、持ち金を使ってしまうのか。居候の身、助かってるし意見できる立場は無い。風呂トイレは別だし、今後に出かけられるのかという以外に不便さなどの心配は殆ど無かった。

「しかし、マットレスを直に置かないとか。」

ベッドを運べなかったとはいえ、問題なく寝られるのか少し心配である。寝間着に着替えた後、横たわるが感触は変わらなさそうな気がする。だが高さや雰囲気に違和感があり落ち着かない。

葉山とは部屋が違うし、前回に場所は違えど同じ屋根の下で夜を明かした事もある。

雌として、居候を考えても特に危険な事もなさそうと信じたい。特に、もっと恐れるべき相手が他に居る以上は、妥協するしかない。襲われやしないだろうし、仮にここまで心を許した女子に襲われたら、きっと今度こそは社会復帰が不可能なトラウマだろうな。なんて適当に考えてみるが、性的搾取への嫌悪感が薄い為に実感が湧かない。

親への電話もしなければと思いつつ、携帯電話の時刻を見つめる。日課のランニングの為に部屋を出た葉山と同時くらいに風呂へ入り、まだ帰ってきていないようである。余程時間がかかるようなら、ガスもタダではないし逆算して風呂を沸かした方が良かろうと数えていたりするのだ。３３分、３４分……。

こうやって数えていると、なんだかちょっと眠くなってくる、ような。

――コンコン。

「いまちょっと時間大丈夫って、にっしー寝ちゃったのか。」

ノック音で気が付くと同時に、部屋の扉を葉山開けたところのようだった。どれくらい寝てしまっていたのだろう。別に寝たふりをしたい訳ではないのだが、起きていると言い出すタイミングを逃してしまった。

「今日だけじゃなくて、昨日も疲れてたもんね。もう荷解きが終わってるし段ボールも

縛ってゴミに出せるようにしてるのは敵わないよ。律儀だよなぁ、にっしーは。」
そうして葉山は、寝ていると思い込んでいる俺を起こさないように扉をゆっくりと閉めて。
閉め……。
葉山？
「これは、そう。電気代に気を遣ってエアコン使わずに寝ているにっしーの部屋に冷気を送る為であって決して、寝姿を覗いてるわけじゃないんだ。多分、寝落ちたんだよね。毛布も掛けずに、パジャマ薄くてこれは中々な、盛り上がりが……。やっぱすっごくドデカいよ。」

入ってこないが、自己弁護が多い。
「――はっ！これはもしかして『昨日の事が実は怖かったけど本心は誰にも言えないが寝言でうっかり言ってしまったりするから撫でて落ち着かせてあげたり、怖い夢のせいで近くのものに抱き着いたりする』そんなパターンなのかも！」
ねーよ。たわけてるのかこいつは。
いやいやいやいや、もう迷いない足音が聞こえてくる。
「失礼しまーす。床に直置きのマットレスだと腰掛としても相当に低いね。ここに座

るって体勢はきついかも知れない。」

この振動で起きるのが正解か？葉山は今どんな位置に居るんだ？自然な起き方が分からないが、仰向けから寝返りをうつにはリスクが大きすぎる。寝たふりが仮にバレてたとして、股座も尻も、俺が近づけたと思われるのは不本意だ。寝相が実は悪いような設定にして、葉山がいる方の逆側に転げ落ちて起きるのが正解か？

考えていると、握りしめていた携帯が震えて、びっくりして落としてしまう。俺は別に一切やましい事はしてないのに、しかしこの世界では襲われる側だと分かっていても、女子の家に居候ってだけで意識してしまう。寝たふりってのも罪悪感や緊張があるから余計に、びっくりしてしまった。

マナーモードにびっくりしたって事にして、取り敢えず起きてしまうか。

で、目を開けたらすっごい近くに葉山の顔があった。髪が微妙に濡れているあたりから察するにもう風呂には入った後みたいだ。だとすると結構な時間を寝てた事になるし、部屋を覗き見てたのも本日二度目の可能性が出てくる。

けれども、四つん這いで覆いかぶさってるとは思わなかった。

「違うんだよ！電話を落としてたから拾おうと思っただけで、他意はないんだよ！」
じゃあ部屋に侵入をするもんじゃない、と言うにはおかしいか。こいつの家だからな。
だとして、別に怒る事も無いし、関係が拗れる事も関係が変に進展する事も俺にとっては面倒だ。……他の面倒事が解決してないからであって、俺だって葉山は最低限、人として、家族ほどではないが友人の中ではそれなりに、憎からず思っている。
だから、これはノーカウントにしてしまう。
「夢か。」
そう言って再度、目を瞑り今度こそ寝てしまえば良い。電気がつけっぱなしなのは申し訳ないが、本当に疲れていると分かれば――演技なわけだが、葉山もおとなしく部屋を後にするだろう。
「そっか、こんなことしてる場合じゃないよね。これで起きないくらい疲れてるんだからゆっくり寝かせておいてあげよう。」
ベッドから人が下りる音と何度かの機械音の後、体に毛布をかけられた。部屋を出る時に電気も消していったようで。あとエアコンをつけてくれた。

仕方なく、毛布をかける際に、下手糞な不慮な事故を装ったお触りも不問にしてやろう。あと性器ではあるけど、俗称・孕み袋は触られても別に気持ち良くないって事だけは分かった。尻を触られた時も別に変な反応はしなかったし同じようなものだろう。

ちょっと早いかもしれないが今日は本当に寝てしまおう。

――ギシ、ギシ！

……。

――ギシギシギシギシ！

……隣の部屋から五月蠅い音が聞こえるな。

「にっしー、にっしー！はぁはぁ、にっしー！にっしいいい！」

声でかいなあいつ。そして嬌声を聞いてるのに騒音と判断するようになった俺は随分とこの世界に馴染んでしまったんだなとしみじみ思う。

だが、どうしようもなく性は不全。雄の俺なら女の子の自慰行為を間近にして弾む筈の心臓はなく。雌ならば心底拒絶するような反応もありはしない。成り立ちの違う世界を客観視しているのか、それとも都合の良いようにあれかしと望んで真っ直ぐに観ようとしていないのか。

精神的な問題が増えてしまったというかやはりなのか。歌と、性の自認。ストーカー被害も二の次に出来ない。現状、全てに打つ手は思いつかないし、新しい弊害や被害が出なければと祈るくらいしかできない。

そして、遮音性の高いイヤホンがあって助かった。

死地と思うか好機とみるか

「やめだやめだ。こんな怪文書に時間取られるくらいならもっと直接的な解決策を考えた方が良い。」

手に取っていた紙を封筒に戻し、面倒事を投げた俺は携帯を弄る事にした。

意図を図る為に、栂園から送られてきた手紙を解読し始めてもう三日目になる。だが、書かれているのは下手くそが作ったポエムのようで、且つ分量が偏り過ぎている点から暗号文の一種だと仮定して目を通していた。

「あれから接触はないけど、情報も増えてないんだよ?私は悪戯だって言ったのに調べようって提案したのはにっしーでしょ?」

「いつだって、悪口とか回りくどい虐めは取り巻きで、あいつが俺に危害を加えたのは歌えなくなった境に一度。そして先日のやつだって単身で直接、会いに来た。これはイレギュラーで不可解、らしくない。」

「同じくイレギュラーの、デビュー時の発言に対する謝罪とかだったら合点がいくんだけどね。期待なんてしてないけどさ。」

どうあっても、あの時の目もこの前の目も本当に好きな音楽を語るものじゃなかった。中学で出会った時は方向はどうであれ同じ音楽好きと理解できた。言ってしまえば、決別の日でさえ、俺は奴の希望には応えられないが二度と交わらない場所で認めていた。

「俺よりも、栂園の方が変わってしまったと感じるが、葉山には分からないだろ？」

「変わった？」

「勝負を持ちかける時は、人の目なんて気にしない上に人の気持ちも知ろうともしなかったが、俺とは違う歌への真っ直ぐさがあったから俺は逃げたくなかった。でも、嘘の言葉で歌へ向かい合うあいつを知って、あの頃の全てがトラウマになった。妥協して出した答えがガラクタになったんだ。」

「ねえ、一つ聞いて良い？」

手紙を片付けながら、葉山は質問をした。きっと、数日間で違和感があり、俺自身も認識のズレは感じていた。

「にっしーって、中学時代のことはあんまり気にしてないのかな？あれだけの、辛い時間だったのに私や咲ちゃんよりも怒ったり悲しんだりしないんだね。」

「……子供の頃に、ガキがやったことだ。長らく忘れていて実感も無いからなのか、それ

とも不利益に鈍感なのかは分からないけどな。」
「羨ましい。私は、割り切ることも捨てることも苦手だから。きっとどんな風に思ってくれても後悔は消せないよ。」
「そう思ったりするのが性格に直結するんだったら、この年になってアレを笑い話かのように話すような人間よりは好ましいと思うけどな。少なくとも、俺はそう思う。」

葉山は、最近見せる悔いたような表情を崩して初めて驚いたような表情を見せた。驚いたというのは、適切ではないのかも知れない。例えば、前回の泊りに行った際に観たアニメの話数を教えた時もびっくりしていたのは覚えている。
いつもニコニコしているこいつは、後ろめたさを誤魔化している。やらなきゃいいのにセクハラとか、言わなきゃいいのに過去の悪行を言ったり、所詮は大した事ない人間だという予防線を張っている。怖いから、動かずにいられないとは羨ましい。俺は、どうしようも無くなってからでしか動けないというのに。
そしてこいつは、板についた笑顔を浮かべてくる。
「もう、栂園と比べられても嬉しくないよ。……にっしーって茶化すようなのって嫌いなのかな？」
「友達にされるのなんて気にならないな。そうじゃなかったら、変なやつには近づきた

くないと思う。」
「そっか。」
「――あのさ、明日ってなんか用事ある？」
「なんで？」
「ちょっと美容院に行きたくてさ。」
「それくらいなら送るよ。場所と行き帰りの時間は今日中に教えといてね。」

どこか疲れた様子で自室へと戻っていく。何か思うところがあったのだろうが、やはり腑に落ちない。
最近、どんどんと近づいてきたと感じていた葉山との距離だが、どうにも離れたがっているように思えるのだ。

「――つまり、僕をもっと褒めるべきでは？」
「断る。」
「でも頭の固い誰かさんは僕が提案しなかったら軟禁のままに友達と会う手段すら思い

浮かばないっすよね？」
「そりゃあそうだけども、お前に感謝は無いからな。」

美容院から二件隣りのカフェ。偶然偶々、同じ時間に同じ美容院で居合わせた俺と恭平は予定通りに近くの店で世間話をしている。
外に居たら栂園にエンカウントするのではという懸念から、あの家に数日は籠りっきりだった。だから俺としては久々に自由な外出なのだが、方法を提示してくれたのは恭平なのである。

「例に漏れず、必要以上に詳細なメッセージを僕と清哉に送ってくれてるから状況は分かるけど、ストーカー被害の区分で大丈夫なんすかね。」
「急に会いに来たのとポスト投函。表面上だとそっち系の犯罪っぽさがあるけど、俺と奴の関係を考えると腑に落ちなくてな。」
「今更、会いに来たり、過去に関係をほじくり返そうとした理由すか。」
「お前って頭が良いだろ？仮に手紙がメッセージなら解読の協力をしてもらいたいと思ってさ。本当なら清哉にも相談したかったんだが。」
「彼は絶賛、デート三昧っすから。読んでもこないだろ。」

強制では無いし、危ない雰囲気さえあるから関わらない方が望ましいのは分かる。でも、俺以上に過剰反応する実妹や葉山だけじゃなく第三者の意見が欲しいというのも本音だ。

「過去にトラブルのあった人間関係と、それが原因で変になりつつある人間関係。マサってば自分でどうにかするつもりあるのか？」

「いやだから、今日の散髪だって意思表示というか。このままじゃいけないって俺も分かってんだよ。」

「色気ないなぁ。散髪って言い方より、ヘアカットとかの方が異性受けはいいっすよ？まあ長い前髪を目が出るくらいに短くしたのは良いけどさ。」

実際、決意表明という意味以外はない散髪だからな。だとして、どこまでバッサリすべきかは判断しかねた。プロへの「前髪はスッキリで」という投げやりな注文は割と問題なかったようである。オシャレまでは目指してないが、この世界の価値観で浮かない程度の身だしなみは守っていきたい。

「マサは知らないかもだけど、僕は回りくどい言い方嫌いなんすよ。」

「回りくどい話なんて聞いたことないけどな。」
「手紙より、ライブのチケットにメッセージ性の高さを感じるからそっちに行くべきだと思う。それで、もし直接話せるようだったら手紙とかどうでもいいから決着するのが楽だと考えるが。」
「簡単に言ってくれるよな。」

出来るんだったら、それが最速なんだけども。勇気が湧かないという言い訳は、決意表明とか言った手前、しづらい。行くのがベストとは思うが、拒否反応が……。

返答に困っていると、携帯電話に咲からメッセージが届いていた。

『話は聞きました。行くって決めたんなら止めません。その日、私は行けませんが葉山先輩によろしく言っておいてください。あと、恭平さんにも。』

向かいの席でニヨニヨと笑っているむかつく輩は、煙草を吸っていいか？というジェスチャーを繰り返している。

コイツ的には一仕事終えた気分なのだろう。

「はえーんだよ。気持ちの整理くらいはつけさせろって。」
「せっかちなもんで、申し訳ないっすわ。外堀を埋めたらもう行くしかないだろ？同棲

相手にはマサから直接に言うべきなんでそこだけはよろしくな。」
「てか、当日は来てくれるのか？別に恭平がくる必要なんてないから、変に気をまわさなくてもいいんだが？」
「だから、僕は面倒くさがりなんすよ。最低限、その日にはマサと葉山さんのぎくしゃくを終わらせる。あわよくばもう一つの問題も解決。手紙なんて帰ったらゴミ袋に突っ込めばいいんすよ。」
「話が極端だな……。」
「だって、そうだろ。直接に言えないような話を暗号にとか創作物の見過ぎだ。そんな面倒な奴はいつまでストーカーしても本題が見えないんだから欲しい情報は貰えないし、ましてや正常な人間関係なんてないって、当日は僕が言ってやりたいくらいだぜ。」

ヒートアップして、テーブルに拳を振り下ろさんばかりの演説をする恭平。こいつの熱がこもってるから、それも理由だが、ここまで怒って行動してもらって、葉山への電話で日和るのはどうだろうか。
あとで直接に言えば済むが、善は急げというしな。

「もしもし、葉山か？今って時間大丈夫か？」

『だいじょうぶだけど、まだ迎えに行く時間じゃないけど何かあった？』
「何もなくはない、んだけど決心というかそんな感じで。」
『？』
「あ、あのな！進展するかもしれないから、前に渡されたチケットのライブに行こうと思うんだ。手紙を眺めるより、分かることがあると思うから。」
『……決めたことなら反対したくないけどまだ、にっしーの体調が万全とも分かってないしどうだろうね。』

やっぱり、随分と消極的だ。しかし、電話越しに説得できるほどの弁舌は俺にはないんだが、どうしよう。

「マサ、一回しか使えないけど有効な手段はあるっすよ。」
「そんなのがあるのか？」
「あっちは、一歩踏み出せずにいるんだ。この決心自体がマサにとって勇気ある一歩とも気づいてないから葉山さんも決心出来ない。」
「でも、これ以上に勇気を出すことなんてないぞ？」
「勇気を見せるんすよ！結局、恥ずかしくてプールにすら行けなかった水着を着るとか

言えばどうせ女なんてイチコロっす！」
「ば、ばかっ！あれは、まじで恥ずかしいから嫌だって言ってるだろ！」

それ以前に、そんな会話に関係ない話題で釣れる訳が……。

『にっしー、そうすべきなのは私も分かるけどね？でも私よりも、にっしーが辛い思いをする方が嫌だな。』
「そんなの行ってみないと分からないし、大丈夫なのは俺が保証する。仮に駄目だったら、葉山のいうことをなんでも聞いてやるよ。」
『いや、そういう問題じゃなくて――。』
「なんでもは言い過ぎた。み、水着くらいなら、いけます。」
『っ!!ゴホゴホッ！』

急に咽はじめたけど、大丈夫か？そんな、嬉しくなってくれるものなのか。
『いや、でも、駄目だよ。もう内定式すら近づいてるんだからプールも海も風邪ひいちゃうし。』
「別に温水プールでいいじゃん。」

『……温水、複合商業施設、一泊二日。』
「葉山、茶化すような真似して悪かったけど本気なんだ。行かせてくれないか。あいつとの決着がすぐにつくとは思ってないけど、何もしないで影におびえるなんてしたくない。」
『私こそ、ごめん。止めるべきじゃなかったし、寧ろ力になるべきだったね。取り合えず行動しないと始まらないしね。当日は、私が車を出すよ。あと、泊りで温水プールある所も予約しといたから。頑張ろうね。』

動かないと何も変わらないんだったら、一回は葉山とも腹を割って話せる機会も同時に作れたのは良かったのかも知れない。実際にどうなるのかは結果論だが。

「小旅行までギスギスしてたら、僕はライブの時に肩身が狭い思いをするんすけど大丈夫っすよね？」
「お陰様で本心を言い合える機会は作れたと思うから、ライブの何日後かは知らないけどわだかまりは無くなると思うぞ。別にわざわざ突っかかったりしないけどさ。」
「当日は肩身狭い一日になりそうだ。」

会場との一体感は絶対に味わえないんだろうとは俺も思うが、頑張って回りに迷惑をかけないように擬態しないとだな。

「ペンライト、タオルの振り回しが禁止らしいから安全面は大丈夫そうっすね。あとは無地シャツとマスクつけて擬態が良さそうに思えるけども。」
「恭平、その擬態は多分時代遅れだぞ。」
「マジすか。どの界隈も移ろうモノなんすね。」

分かりあえない彼と、俺と

ライブ会場に恭平を残して車に乗り込む事になった。
呼び出されたと伝えると、邪魔になると悪いと応えてくれる。恭平は心身ともに笑顔で叩いてくるような友人だが、デリケートな部分には人一倍敏感だ。変に気を遣うくらいなら触れないようにと考えているんだろう。
気の置けない関係は、互いに気分が良いものだと思う。

だからこそ、対して栂園のこういう所が大っ嫌いだ。
日が沈むには早く、しかし昼と断じるには少し遅めな時間。俺と葉山はライブ会場から取って返す形になった。理由は、栂園からの連絡があったから。ＳＮＳのダイレクトメッセージによる通達。
『俺様の出番までは暇だから、上り方面の六駅先、西口正面の直ぐにある公園で待つ。』

これが彼からのメッセージだ。
もう、すっかり前から相容れないと感じていたがここまで人の心が分からない奴だと

は思っていなかった。あれから奴に関して調べて、そして今日の会場でも分かった事はいくつもある。

栂園の所属は冷泉グループという会社の芸能部門。特に、栂園が入っているアイドルグループは男女混合総勢百人近いプロジェクトで、単位の集合体で構成されている。多くて七人、少なくて二人。そしてその中でもトップ人気は二人組のユニット。その一人が栂園。

人気、序列が高い程にライブでは後に登場だったり、大きなライブにしか出演しなかったり、単独ライブだったりするらしい。観たのは栂園の情報だけだから肝心のライブに関しては殆ど分かっていない。物販に並ぶほど早く来たわけではないが、大人数という事もあり長く時間の取られたリハーサルが漏れて聞こえてくる場所だってあった。俺らが会場から離れる頃にはライブ自体は始まっていた筈だ。

ライブ後だって時間があるはずで、理由があっても、同じグループ彼ら彼女らの出番を『暇』と表現する輩と知りたくは無かった。彼の歌がうまいと認めていたかつての俺以上に、パフォーマンスに期待するファンや同じ所属の人間がいる。リハーサルは少し聴けばわかるほど一生懸命で、ライブが始まる前からファンも熱心にしている。それを軽んじるような男に聞く事なんて本当だったら無くていい。

義憤を感じるとは、今日この時をいうのだろうか。きっと二日も持たない感情で、言うなれば八つ当たりのようなものに過ぎない。

そう、心の奥底では感じていた。俺以外の誰かが迷惑をしているんだったら、俺が栂園を嫌っても良いんじゃないかという免罪符を探していた。でも、もし、俺がこんなであるように、栂園があんなやつである事に理由があるんだとしたらそれは俺の知らない話。きっと同じく性別に起因する話だ。俺と恭平のトラウマがそうであるように世界に感じるズレの原因を体感で語るのならば、性に関する話。現状は、それ以外に考えられない。

この世界の男だから、栂園はああなってしまった。この仮説が正しいとして、だからどうだっていうのだろうか。目の前がすべて、だからきっと理由があったとしても、俺が受けた仕打ちに、他ならぬ俺が一番怒るべき筈なのに。

「にっしー、あと十分もしないで着くけど大丈夫？」

「どうであれ行くしかないだろ。覚悟、って言えればいいんだが。なんにしても諦めがついてるから引き返す必要はない。」

「そっか。」

空気はそれほど重く感じない。気持ちは思ったより沈んでいない。きっと事態が好転しないと予想されている事だけは、俺も葉山も否定しないだろう。

恭平はここに付いてこなくて良かった。あいつは、ああ見えて気をまわして空気を和らげようとするだろう。たとえどんな形でも、当事者以外の誰であっても、踏み込んでほしくない。こんな下らない話で傷ついたり、嫌な思いをするのは俺たちくらいで十分だ。

「こんな時間に、俺ら以外の公園に車が止まってるって事は……。」

「うん、栂園はもう来てるって事だよね。」

特別高級感も無い車。社用車でもない。本当に私用で、あいつは仕事を抜け出してきている。そして正面すぐというにあいつの説明にしては、本音でいえば遠すぎた、寂れた場所。何かが埋まっていた跡があるだけで、ベンチ以外に遊具すらないのは、きっと世間の流れだろう。

公園に人影は一つ。

「ようこそこんにちは?こんばんは?まあなんだって良いや。なんと正美くんが俺様の為に態々来てくれました。パチパチ……。すっごい嬉しいぜ。なあ、本当はゆっくり話したいんだけど。俺様って超がつくほど売れっ子だから、今日は大体三十分で許してくれよ。……なんて、どうにも正美くんが許せないのは時間が足りないだけじゃないようで俺様は嬉しいぜ。どんな理由であれ存在を、人の心に刻みつけるのってどうしてこんなに気持ちいいんだろうな?アイドル、冥利に尽きるって感じか?」

「話をしたいのは、そっちだろ。何もないなら俺たちは帰るぞ。」

「焦らしてくれるじゃん。分かってるくせにそんな言い方するんだもんな。」

俺から焦らす事なんてない。もし、話さないのならばそれは栂園の事情だ。引き伸ばしにするメリットなんて俺にはない。

「あれから少しばかり考えて。やっぱり正美くんってずるい奴だなって思うんだ。」

「俺の何がずるいって言うんだ。」

「だって、君は中学の頃から秘密を隠してばかりじゃないか。」

悪い事はしていないのに、胸が締め付けられる感覚を覚える。今の俺の状態の話か？だが中学からと言っている。きっと見当違いの事、或いは本当に、今現在の世間と価値観の違う俺の人格の事なのか？

俺は逃げないと誓っている。ここで目を逸らすわけにはいかない。例え、何を見抜かれていたとしても。

「この前の祭りで確信した。まず、はっきりと言うが、励ましの手紙や親友が傍にいる程度で立ち直れるなんて幻想だ。何らかの手法で、君は持ち直せる。俺様はそれを知りたくて仕方がない。歌の技術か？それとも精神的な思考法？何だって同じだ。それが、俺様を魅了しているのが事実だ。」

「そんなものは無い。他人の精神事情に、誰かの理論は当てはまらない。特にお前みたいな奴のは。」

「当てはまるさ。いったい何人が、俺様の前で心を折られていると思う？俺様は知らない。安心してくれ少なくとも自分から折った人は覚えているぜ、一号くん。でも、ファンレターに書いてたりするんだ。夢を諦めたとか、自分はそこまで上手くなれないから

応援だけに徹します、才能がないことに気づいたって具合にな。天才は孤独、俺様も正美くんもな。天才的な部分を隠して溶け込もうとしてるけど、それは本当の正美くんか？俺様が君に会った時、君はもっと孤立していた。俺様と歌う度に、君はもっと孤立していった。」

「中学のは、全部、お前のせいで孤立したんだ！それを知らない誰かとか、お前を慕った結果に間違いを犯した人のせいにすんじゃねえぞ！」

「責任の押し付けは正美くんだぜ。君の心が折れた次の日にすっぱりとイジメがなくなったのは、君が普通の人間と認められ安心されたからだ。理解されず同じ恐怖を覚えても、人は暴君には石を投げないが、英雄には平気で投げる。挑み続けて、気味悪がられていたのさ。俺様みたいな暴君に挑む、正美くんという英雄は。」

受け入れられない。その言葉は心に刺さった棘のようだ。俺が、もし栂園と同じなら、周りのみんなの本心はどうなんだ？異物が、受け入れられないというのなら、今の俺は一体、本当に受け入れてもらえているのか？

「どうだっていい。にっしーはありのままを見せて、そして好きと思ってる人がいっぱ

い居る。私がその一人だし、私以外にも証明できる。猫かぶった人物像でしか受け入れられてもらってないお前とは全然違う！」

葉山は認めてくれている。俺の為に怒ってくれる。少し、隠し事があるのは事実でも、それでも俺の行動や人となりは受け入れてもらえている。

本当は、元々の仁科正美に対しての感情だとして、ここまで皆に心配も信頼もしてもらっているから、今日に俺は逃げるなんて出来ない。

「栂園、立ち直るために必要なのはきっと周りの人だ。俺はこうして前を向いていられるのも、勇気をもらってるからだ。少し揺らいだ心だって葉山のお陰で今は何ともない。」

「違うぜ。君は、どこかで俺様に対しても優越感を持っている。だから踏みとどまれる、だから向かい合える。心の余裕？どこで秀でる？決まっているだろ。」

真剣な目に射抜かれる。俺は、目を逸らす事はせず、栂園も俺を見据えて逃がさない。瞳に映る感情には、ほんの少しの怒りが見えるが、真意は悟らせてくれない。

「歌だ。」

「歌。それ以外にあり得ない。君は、俺様の知らない技術、或いは才能で以って優位性を保っている。そうじゃなければ、無意識に俺様の前で、歌って、それで対抗しようなんて思えないぜ。」

「理解ができないのはきっと、お前が人の気持ちがわからないからだ。」

「そう思われるのは構わない。でも、俺様は誰よりも歌に関しては真剣だ。誰よりも長く真剣に向き合って、自慢じゃないが才能が有って、それでも俺様が正美くんの歌に惹かれる理由は未だに言語化できない。その理由を、技術を!ずっと俺様は恋い焦がれているんだ。」

「歌に込める気持ち。そう言っても栂園は納得しないんだろ?」

「ああしないぜ。正美くんも覚えておいた方がいい。気持ちは正確な言葉にするべきだ。歌に乗せた気持ちは、近くても遠くても絶対に伝わらない。人を感動させる歌は、技術だ。歌手の感情なんて心の揺さぶりに一切の効果なんてない。君は知っていて、隠していてこんな意味のない問答をするんだろ?そういう所は大っ嫌いだよ。」

それは違う。葉山は、俺の短い歌を通じて、隠している心の構成まで感じ取っていた。

例え伝えようとしていない事も、心の一部。歌は心の表現法の一つで、きっと歌う以上は心を隠せない。

「……俺は絶対に断言できないと思う。」

「君もいつか分かるようになる。今日のようにもう逃げないというんだったら、きっと近いうちにわかるだろうぜ。」

近いうちに分かる？また、栂園に会わなければいけないって事か？

「次に会うときには、また正美くんの歌が聞けると信じてるよ。それまでは、俺様から会いに行くこともないし、俺様が率先して君の不利益になるようなことはしないって約束するぜ。でもこの後にあるライブは、折角だし見ていってくれると嬉しいぜ。」

「人の家に大量の変な手紙を置いていく奴の言葉を信じろってことか？」

「役立ててくれるとありがたいぜ。きっと読み解いてくれるだろうと信じてるからな。それに、俺様にだって、表立って言えない事情は山ほどある。信頼している人間に言えないことも、……思っていても言えないことも。」

栂園が俺の前で初めて、自信の溢れる表情を崩した。中学に出会ってみた事もない顔。あの日、手紙を破り割いた時だって張り付けたような笑みだったというのに。

虚を突かれるような衝撃。それと同時に、新たに公園に入ってくる人影が現れた。

目の前の人物と共通点の多い服装。確認するまでもなく、アイドルの仲間なんだろう理解できた。停まっていた車、その中までは確認していなかった。きっと今まで車の中で待っていたのだろう。

「ゾノさん。なんかマネージャーから電話かかってきて、怒ってたから切ったんだけどそろそろ話は終わりそう？ボクも一人で車中にいるの飽きたし帰りたいんだけど。」

「アダム、君が勝手についてきたんだろ？それに、今の冷泉さんは統括部長とか室長って呼ばないと小言を言われるぞ。」

「いいよ、もう。帰ったらどうせ怒られるもん。」

小さい。というよりも若い。幼さが残った顔立ちで、同じグループだと思われても栂園と対等な立場で話している。

「あっ、そっか自己紹介しないと。功刀アダムだよ。ゾノさんと同じユニットで、クォー

ターって言ってわかるかな？まだ中学生だけど、アイドル頑張ってま～す。」

自然な笑顔。フレッシュさに溢れていて、自信も兼ね備えている。目がパッチリしていて、純粋な日本人と比べると鼻と顎がシュッとして見える。髪と目が少し茶色？金？が混じっている感じだろうか。ミドルで癖っ毛なのは、地毛か。それともロングでストレートの栂園と対比させてるのか。

しかし、中学生でアイドル。栂園のデビューが高校だった事を考えると珍しい事でもないんだろうか。

「話、聞いてるよ。ゾノさんが歌で勝てない人なんだよね？ちょっと尊敬しちゃう。」
「はぁ？負けてないが。」
「でも完勝しないと勝ちも認めないじゃん。人気も最近はボクと二分だし、デビューしてからの年数考えたらほんとはゾノさんよわよわじゃん。ダンスはボクのが絶対上手いし。そろそろ日本一アイドルの看板は重いんじゃない？もっとファンサとかすればいいんじゃない？」
「ライブの直前に、買い食いしたいからって俺様の車に忍び込んだやつにプロ意識を問われてもダメージはないぜ。」

「ゾノさんの分もアイス買っておいたよ？嬉しいでしょ!?」
「いらねえ。つーか溶けるものを放置して来てんじゃねえ、暖房つけっぱだろうが！」
　栂園の反応は冷たいものだが、功刀と呼ばれた少年は随分と懐いてるようで、忙しなく周りをウロウロしている。
　なんだか、もう帰ってもよさそうな感じなのだろうか。流石に挨拶くらいはしておくか。

「俺の名前は聞いてるのかな、仁科正美だ。」
「噂の正美くんだよね。楽しんでってね、ボクたちのステージ。あと、お近づきのしるしにこれあげるよ。アイドルチップスのボクのカード。」
「どうも。」
「それは余ってるからあげる。ゾノさんのはあげない。ボクが唯一尊敬してるアイドルだからね。」
「よくいうぜ。」
「その言葉が、本心から言ってることを俺も祈ってるよ。栂園との関係をどこまで聞いてるのかは知らないけど彼のせいで、君を信用することだって難しい。」

「アハハ、手厳しいね。でもきっと、分かり合えると思うよ。ゾノさんのあんなやり方で今日のライブに来てくれるくらいに優しいんだろうからさ。……そろそろ時間がやばいかも。」

公園の時計を見て、功刀はゆっくりと出口まで歩いていく。

「アダム、車に乗っててもいいけど俺様はもう少し話していくぜ?」
「あのねー、化粧直し、衣装直しやって、説教もされるんだから。聞き流すだけだけど、結構長くなるかもよ。実績はグループにおんぶにだっこの赤ちゃんな癖に、口だけは回るからね。トーカツブチョーさん。」
「しゃーないな。限られた時間の逸った言葉よりも、俺様の歌で分かってもらうしかないぜ。歌から心がわかるってんならな。」
「ボクたちの、歌でしょ。ほら、いそごうよ。じゃあね仁科さん。『クォンタムコラム』をよろしくね。」

俺たちの側から言いたい事は碌に言えずじまい。思ったよりも短く、そして得られた情報はあまりにも少ない。でも、随分とあっけないというか、棘が少なかった。この前

みたいな鮮烈さは見る影もなく、しかし感情的な部分が見られた。
あいつの、対人の対応が大人になったのか。それとも……。

「にっしー、私たちも戻ろっか。」
「ん、ああそうだな。あんまり待たせるのは申し訳ないからな。」

恭平は一人で会場にいるんだから、急いだ方がいい。大丈夫だとは思うが、どんな人が集まるかわからない場所で男を一人にするのは、世間では体裁が悪いだろうな。例え事情があったとしても、特に、今日の面子で唯一の女性である葉山が怒られるだろうと考えると良い気分ではない。

「それにしても、今日の葉山はおとなしいな。この前は、二度三度以上、随分とはっきり物申していたのに。」
「物怖じしないようにって思ってたんだけどね。男子が三人もいると口出しするタイミングが掴めなくってさ。何か、フォローでもしてあげれればよかったんだけど。」
「異性に囲まれるのが苦手なのか？」
「にっしーに何かあったらってのと、彼らに何かがあっても責任を取らされるんだろう

と思って。杞憂に終わった過剰反応だったけど、陥れる為に態と騒がれたら思うと気が気じゃなかったよ。そしたら抱えてでも逃げるつもりだったから。言い方は悪いけど、普段からにっしーを見てるお陰で美男子三人に囲まれてても然程の緊張がなかったのは救いだったかな。」

何気なく言われた言葉に、動揺してしまう。車に向かっていく葉山はあっさりと言い放ったが、気恥ずかしくなってしまう。

贔屓目、それは分かっている。しかし、アイドルを目の前になるほど偶像より生まれたと言われて信じてしまう程の綺麗さや整い方をしていたさっきの二人。同列に並べて評されると悪い気分はしない。栂園への皮肉、いや少なくとも功刀くんはまともな風に思えたからちがうのだろう。

最低限、この世界に生きた俺じゃない俺の努力を踏み躙らないように、最大限、身だしなみに気を使っていた努力が褒められたようで素直に嬉しい。

きっと俺はアイドルになんて興味はないが、こんな気持ちもあるのなら、俺の知る単にまじめだった天才くんな栂園もこんな価値観の世界でアイドルを満喫していても変には思えなくなってくる。

「寒かったならコンビニでも寄っていこうか？私は大丈夫だけど、男子って冷え性だったりするでしょ？」
「いや、会場に早く戻ろうか。栂園はともかく、一生懸命なアイドルを見てみたい気持ちは少しくらいあるからな。」
「ふーん。気になる女性アイドルでもいるの？」
「そんなんじゃなくて、男女関係なく歌でもダンスでも楽しんで一生懸命やってる姿を見たら俺も歌うことへの恐怖が和らぐんじゃないかなって。そもそも直視できるかも疑問だが。」
「……私はまだ怖いよ。でもまた楽しく歌いたいって、思っているんだったらきっと私も諦めないで出来る限り支えるから。」
「そんな言葉に力を籠めなくても大丈夫だって。今日は歌を聴くだけなんだから。」

心配症なやつ。だけど、横で運転するんだからこれくらいがちょうどいいんだろう。楽観的で、まだこの世界に振り回される俺にとっては、特にありがたい存在だ。
歌えるようになる。それは勿論だが、近いうちに別の方法でお礼を考えるべきかもな……。

今更でも認めたくない

会場に戻った瞬間は、自分の目を疑った。

アイドルのライブになんか行った事のない俺は、自分の知識と記憶からこんなものであろうという大まかな想像はしていたが、間違いであると分かった。キャパの大きすぎる会場。入場と同時に配られた見慣れない端末。ステージの他にある謎の審査員席。そして、均等に周りを囲む四枚の巨大モニター。

初めて、俺の知る常識を流用できない何か。

ファンは盛り上がってる。アイドルは二階席からだと目視じゃ難しいが、その動きや歌い方、そして表情分かるように素人目でも綺麗なアングルがモニターで観えるし歌声も聞こえる。

だけれども、これは俺の知るライブとは決定的に違う。そして、席に座る事も忘れて壮大さとステージ上で踊るアイドルに釘付けになった。考え事、というよりも絶句の方が正しいのだろう。目の前の光景に硬直していると、恭平に軽く肩を叩かれた。

「思ったより早かったっすね。まだ後半戦の三組目だ。」

後半戦？複数ユニットからなるグループだから、ライブに複数いるのは分かる。だけど明らかに、折り返しの意味での後半戦という言葉じゃないと理解できる。

先ほど、はっきりとステージに居るグループがＭＣで「序列維持は関係ありません！僕たちの歌を聴きに来てくれたみんなの為に頑張ります！」と言っていた。アイドルはやっぱり男子ばっかりだし、見た目が丸っこく柔らかいとはいえ肌の露出とかを考えると違和感は拭えない。加えて、序列と言われても、少し知識として受け入れるには多すぎる情報だった。

「二人が戻って来たから貴重品とか気にせず離席できるの嬉しいな。僕はちょっと離れるけど、場所わからないならマサもくるっすか？」

「ああ、ついてく。葉山、わるいけど荷物を見ててくれるか？」

「いいよ。カイロ持ってく？」

「いらん。」

そんなこんなで全世界オール個室になって男女平等すごく混むトイレから離れて、人の一切いない喫煙室にお喋りに付き合えと、引きずり込まれた。トイレだが、想像以上に人が多かったのは男子トイレの個室で非常ボタンが押されていたらしくスタッフも過剰に回されていた。

要するに、主目的が話をする事だったので座席から離れた俺たちは少し落ち着ける場所が欲しかったのだ。

俺は付き合いでも吸わないが、こうしてよく喫煙所に籠る恭平と長くいるから雑談する為にマスクは常備している。

「困惑してるってわかってる。トラウマの一件でテレビ含めて色んな情報遮断されてて、ライブとかの様変わりに困惑してるんだろ。僕も興味なかったからここまでとは思わなくてびっくりしてるから。まあ、何事もなく戻ってきて。この会場に対して驚く余裕があるのは良かった。」

「恭平……。」

「でもまあ、それなりに詳しいから現代のライブに関して十分な説明はできるから。頼ってもらって構わんすよ。」

「いやお前さ、前置きが長いんだよ。ついでにヤニ吸いたかっただけだろ。」

「いいか？ストレス解消以外にも、幸福の最大化って役割があるんだよ。マサが無事に戻ってきて嬉しいって思うわけ。」

顔を背けて、な訳じゃなく、普段通り煙を気遣って人にかからないように吹いているんだろう。普段のごった煮の喫煙所では意味ないんだからそんな事しなくてもいいんだが、まあ恭平の癖だ。

「僕らが中二の終わりとかそこらへんの時に、芸能界の一大スキャンダルが……。と言ってもマサはもうテレビとかを見せてもらえてない時期だったっけ？」

「それは高校入学してからだけど、元々興味なかったからな。心の余裕もなかったし知らないかもだ。家族も、覚えてる記憶だけでも過保護になり過ぎてちょっと居心地が悪くて、中学生の頃は塾に逃げてた時期だからな。」

「まあ、知らないなら説明する。『十年蔓延した枕営業を徹底排除。関わりある事務所の無期限活動停止。』、芸能界の中でも特に俳優業とからしいけど殆どの事務所を潰すような動きだったんすよ。放送してたドラマは全部打ち切り、そもそも放送局も大変らしくて一年はまともに動けてなかったらしいんだ。」

聞いても全然、記憶にない。中学を思い返してもそれどころじゃない記憶ばっかり

だ。勿論、元の世界でも聞いた事のない話になる。

「僕も、その頃はちょっと忙しかったんで聞いた話でしかないけど。業界の汚点を洗い出したのが冷泉グループで、高校生になる栂園太陽は圧倒的な実力と技術と美貌で、発足された第三者委員会から評価された可視化した得点を引っ提げてデビュー。そして……。」

「トップアイドルになった訳か。汚職なく実力が評価されるように、ライブにも審査員を読んでってことか？」

「しかも客観評価される仕組みが整ってる分野が当時に急造した一つしかなくて、今の芸能界はどこもアイドルだらけ。全てが完成した楽な土台に滑り込んできた当時の弊害。潔癖な風潮を業界が推し進めて、枕はおろか彼氏彼女すらも大衆は受け入れづらくなったって訳だ。構造を壊して、有利なように作り上げて、マッチポンプすら疑われたけど、冷泉グループは過去一切の枕営業の疑いはなかった。そして、第三者委員会は実際に冷泉グループとは無関係だからな。」

「それで今のスポーツ観戦みたいな雰囲気があるライブになったのか。」

「審査員の付ける得点。ファンが配られた端末で入れた得点。そして、冷泉は自社のアイドルグループに序列をつけてユニットごとで競わせる。」

当時のアイドルファンはこの仕組みを受け入れるしかなくて、芸能関係者もこれに乗っからざるを得なかったって事か。

何気なしに観たあの時のテレビ。旗印を任されて、それだけの大役で、どうして栂園はあんな、あいつも俺も得をしない言葉を喋ったんだ？俺が嫌いと言っても、本当に俺が見てるとも分からない所で、何よりあいつは俺が記憶をなくした事さえも知らなかった以上はあの時に俺を苦しめる目的があったと思えない。

深く考えないと、そう感じた時に俺と恭平がビビりあがる程の怒声が聞こえた。

「なんで、私がこんなことしないといけないんですか。貴方は社会人ですよね、仕事中ですよね!?」

「本当に申し訳ありません！」

葉山ほどじゃないにせよ背の高いスーツ女性と謝っているスーツの男性。一見して女性の方が上司なのだと分かり、男性はなぜか左手にぬいぐるみを抱えていた。

「扉が錆び付いてて、自分の力じゃ開かないから来てくださいって。上司を呼びつける

なんてありえません。それに、貴方はこんな場所に用事は無い筈ですよね。ライブ前のアイドルへのフォローはどうしたんですか?」

「それは……。」

「言えないなら、今日限りで顔を合わせる事はないでしょう。支社への転勤を楽しみにしていてください。」

「た、担当アイドルの一人がリハの時に会場で遊んで、この部屋にぬいぐるみを忘れて、このままじゃライブが出来ないと泣きつかれて言われたので。全て黙っていて申し訳ありませんでした!」

部屋から出て直ぐ彼女らが俺らの死角に入ったから、ガラガラの喫煙所に居る事に気づいていないんだろうが説教を廊下でするのはやめてほしい。恭平の見た事ないほどの心底面倒くさそうな顔をみると、そこまでじゃないだろと小声でささやけるが、まあ気分がいいものではない。

「小学生くらいの子供も我々の、冷泉のアイドルです。ですが、あの子たちは太陽くんを除いて蛹にも満たない子たちです。ぬいぐるみがないからしょうがなく探す、ではありません。正しく道理を説いて導く義務が貴方にはある筈です。なあなあで思い通りに事が進むと思わせる。それは教育ではないでしょう?」

「おっしゃるとおりです。ごめんなさい。」
「正しく導き育てなければ。だめな社会、だめな大人のせいで羽をもがれてアスファルトに横たわる蝶は、もはや見るに堪えない。行きますよ。次に不祥事を起こしたら本当に支社に飛ばしますからね。」
「ありがとうございます。必ず期待に応えて見せます。冷泉部長。」

冷泉部長。確か、栂園たちの会話に出てきた人だ。功刀からの信頼はなかったようだが、言動を聞く限りではそこまで悪い奴ではなさそうだ。
やや時間を潰しすぎたか。廊下の小さいモニターを見ると笑顔がまぶしいアイドルたちがステージから手を振っている場面が見える。映像背後のステージモニターを見るに序列が三つ進んでいて、一位であろう栂園たちを考えるといよいよだと思えてきた。

そろそろ一服も終わったかと恭平を見ると、灰皿に半分以上残った煙草を押し付けて固まっていた。吸ってないのに、癖が出てるのか顔を背けている。
「どうした、カッコいいアイドルでもいたか？」
「……。いんや、何でもねっすよ。なんつーか、急に煙草が不味くなったからな。ど

うしたもんかなって。」
「味覚が正常に戻ったんじゃないか。いや、本当に具合悪いなら無理すんな。あいつのライブより恭平のが大事だからな。」
「戻る、ねえ。そっか初めて吸った時もこんな感じだったか。不っ味い思い出。」
「本当に大丈夫そうなら戻るぞ。あったかい飲み物でも買うか？」
「奢り？」
「一緒に、自販機に寄りますか恭平くん？貸した金はいつ返してくれますか？」
「今は僕は財布ないから今度な。次会った時に返すから許して。かっ～～喉乾いたな。財布持ってないからな～。どーうすっかなぁ？」
「はぁ、買ってやるからマジで次に会った時は返せよ。」
「ありがとありがと、すまんね。お礼に何かあったら一つくらい頼み聞くから。」
「ほんと頼むぞ。」

冗談言って、変に固かった表情が崩れたようで良かった。
もう一本咥えようとしてたからケツ引っ叩いて喫煙所から追い出すように、会場に戻る事にした。

それからライブを、ユニットにして七組ほど、時間にして二時間ほど観たが正直に言って楽しめた。何よりも、歌に対しての拒否反応は殆どなく素直な気持ちで熱中できる事が嬉しかった。

嬉しいという感情。頭では安堵、それと同時に湧き上がる歌への期待感やワクワクする気持ちはきっとこの世界の俺が持つ気持ちだろう。これだけの気持ちに晒され続けて、歌への感動がない訳がない。良い意味でも悪い意味でも、栂園の歌にメッセージ性があるんだったら感じ取れるだろう。

しかし、評価の基準がいまいち分からないが、三人の審査員が出した最高得点は7．0、7．2、7．3。これがすごい事なのかすらよく分からないが、最大手の冷泉グループが十点満点続出になってない以上は相当な辛口評価だろう。

いやしかし。

「アイドルとはそういうものだとわかっていたが殆どの衣装がスカートじゃないか。」

「まあ、男は普段着で履くことはないからな。踊る上ではいいだろうし、見てる分には可愛いすから。」

「女子だって相当なラフスタイルの人しか持ってないよ。私はもってないし、親世代の

価値観だと着ることを止められてる家もあったらしいんだって。」
「じゃあ、結構受け入れられづらい服装なのになんで着てるんだ?それこそイメージ戦略的にも――。」

脇腹を軽く小突かれる。恭平にしては珍しく弱く叩いてきたな。耳元に近づいてボソボソと小声で話してきた。
「マサさぁ、仮に、仮にっすよ?ソレで、ズボン履いたら踊れないだろ。ばるんばるんっすよ。」
「踊ろうと思ったことはないけどそんなにか?」
「流石に分かるって。マサの５０Ｍ走のタイムとか酷いじゃないすか。」
「それは単に足が遅いだけだ。」

恐らくありとあらゆるどんな世界のどんな俺も足だけは遅いだろう。それだけはどうにも、どうすれば皆のような走り方が出来るのかは理解できない。どんな頑張って走っても前に進まんだろ。
運動ができる人、というくくりには憧れはない。だがステージで踊る彼らへのすごいなという思いは、アイドルへの憧れというよりはあんなダンスを踊れてすごいなという

憧れの方が大きいかもしれない。
全然、運動できないわけじゃないけども。
見かけの憧れって意味では、正直な話、高校の時から恭平の容姿が飛びぬけていたから、芸能人が素敵だと思う事は少なかった。恭平が諸々のコンプレックスを持ってると知ってから寧ろ、直接に褒めたりするのは控えているのだが。

――キャァァァァァァ!!!
――ピャァァァァァァ!!!
――タイヨウサマぁぁぁぁぁ!!!
――アダムクーン!!!!
一際、大きな歓声が上がって会場が揺れる。もう外はだいぶ暗い時間で、しかし俺が到着した時よりも会場は体感で2℃は上がっている程、最高潮のボルテージだ。
『みんなー！遅くまで待っててくれてありがと。出番としては、ボクたちで最後だけど楽しんでいってね！』
『今までで最長に並ぶくらいの長時間のライブで、出てきたユニットも２０を超えて。それでも皆がリハーサルとか頑張ったから前回の夏フェスよりも結果的に短くなりま

した。まあ俺様は終電までやっても良いんだけど、今は小さい子とかがグループにいますからね。』
『そうなんだよ。ゾノさんすっごくボクのことを気にかけてくれてて、控室でもいっつも二人でいるんだから。』
『大学入ってからの俺様は社員待遇で色々と会議があるから控室は別です。嘘をつかないで欲しいし、段取りがあるんだから口をはさんでくるな。』
あいつ丁寧語と常用語が混じってて気持ち悪いな。
『俺様がデビューしてから随分と経って、グループだけじゃなくて会社も成長して、簡単な話が新しい芸能部署、そのオーディションを来年の二月にやります。モニターに概要のスライドが出てるか?』
『モニター……、出てるね!参加資格は特になくて、オーディション自体がでっかい企画なので多くの人に参加してほしいな。男女関係なく来てください。ファン感謝イベントの名目も兼ねているのでボクたちも参加するから、是非近くて交流したいな!』
『詳細は追ってホームページとか公式アカウントから報告しますが、二回目があるか分からない程に大規模な参加型イベントなので必ず参加してほしいですね。』

言葉の通りに受け取るのなら、それに参加しろって事なのか?たったそれだけを伝え

る為に俺をこのライブに呼びたかったのか？もしくは、それだけの意味を持たせるイベントって事か。

『何を基準にするオーディションか、それは明かせないけど是非ボクたちと同じ舞台に立ちたいと思ってきてね。』

『アイドルとしてでも、何でも。俺様たちに勝ってると思う事があれば大歓迎だぜ。俺様と競いたかったり、或いは目立って取り上げてもらう目的で企業のアピールの為だったり、純粋なファンとして、キャリアはないけどアイドルになりたい、千差万別どんな理由でも歓迎だ。』

『という訳で告知は終わり！ちょっとブレイク挟んじゃって静かだけど、もしかして今日は皆つかれちゃったかな？へとへとさんかなぁ～？大丈夫かなぁ～？』

――ダイジョウブダヨォォォォォォ!!!!

またも会場を揺るがす声援。ライブは相当な時間やっていた筈なのに、血管のはち切れそうな大声での応援。それだけ人気で親しまれているという事でもあるんだろう。

『それでは、聴いてください。ラブ・ヴァンダリズム。』

曲名を聞いた瞬間に、会場がピタッと静まり返る。

暗いイントロでもない。明るい曲調、可愛い曲調で、殆どが専用のコールの為に待機しているんだろう。だけど俺には分かる。この場を支配する緊張感の正体は、舞台の上の二人の天才。

『ねえ、どうしたっても聞かれても何でもないとしか言えないよ。』
『あなたが傍にいてもいなくても、頭は同じこと考えてる。』
『あなたに出会った日からずっとボクは変になってるんだ。』
『心臓は。』
——バクバク!!!
『頭も。』
——カッカ!!!
『ボクはまだ君のモノじゃないのにね。』
『きっとあなたに壊されちゃった。』
『朝、鏡を見る時間が増えた。』
『嘘、それより君を見る時間が増えた。』
『必死に振り向かせようとする君をみて嬉しい。』

『でも必死なボクに気づいてほしい。』
『君の為に変わっていくことに気づかないかな。』
『ボクは君が気に入っているボクを壊して変わってしまうから。』
『好きになって欲しくて変わってしまう。』
『一言だけで良い、安心させて。』
『今のボクが好きだって、』
『抱きしめて、』
『顔をなぞって、』
『でないとボクが君のモノって安心できない。』
『『ねえ、教えて？』』
——ダイスキ!!!!!!

その曲の後は合いの手が激しい曲を彼らが二曲歌って、アンコールで今日の全部のユニットを三分割して歌った三曲で終わりだった。

印象に残った初めの曲の一番。その事を考えながらすっかり暗くなった外を眺めながら車に揺られている。如何に栂園が嫌いでも、あれを見たあとで、あのライブに関して悪口は出てこない。

「あの二人がすごかったな。点数も最高の８．１、８．２、８．０だから技術だけで見ても別格だった。」

「そうだね。栂園、昔よりも歌がうまくなってた。それに、栂園よりもダンスが上手な子がいるとは思わなかったな。」

歌も見た目もダンスも、すべてが完璧な栂園。対して、功刀はダンスにおいて栂園よりも天才的な中学生。

信じ難いが、あいつはアイドルなんだ。

「それで、何か分かったんすか？」

何か？恭平は何を言ってるんだ。

「いやポカンとしてる場合じゃないだろ。何らかの理由があって招待されて、ライブ前に直接話してもピンと来なかったんすよね？じゃあ、他に何かメッセージがないとおかしいじゃないすか。」

「私が気になったのは、例のオーディションを直接伝える為とかかな。他はちょっと思いつかないよ。」
「俺もそんなところだと思ってるんだけどな。」

あんな変な手紙の山を渡す相手がそんな単純な事の為にとは思いづらいが、そもそもそんな事の為にライブに呼ぶ事がそもそもおかしいんだが。
ひっかかる、思い当たる言葉。「歌に乗せた気持ちは、近くても遠くても絶対に伝わらない。」があいつの伝えたかった言葉か？今日のあいつの歌にそこまでの気持ちが籠っていたのか？

だとしても恋愛経験の皆無な俺に、ラブソング系の心情なんて図りようがない。シンプルに、現在あいつが恋をしているか、それとも失恋かの完全な二択。
――でも、あいつアイドルだし、恋はないだろ。
「まあ、思い当たることがない訳でもないし、ちょっと栂園にアプローチしてみるか。」
「マサって彼の連絡先を知ってるんだっけか？」
「奴の捨てアカとダイレクトメッセージでつながってる仲だ。」
「にっしー、その関係は仲って言葉を使うべきじゃないよ。」

振られたのか？と、送信しておくか？流石にナイーブな問題だろうから喧嘩腰にはしないでおこう。本当にそうなのだったら、幾ら栂園でも道場するから慰めてやろうか。
振られたからといって落ち込むな、と。送信しておくか。

「あっ。」
「何か返事あったの？私にも教えてよ。」
「いや、ブロックされた。」

勝手な奴。しかしそのうち来るだろうあいつからの連絡は、ブロック解除か、新しい捨てアカで問題は起きないから放置しておくか。基本的にあいつからの連絡だしな。
間違っていて失望されたらそれで構わないし、そうじゃなければ次に会った時は少し優しくしてやろうか。

「この辺ってマサは詳しかったりしないか？流石に飯食ってから帰りたいすわ。」
「来たこともないから適当に調べたところでいいか？」
「いいぞ。充電忘れてケータイ使いたくないから頼む。」
「調べるなら一旦コンビニあたりに車停める？」

「恭平は本当に煙草以外はまともに持ってないな。近いからラーメンでよくね？」
「いやちょっと僕、この時間にラーメンは……。」
「ラーメンで良くね？」
「さっきの約束つかうならいいっすよ？」
「ハンバーグ屋とか。」
「うーん。まあそれなら僕もやぶさかではない。」

因みにハンバーグ屋に対する俺たち三人のレビューは９．０、８．３、６．０。ちょっとしたお遊びとはいえ、恭平の喫煙席が無い事に対する減点が大きすぎるんだが。

財布を忘れてた事を思い出したヤニヒラくんの代金は俺が払いました。

ポジションと距離感

約束の日になってしまっている。葉山と一泊二日で出かける日。

このところ、栂園からの働きかけはなく平和な日々。本当か確かめる為に普通に出かけたり、元々の持ち家の周りをうろついたり。友人と集まったりもしたが、特に何もなかった。目先の問題が薄れ、故に、普段の自分の振る舞いを見直すきっかけが出来た。振り返り、立ち返り、近頃は世間の常識にも慣れてきたなと思ったところ。

思ったところ、疑問点が出来た。

葉山に抱き着かれ過ぎではないか？

世界の常識が全く真逆にひっくり返っているとは、身体構造的には考えにくい。今でもそう思っている。だが状況証拠だけで考えるともう言い逃れはできないのかもしれない。

事情を知らない他人にとって、度が過ぎたボディタッチとか、同棲してたりとかをどう思われるのだろうか。個人の見解で言えば、同棲してるという事実はもう傍から見れ

ばって男女の関係と思われても仕方ない可能性はある。まあ、それはそれとして。

仮に、本当に、言ってた事が真実で、栂園がちょっかい出しに来ないと信じるのであれば、元の家に帰れば良いだけの話だ。勿論その通りだし、俺が口に出していないだけで家主たる葉山と妹の咲はそこらへんの話はしているんだろうなとは考えている。

俺から言い出さない理由は一つ。

趣味が合う友人と毎日ノータイムで遊べるのがクッソ楽しい。

二人が暇な日に、昼からゲームするかアニメ見るか、何かして飯食って続きってのが相当に素晴らしい。決められた日数の中で友達の家に集まって雑魚寝してでもやり遂げるようなものとは違い、続きを焦る必要はなく馴染みある寝床で一日の疲れを癒す。

妹と一日遊ぶなんてことは無かった。色々と事情があったとはいえ、こっちでもそうだし事情がなくとも元々、中学以降、咲とはソファーに並んでテレビを観るなんてした記憶はない。家族の中で仲が良く趣味の合うのなら、近しい兄弟なら猶更、一日中ずっと遊ぶような事もあったのだろう。俺は咲と仲良くしたいとは思っている。反抗期が収まってアニメ視聴マラソンが出来るくらいに仲良くなれればよいのだが。

話は逸れたが、正直、恭平や清哉と並ぶくらいに葉山は親友なのだ。最近の夜中にある騒音被害――生理的欲求の処理に伴う声は聞こえるが、それ以外は特に大きく困ってもいないから別に構わないかという気持ちだ。

故に友達と遊びに行くような気持ちだと、恭平たちに言ったら相当に怒られた。

なあなあで、済ませようとするのは互いに良くないとか。頭に行くはずの栄養が取られてるとか。小学生レベルのお花畑だとか。男女の友情は成立しない云々とか、色々と言われた。

曰く、礼節であるし気持ちを汲むべきだし何よりも男なのだから当日はオシャレをしていくべきだとも言われた。余計なお世話だ。普段からそれなりに気を付けているし、あいつらに会う時でも適当に服を選んだつもりはないと返したが、高いアベレージと頭を捻ったものは違うと諭された。違いは未だに分からない。つまりは普段と違う趣の格好をするべきなのだろう。

納得はしていないが、彼らの言葉に従う方が自然な振る舞いなんだと思う。説教された後、暫くはそう思っていた。

しかし、その話し合いの結果、俺のスマホに入った『異性とのお出かけ手引書』と題

された文書ファイルをある程度守りながら遊びに行かなければならなくなった。説明を受けた時、こんなものを作るためにあいつらが俺に内緒で集まっていたかと思うと、暇な奴らだなと感じた。そして、彼らもまた、一般の男性のスタンダードから大きく離れた奴らであると再認識した。

そもそも、手引書と名付けたものであるが実態は違う。

六割以上は清哉の惚気が混じった内容で、成人した異性同士の距離感に対するハウツー本としては二流もいいところ。恭平のやたら傷を負った恋愛観と、この文書の読み手がすべき事ではなく清哉がしてもらって嬉しかった事が大部分を占める。価値観を知る意味で読み物として相当に面白いが、題名とはかけ離れた存在だ。幾つか無難な、抜粋して出来そうな事を試して、彼らには役に立たなかったと伝えればよいだろう。

役に立たない雰囲気が満載のこの文書で新しく知った実体験による知識。中でも興味を引くのは最後の、つまり男女の駆け引きの終着点の話だ。様々な媒体から得た知識として薄々感づいていたがアレは死ぬほど痛いらしい。そしてこれが書いてあるという事は、清哉は大人の階段を上ったという事であるのだろう。友人の性事情の報告なんて聞きたくもないと思っていたが、元々保有する知識と違うのは特に性差であり、最たる例である行為への好奇心が勝った。

知識は知識。この世界基準だと一般女性の一回の発射量はゼリー飲料と同じくらいか少し多め。それを無理くり注入されるのというのだが、明らかにこの世界の方が受け手が体を張っている。そんな事情で、ゴムでどうにもならんと思っていたがその通りで、避妊は飲み薬で頑張るしかなかったりする。

『だから気をつけろ。』とも書いてあったがそんな予定はない。

少なくとも小さな一部とは言っても体をこじ開けられて液体を注入される事に慣れるまでは痛みが伴う事に加えて、薬を飲むのは男側だから体調を崩しやすい。諸々の事情が重なって、男子は性行為に後ろ向きな世の中。

とは言っても生で行うしかないから間違いが起きやすく、出生率はまあまあ高い。

重ねて、誓って、知識としてであり、行為そのものを実行する事にはそこまでの興味はない。それでも俺も恭平も経験はないから、清哉の体験談的な文章に対して流し読みする程度の価値はあるかと思っている。ごく自然な話である。他の惚気に対しての興味が希薄過ぎて他に目を通そうと思えるものがない事が原因でもあるのだが。

同時に思ってしまう。すっかり性欲が減ったな、と。

どう思い返しても、俺は夏のあの日に葉山宅へ行く理由は本当にアニメを友人と観る目的だったのだろうと今更ながら、理解した。大学生、男女の泊りで避妊薬くらい持っ

ていて然るべきで――つまり今は最悪に備えて持ち合わせてはいる。あの時に無かったという事はする気がなかったか、中学レベルの性知識すら無かったか。

長々、くだらない思考に耽っていたが、ここは宿泊場所のエントランス。

ようやく、手続きを終えた葉山が戻ってくるのが見える。宿泊場所到着後、葉山が手続きしてる間にソファに座って待っていたのだがかなり長く時間がかかり暇つぶしに例の文書に目を通していた。だが、まさか性行為の事を考えてたとも言えないだろう。

葉山にそのまま伝えるのもそうだし、普通の宿泊施設の中でセックスの事を考えていたと言ってのけるなんて言語道断だろう。葉山だって、そんなつもりはないんだろうし――元はといえば多少の下心ありきで葉山との数年ぶりの再会を望んでいた俺が言えた話ではないんだろうけれども。

「チェックインできたから部屋に行こっか。荷物おいてすぐにプールで大丈夫？」

「そうだな。飯が混む前には切り上げるけど、今からなら結構長く遊べるだろうからな。」

「部屋で休むほど長く車に乗ってたわけでもないからね。荷物は重くない？」

「前に葉山の家に行った時とそんなに変わらないくらいの荷物だぞ？これくらい訳なく

運べる。」
「あの時と変わらないくらいの荷物って、今日もかぁ……。」
「どうした？」
「いや……、なんでもないよ。早くプール行こうね。夜更かしとかできないくらい疲れる位に遊ぼうね。」

葉山も最近は疲れてるみたいだから今日は遊んで良いもの食べてデカい風呂で休んでくれるといいんだが。
特に眼精疲労なのか、寝起きにアイマスクを持ったまま部屋から出てくる事もある。寝付いたかと思っても夜中の三時くらいに、例の騒音を発す事もあるから疲れているならさっさと寝ればいいのにと思う。
寝かせる為に今日は酒でも付き合うかな。

プールという人気なレジャーではあるが、シーズン外れな上に平日の昼間という事もあり、ガラガラな更衣室。温水プールではあるが屋外に備え付けられた場所もある為、寒いだろうなと思う。設備を十分に楽しむんだったらもう少し早い時期だと温水プー

ルのシーズンなのだろう。旬を外したとは言っても真冬には程遠いし羽織るものは必要ないだろうかと考えて、そもそも持ってない事を思い出す。

俺以外は殆ど更衣室の入り口に付近に集まった男子。そして大きく掲示されている『プール内はメイク禁止です。』の文字。不満を漏らしながら洗面器の前でメイクを落としているのが見える。まあ俺は落とすのが面倒だから今日はすっぴんである。今更、である。

今まで葉山には見られずに生活するのは不可能だったから、今日はどうせメイクしても落とす事になるだろうからしなくてもいいと考えて朝からしていないのだ。勿論、気合を入れろと言っていた友人たちには内緒である。彼らの言う気合、礼儀とはメイクなどの細かい事さえ含むのだろうが面倒だから、仕方ない。

つけたり落としたりも面倒だし、興が乗ったらプールで遊び終わった後にすればいい。正直、何をするにしても欠かさないという意味では、この世界の雌たる男子たちには頭が上がらない。騒ぐような事はしていないがざわざわと音を立てて愚痴を零している彼らを背に着替え始める。彼らがメイクをいい感じに落とすのに必死なように、俺もいい感じに水着を着るのにかなり必死な訳だ。

何故頑張るのか、簡単な話が上手く全てをいい感じに収める為だ。包み隠さずに言うのならば、イチモツのラインが水着の上からバッチリと把握されるようだと恥ずかしい

から、玉を寄せてあげて出来るだけ誤魔化したいという話だ。無論、確実にどうにかしたいのであればスポーツ用品で言うところのファウルカップのような、元の世界でいう胸パッドに近しいものだって存在する。

過ぎたるは猶及ばざるが如し。デカけりゃいいってものではない。合うサイズのパッドが無い。だから四苦八苦して、いい感じに、チンポジを直す。納得できてからプールへと赴く。

少し時間を使い過ぎたかと思いプールに向かうが、更衣室を出ても葉山の姿は見当たらない。集合場所も、方法も決めていなかったと思い出す。俺ならともかく彼奴は背が高いから目立つだろうと探しながら待つ事、体感3分。慌ただしく、女子更衣室の方向から歩いてくる葉山の姿が見えた。俺を探しているんだろう、左右を見回す頻度が半端じゃないが、あんなに頭を振ってたら見えるものも見えないだろ。何をそこまで動揺しているのか。

案の定というべきか見つけられないらしい。相当にガラガラなプールなのだが遅れてテンパっているんだろうか。こっちでは視認できているのに気づかないから、少し後ろから脅かしてやろう。

「おう！」
「ひょはぁ！――びっくりさせないでよ、もう。心臓が止まるかと。」
「そんな驚くと思わなかった。すまん。」
「いや謝る程でもないし、私こそ待たせてごめんね？」

たった数分だからそれこそ謝るものでもないが、まあ変に掘り下げても無駄に時間を使うだけだろう。
まあただしかし何はともあれ、生まれて初めて女子とプールに来たわけだけども、隔てているものが布一枚だと思うと流石に意識してしまう。灰色の縞々の上下で、無難な感じだ。
夏の頃から分かってたけどスポーツしてるからか体はしっかりしててスラッとしてるしその上ゴツゴツしてるわけでもなく、程よく柔らかそうにも見えるし、実際、寸胴とは言えないくらいにははっきりした起伏がある。
特に脚がスラーとしていて全てがキュッとしている。
ガン見するのもおかしいし、しかし普通に目を合わせるにはちょっと気恥ずかしさが出てしまう。

すすす、と逸らした視線の先に葉山が動いてくる。
「にっしー、怒ってる？ごめんね？」
「そういうんじゃない。」
「先にボール使っていいから、これで許してくれない？」
「いやガキじゃないんだし……。」
ビーチボールを差し出すと言った葉山。そう言葉にしたが、ビーチボールなんて目立つものを持っていたか？気になって視線を向けると、一切の膨らみのない買いたての紙風船みたいなものを差し出していた。

「べっこべこじゃん。」
「これ忘れて、取りに行ってたら遅れちゃって。」
「だから遅れたことはどうでもいいって言ってるだろ。」
「じゃあなんでこっちを見てくれないの？」

何故と問われると、矢張り説明するのは乗り気ではない。
葉山がチェックインしてくれている間にセックスの事を考えてたから、水着姿を見て意識してしまって直視できない。これが殆どすべてなのだが、馬鹿正直に言えるわけが

ない。

だって、きっと俺以外は感じないのだ。この世界の興奮してポコッと隆起する子宮がお腹に浮き出る事に、必要以上に背徳的な気持ちを感じるのはきっと俺しかいない。だってその隆起は言うなれば元々の俺の常識に基づくところの男と同じだ。別に性的興奮に限って大きくなったりする訳ではない。だから異性は仮に大きくなっているものと対峙しても見て見ぬふり、言及はしない。しかも直接に触れ合う部分ではないから性的な目で見られる事は少ないらしい。

この世界では、プールで女性が勃起する事の恥ずかしさはお腹周りにだらしない贅肉がついているのを晒す事と大して変わりない。若しくは、静電気で髪型が変になる程度の恥ずかしさ。別にプールに限らずだが、可変性の恥ずかしさであり、どちらかと言えばだらしなさの部類である。

だから、女性が俺のよく知る知識通りにお腹を外気に晒す水着を着ていても俺以外は気に留める事はなく。きっと俺が目を逸らす理由はきっと誰にも同意してもらえない。この世界のポルノ的には、機能十全な腹部の盛り上がりを映す事は大丈夫で、しかしその内臓に続く入り口はモザイク。進んで鎮める場合は、モデルが写真を撮られる際に、治まるまで待つ程度の話。

悲しい事であるが、俺は未だにウブなネンネである。これはきっと、世間の常識に関

わらず、元より興味関心と相対した時の緊張がかみ合わないのは生まれてこの方なのだ。きっとあらゆる免罪符があっても俺は異性の水着姿も、或いは裸であっても目を合わせる事は出来ないんだろう。

つまり、何が言いたいか。葉山には察して欲しかったが、期待に反して鈍いところに困っている。言い訳、虚言、出まかせ、何でもいいから俺はこの場を切り抜けなければ葉山に弱みを握られ、今後の普段の生活でも揶揄われかねないのだ。

夜中の騒音も普段の風呂上がりの姿も、俺にとっては気が気ではない事を、克服するまでは察知されてはならない。身の危険という観点でも、性的な視点から苦手意識を持っている事は知られてはならない。

性に関して興味のない、葉山の親切からなる同居人。それ以上でもそれ以下でもなってはならないのだ。

誇りにかけて、ムッツリだと思われる訳にはいかないのだ。

「……だって恥ずかしいだろ？」

これに何故か、と問われればどう返すべきか。決まっている家族以外の女性とプールに来たのは初めてだからとかなんとか、要するに適当に返せばいいのだ。咲と最後にプールに来た事さえきっと咲が覚えてないくらい昔の話ではあるが、嘘ではない。

対する友人は凄まじく面倒くさい事を知っている。葉山は良い友人だが、一を言って十を知ってくれる部類ではない。だからこういう問答とそれに付随する返答を予測して順序立てて誘導する会話、殆どが頭の体操で、疲れる。それでも思い通りの結果になる事は多くない。

元より、今まさに水着姿をガン見してくる葉山にとっては異性の水着姿を見るのが恥ずかしいという気持ちは分からないんだろう。それでも誤魔化さなければならない。

見慣れないから恥ずかしいのであって、断じて、性的な目で見ている訳ではないのだ。この体になって、性的欲求はさっぱり消えた筈なんだ！

「ふーん。見られるより見る方が恥ずかしいなんて珍しいね。というか、にっしーって恥じらいとかあったんだ。」

「喧嘩売ってんのか？」

「そんなつもりは無いけど、この前のライブとか考えるとさ。男子の恥じらいの線引きがよくわからなくて。あと、一緒に住んでると余計に恥じらいの線引きがわからないん

だよね。」
「オーバーに反応してもしゃーないだろ。普段から視線向けないようなことだってあるし葉山だって黙殺してくれてることもあるんだろうから。」
「んん？ん～。」

誤魔化せたか？納得してもらえているか？
顎に手を当てて悩んでいる葉山は放置して、ビーチボールを膨らませておく。節度ある年齢で、ある程度は言いたい事を理解してくれるだろう。変に踏み込んだ質問とかをされなくてよかった。如何に、葉山の察しが悪いとしても互いに暗黙の了解と思っている部分もあるんだから寧ろ譲歩して気遣い合いましょうと、理解してくれるだろう。
このまま無難に会話してさっさと水に入ってボールをポンポンしながら世間話をすれば万事解決だ。
「本人の待ったがかかるまではアクセル踏んでもいいってこと!?」

反射的にボールをぶん投げたのは俺は悪くないし、超至近距離で受け止められた事に更なるムカつきを覚えた。

現状でも認識の差があるから歩幅を合わせる努力を互いにしましょうって話で、更に足早になろうとする事が信じられない。話を聞けよ！

互いに、黙殺してる部分があるだろうから気を付けようって意味を、なんで黙殺してるうちは許されるって解釈になるのか？多分、葉山の許容範囲に対する暗黙の了解がそうであるって事なんだろうな。

「これブレーキ？」

「それ投げたら語るまでもなくブレーキだし、エンジンブレーキを自己判断でしないと、葉山にとって大変なことになる。」

「どれくらい大変なことに？」

「四月からのお前の勤め先に、軟禁されていましたって電話かける位の大変さは覚悟しておけ。」

ここで、漸く葉山は俺の言いたい事の半分くらいを理解したようだった。苦手を無理強いしない事。そして軽度とはいえセクハラ染みた事を口にしない事は理解してくれたんだろう。もう半分の理解はしなくても、俺が歩み寄ればいい話だ。

「……あっちに流れるプールがあるって。」
「っしゃ、行くか。」

ボールを再度、手渡され、無理くり視界に入らないように後ろから両肩に手を置かれて電車ごっこのようなポジションになる。肩、まあ肩を触れられるくらいは別に構わないだろう。

何を隠そうプールの種類で一番好きなのは流れるプールである。波が立ったり、スライダーしたりも嫌いじゃないが、行動制限の少ないシンプルなギミックが好きなのである。レースゲームも珍しくない世代で育ったからか、一周区切りというのも嬉しい要因であり競技用プールにおけるターンの存在しない所がより好みだ。世界中を探してもあんまり賛同を得られないだろうけれども、流れるプールとはつまりハムスターが走って回すやつの人間版最高級品みたいなものだ。

すなわち、とても楽しみだという事。

「ああそうだ。にっしー、黙殺の件なんだけどね。」
「どうした？」
「今、ボールを渡したでしょ？ブレーキ、一回目ってことで。」

「おう？」
「今日はゆっくりしたいから、にっしーが荷物に入れてきたアニメは絶対に観ないからね。互いに、眼精疲労とかもあるし普段も週に三日より多いのは辛いかな。」
「あ～、はい、ごめんなさい。」

歩み寄れば、良いだけの話なのだ。